

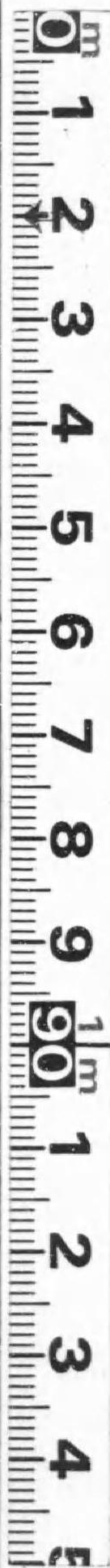
大畑町誌

特214

542

下北新報社發行

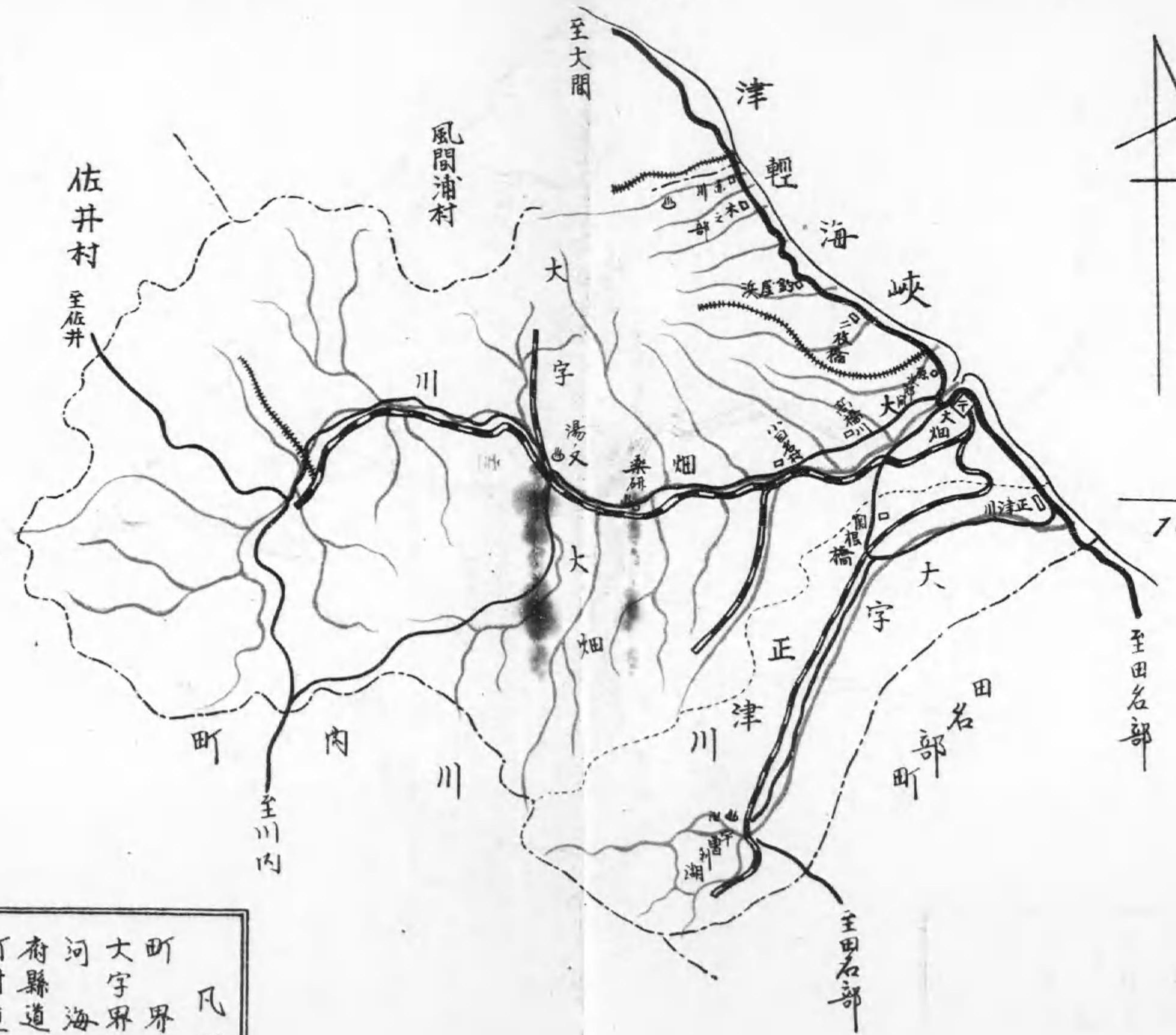
始





# 大畑町全町圖

特214  
542







はしがき

郷土の研究といふことが、此頃各地に盛に行はれ出した。郷土の過去はどんな状態であつたか、乃至どんな事柄があつたか、或は又、どんな人物があつたか、と云ふやうな事が研究されるに至つた。斯く過去を探究して、更に現在に思ひ合して見る事は、總て將來の興隆に資する事になるのである。此「大畑町誌」の編纂も畢竟するに大畑の過去を探ねて、將來發展の参考に供せんとするものである。

大畑には幸ひ貴重な文献がある。彼の村林源助翁の書き遺された「原始漫筆風土年表」五十巻がある。之を基礎として此「大畑町誌」を編纂し、茲に出版するに至つたのである。内容は未だ不充分ではあるが、他日増補訂正して再版の機あるべきを誓ふものである。

昭和九年十一月

下北新報社内  
編者識









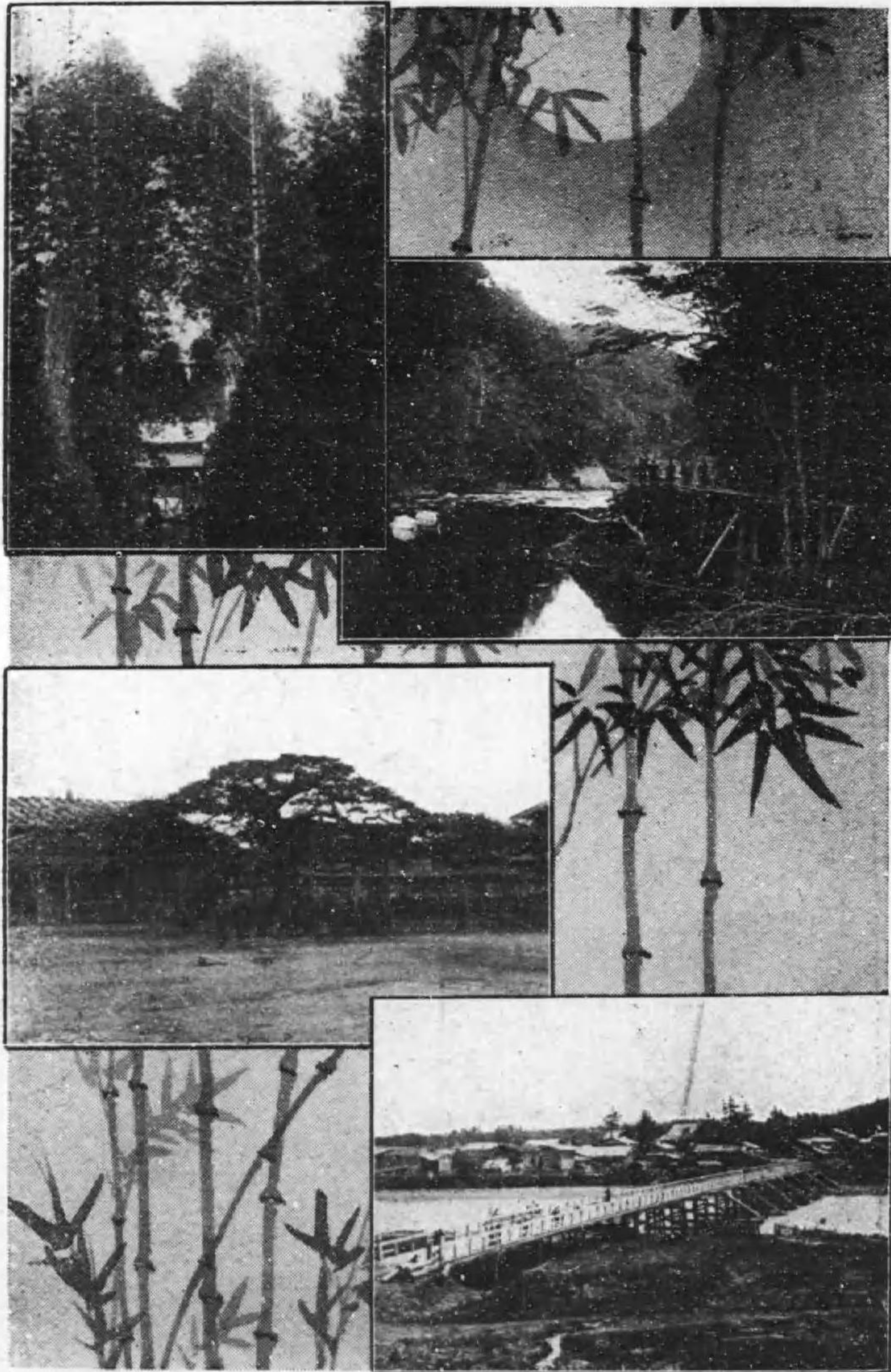
三(大畑風景)

上より(一)大安寺の杉林

(二)薬研の溪流

(三)名木三笠松

(四)大畑橋



# 恐山保勝會

事務所 田名部町役場

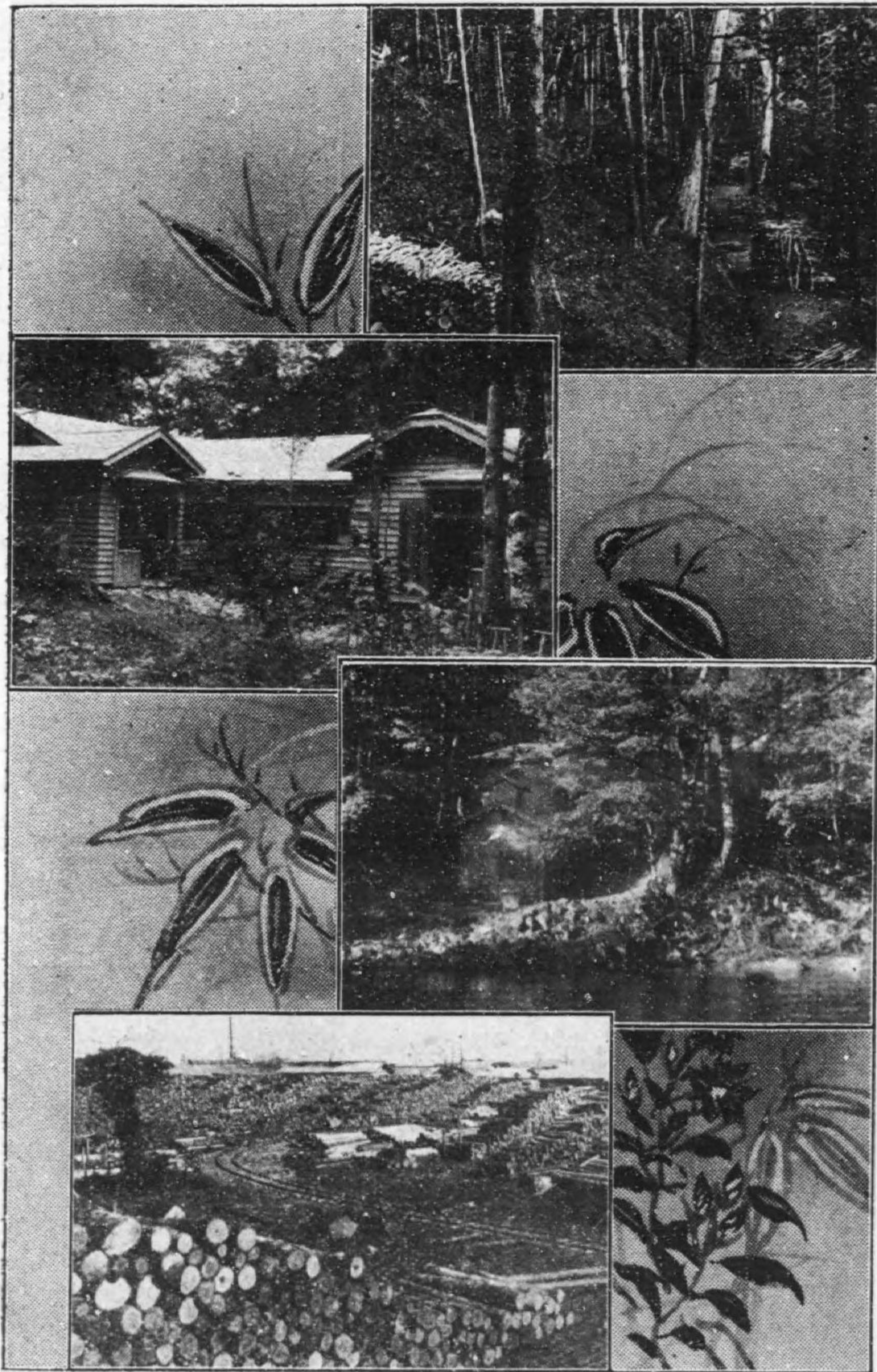
# 薬研保勝會

事務所 大畑町役場



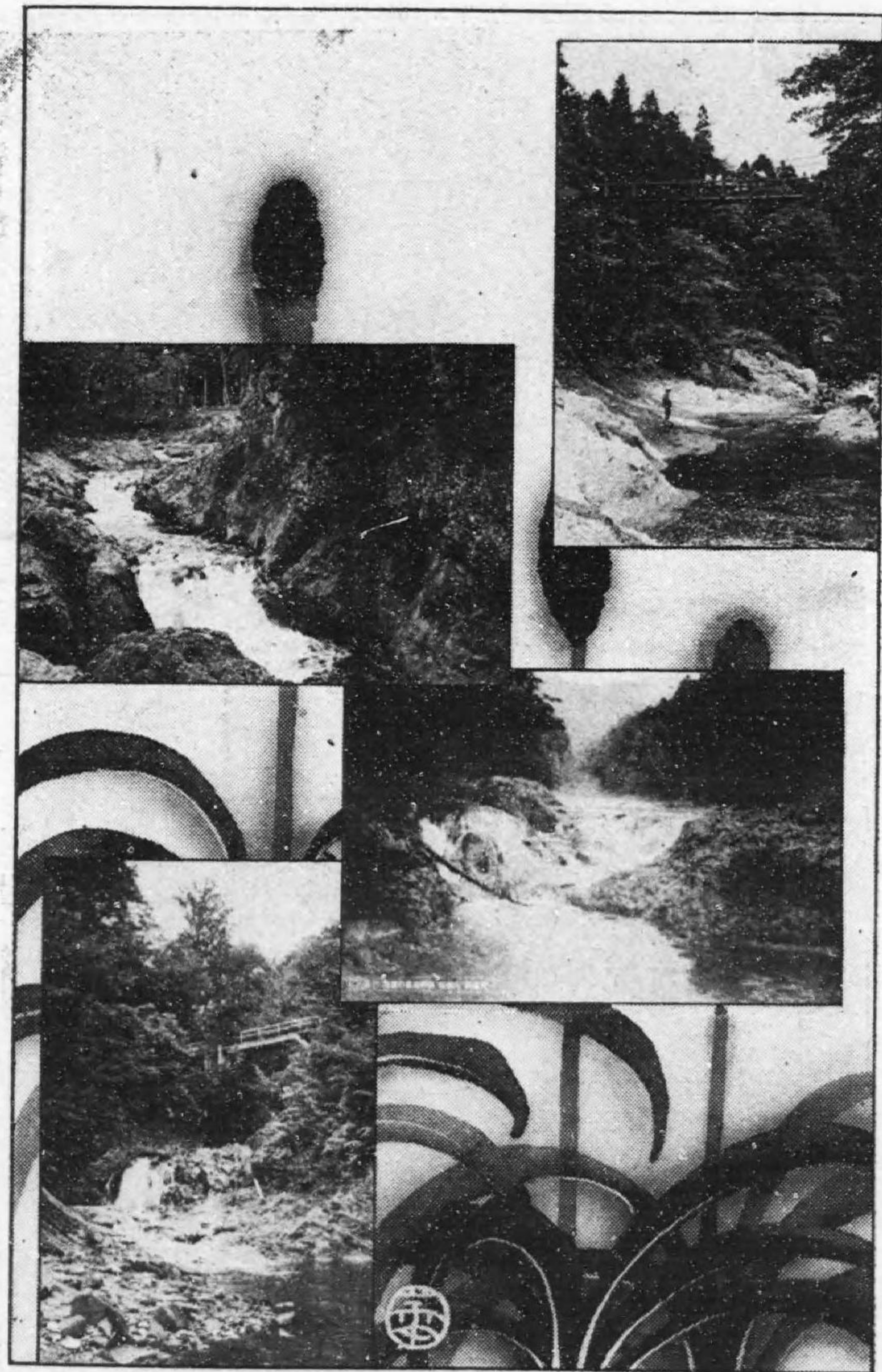
…(大畑營林署施設)…

上より(一)羽色山楡林(二)湯ノ股療養所(三)湯ノ又温泉(四)大畑貯木場



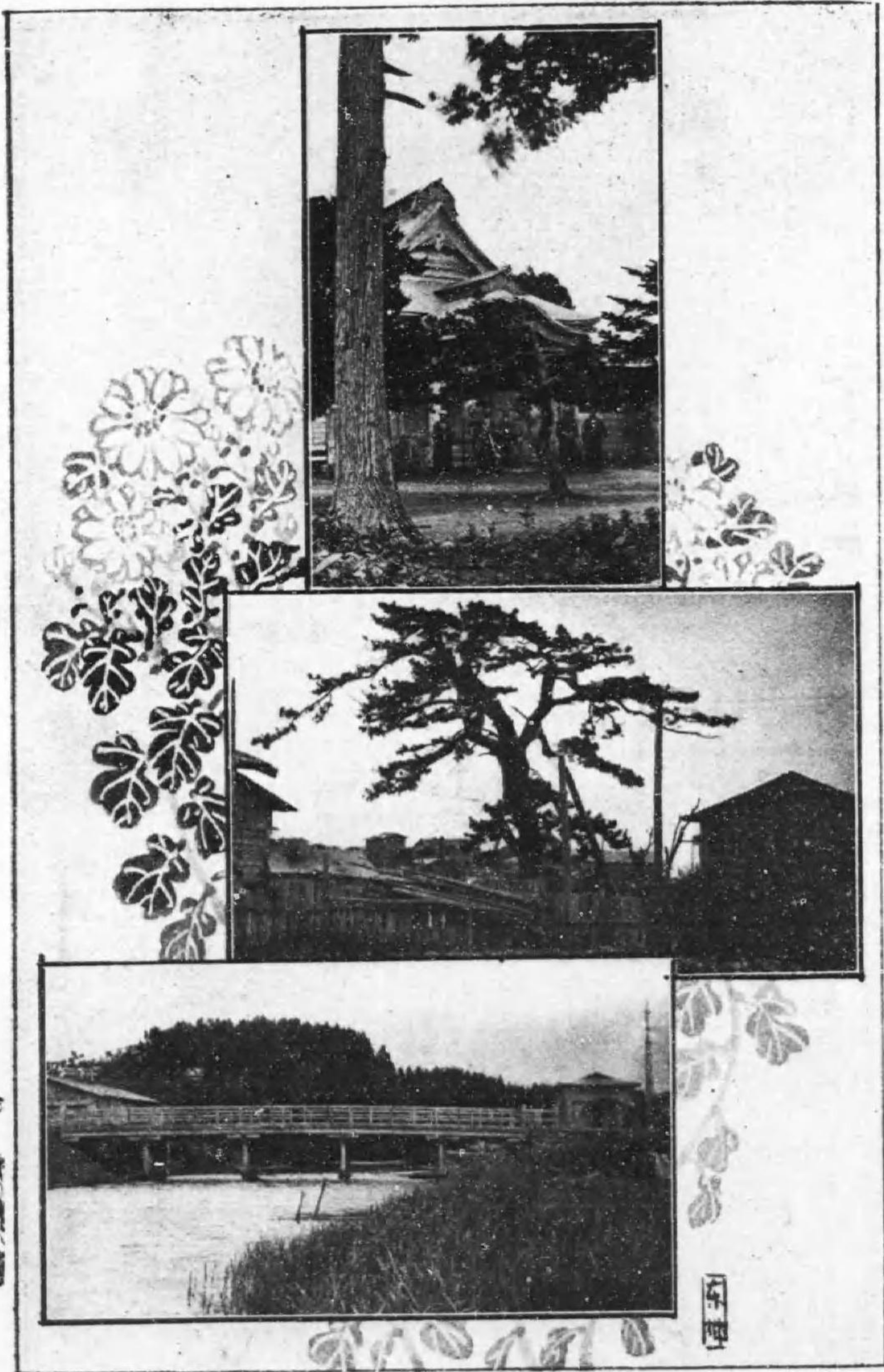
…(藥研風景)…

上より(一)釣り橋(二)大瀧(三)鯨瀧(四)釜ノ澤

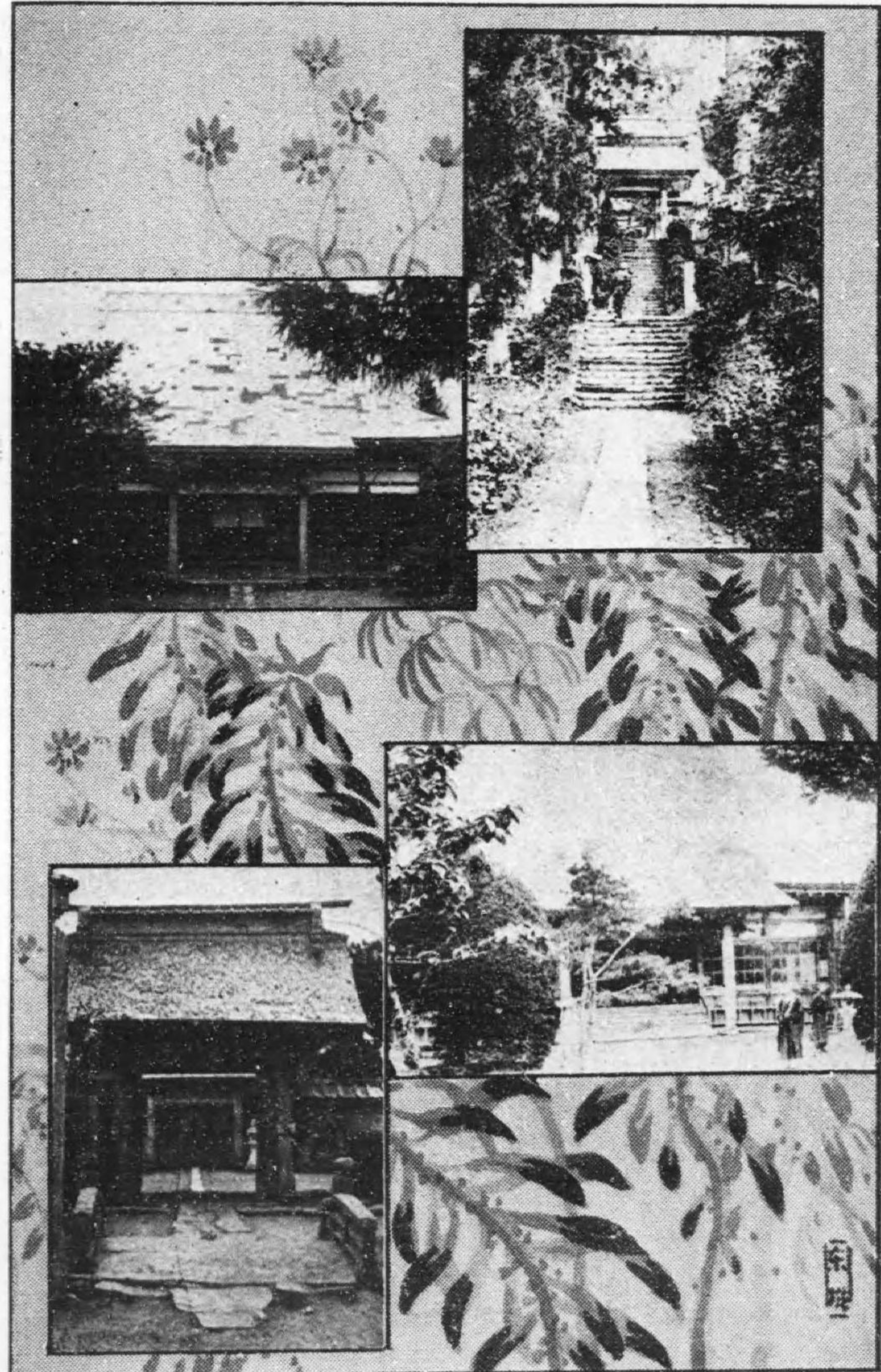




…(正津川)… (上) 優婆堂 (中) 優婆松 (下) 正津川



…(寺院)… 上より(一)大安寺 (二)寶國寺 (三)正教寺 (四)心光寺

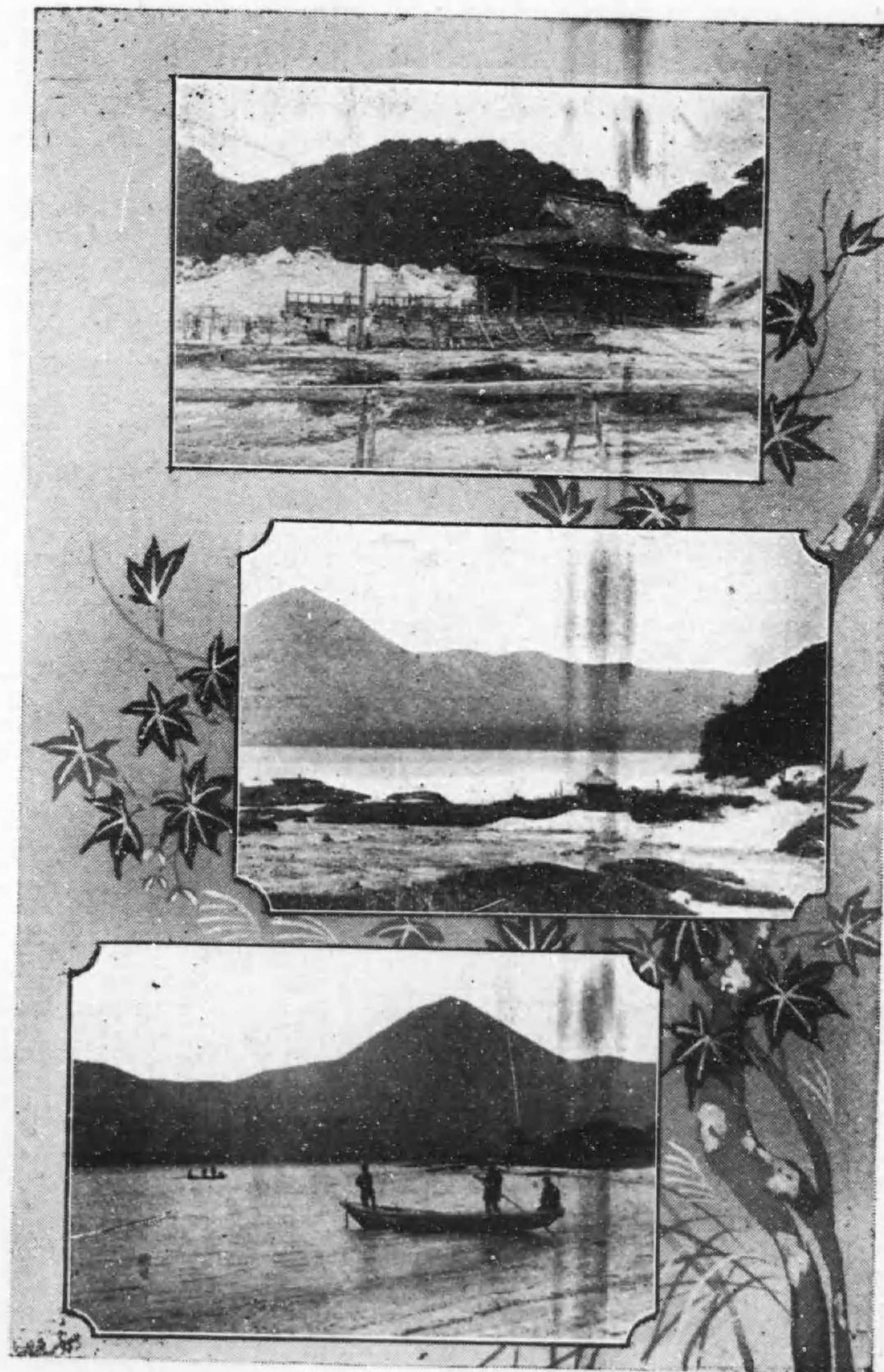




漁イサ 火 如 星 映 水 研  
 乾 坤 風 死 宿 禽 眠  
 明 朝 錫 架 定 豐 獲  
 銀 漢 涂 流 大 盡 顛  
 不 聽 逸 史 不聽逸史 不聽逸史



(大畑港の漁船輻湊)



…(恐山靈場)…  
 (上) 地藏堂 (中) 賽の河原 (下) 宇曾利湖



(乾鰯の架場)



(國有林ヒバ材の斫伐)



# 大畑町誌

笹澤魯羊編

## 大畑町

大畑町は北海峽に瀕して、遙に北海道龜田郡尻岸内に對し。東烏澤の耕地に田名部町と連り、南釜臥、北國、大盡、朝比奈等群峰攢竦の間に大湊、川内兩町と犬牙し、西荒川山脈に佐井村と交り西北燧嶽山脈に風間浦、大奥兩村と錯る。廣袤實に十六方に達する。

大畑は舊松前渡航の驛路にして、代官所を置きたる事あり、田名部、川内と併せて田名部通の三町と稱した。古來、檜を産したるにより、江戸、大坂及び兩越、加賀、能渡方面と船舶の來往繁く大いに殷振を致した處である。明治維新に際し、大畑村、正津川村、下風呂村とを以て、第六大區第三小區と稱した。維新以後山林制度の改革と、松前に於ける漁場の革新とにより、從來山林の惠澤ミ、松前漁場の利潤とによつて、生活し來れる住民の多數は遽に困憊し。松前に移住する者續出



し、明治十六七年頃には本町、東町等空家を生ずるも購ふ者なく、之を毀ちて薪に焚くの珍現象を呈した。町村制施行に際して、大畑村を大字大畑、正津川村を大字正津川となし、此二大字を以て一行政區劃とし、大畑村を更稱した。此頃より鱒漁業發達し、柔魚漁業も勃興し、引續き鮭漁業初まりて稍活況を來したるが、更に國有林の斫伐事業起るに及びて、村勢漸く振ふに至つた。昭和七年の大火は却て躍進の動機となり、河口の改修と相俟ちて、迅速なる復興を遂げ、昭和九年五月一日町制を實施した。現住戸數一千四百、人口七千五百。物産に錫、鮑、鱒、鱈及檜、杉、桐材並木炭等を産する。

## 大畑

大畑は往古、深山神社の附近に人煙したりと云ふ。現在へ移りしは天正の末より慶長の頃ならむと云ふ。最初に南町が軒を並べたのである、南町をメツタ町と呼べるは、芽出度町の訛だと云ふ。次で本町が出來た、之を大町とも呼ぶ、引續き東町が建つた、此町にて昆布を取扱へしによりて、昆布町と通稱した。昆布倉は横町に在つた。湊は寛文七年福士源五右衛門開いた、最初六軒なりしが翌々年に二十一軒と増加した、然るに湊の斯く家建増さることは、元村の發達を妨ぐるに抗議が

出た程である。新町は延寶二年に檢地して建初めたが、川を控へて水利の便ありし故か、直に家が建増さつた。東町は初め六、七軒より伸びなかつたが、元祿五年新に地面割をして漸く建増さつた。最も後れたので新丁と云ふたのである。延享元年市札を賜はりて、大畑町と稱した同時に宿老、檢斷を置いた。

大畑の家數は享和二年調にて南町五十、本町六十九、東町四十六、新町百三十四、湊九十五のべて三百九十四軒。枝村は高橋川五、小目名二十八、二枚橋十五、釣屋濱六、木野部二十八、赤川十五、總じて四百九十一軒であつた。川向は文化八年に至り四軒建つた。孫次郎澗其後に建つた。

古道川の支流は本門寺の後ろから中島に貫流



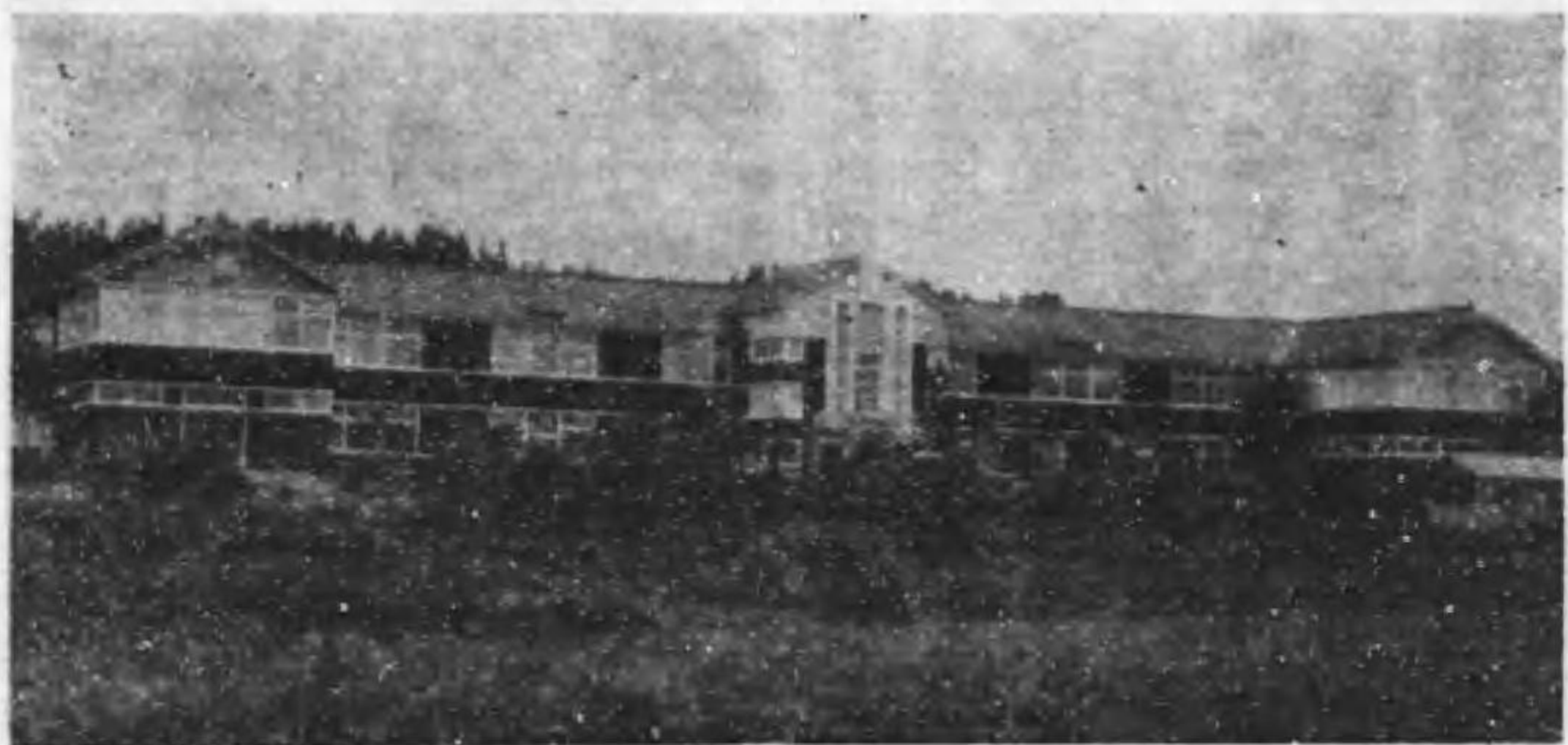
(大畑市街)



して、川幅二間程あり、各間屋にて年々手入するので水排けもよく、大畑川から荷舟が自由に通つた。

大畑の開拓者を大畑十郎兵衛とする説がある、此十郎兵衛は五戸の戸來村に居たが、北部に來つて此地を草分したと云ふのである。戸來村の石上神社、野澤村の三嶽神社の兩社頭、左右に武者の木像があつて、右を大畑の十郎兵衛、左を柿ノ木ノ齋藤と呼んで居るさうだ。又一説には、康正の昔波多城があつて、城將を畠因幡と云つた、畠氏は蠣崎の亂後に歸農して、大畑順右衛門と改めた、此順右衛門が則ち開拓者である云ふのである。

蠣崎方の城將若くは士大將は、戦争の後に大抵切腹して居るのに、畠因幡一人免れたのは如何なる譯であつたか。此戦に蠣崎方の兵糧奉行、中津川七郎右衛門は八戸勢へ内應して居る、昔は大畑川を中津川と云ふた。されば此中津川七郎右衛門は大畑に縁故があり、或は畠氏と血縁等もあり、傍々その執成によつて、罪を免れた譯でもあつたらうか。



(校學小等高常尋畑大)

波多城趾に就ては四角山とする説と、涌館とする説との二つあるが。康正の古圖には川の東に波多城が書かれてある故、四角山が正しいやうでもある。四角山は蝦夷森とも云ふ。

### 二枚橋

二枚橋の名は村の東、西兩端に各一枚の板橋を架けて居たに因むと云ふ。東津輕郡三厩村にも六枚橋とて、同じ意義の字地がある。二枚橋は寛政の初年頃迄は、柚稼の家も混り在りしが、同九年よりは全村漁撈に従事するに至つた。現住六十餘戸、中に杉本姓十三戸、濱田姓四戸、吉田、池田、小林姓各三戸ある。

### 釣屋濱

釣屋濱は二枚橋と小川を隔て、軒を連ねて居る。康正古圖に御釣屋とある、或は北部王遊歩の地を意味するものであらうか。寛文の初年に鹽を焚いたことがあるので、鹽焚とも通稱した。現在二十餘戸、中に佐藤姓六戸、野中姓四戸、濱谷姓三戸ある。



### 木野部

木野部は峠を越して、大畑の西に在る漁村である。キノツブは夷語にして、キは萱の意、ノツブは苜蓿又は苜蓿の場所の義だ云ふ。此部落の上方は廣い谷地である。古は萱などの苜蓿場所なりしかと云ふ。

木野部は古より大畑の枝村であるが。大畑とは峠を一つ隔つるによつて、地形よりすれば或は下風呂に屬するが便宜のやうにもある。部落の男達は松前に出稼して、下風呂の根津屋佐賀氏等の支配下にあつた。依て町村制施行の際に、寧ろ下風呂に合すべし云ふ者もあり、多少紛糾を見たのである。當時男子は出稼のため不在勝にて、萬事は留守居の女房達の意見に決するの風あり、結局舊來通り大畑に附くことになつた、大きい大畑に附いて居る方が得策である、云ふ女房達の意見が勝を制した故と云ふ。

木野部は現在六十餘戸、中に笠島姓、川畑姓、竹内姓が多く次では濱田、佐々木、榊姓である。

### 佐助川

佐助川は木野部の西に續く一字である。佐助川の上流に白萩平シロハギと呼ぶ處がある。安宅某の屋敷跡と云ふ。安宅氏は元和の頃田名部の館に出て代官所に仕へたるが、正保の頃更に盛岡に出で、仕ふると云ふ。

### 赤川

赤川は本町西端の地である。大畑の市街を距る二里、村中に二流ありて、大赤川、小赤川と云ふ河の石も土も朱を帯び居るによりて、赤川とは云ふのであらう。源に硫黄山がある、川水に硫黄の氣流る、ためか、此流域に魚は棲息しない。又此川水にて洗濯は出来ない、白い物を洗へば却て垢が著く、綿物なども或は色が褪せる。馬鈴薯や落なども晒すことが出来ない、斯かる悪水の流るゝ故か、古は垢川とも書いた。

赤川は現在三十餘戸、中に二本柳姓八戸、次では澤口、坂本、金澤、宗原姓等である。

### 高橋川



高橋川は鐵山かたやまと通稱する。大畑開闢の地深山の奥四五丁の處に部落して、小目名とは約十町を隔てる。承應の頃に砂鐵を製煉した事があるので、鐵山と呼ばれるのである。現在十一戸、中に山本姓七戸、畑中姓二戸ある。男子は國有林の斫伐事業に働き、婦女子は農耕に従事し、副業に檜繩を製造する。

### 小目名

小目名コメナは大畑川の上流一里程の處に在る。メナは夷語にして合流する處の意だ云ふ。部落は葉色澤、小目名澤、添木澤等の大畑川に合流する地點に在る。

小目名には寛永の頃、久慈才助なる武士住居した、此村の大旦那である。正津川谷地並に出戸平等を開拓の希望にて、關根の畠山掃部を訪ふに、鞍馬に乗つて往來したと云ふ。小目名澤の冠岩にも屢々逍遙したと云ふ。碑に量山覺應信士、元祿十五年午八月四日と刻まれてある。子孫は零落して明治維新前に松前に渡つた、墓は山田源藏と云ふ家にて清掃し回向して居る。

此部落の掟として、村に井戸を堀らぬ事、村に茗荷を植ゑぬ事にして居る。爲めに飲料水は山涯よりの滴り水を貯へて用ゐ、夏季に至つて涸渴すれば川水を酌んで居る。茗荷は川を越して村の向

ふに植ゑて居る。天保九年閏四月十一日羽色山に火が入つて、四日三晩焼續けた大山火事があつた。全村火焰に取卷れたが不思議にも類焼を免れた。村の開闢の場所に祀る、羽色山神社の御利生によつて、一村火難を免れたと噂された。御籤を引いた處「村に井戸を堀らず、茗荷を植ゑぬならば、子孫の代迄も火難を除いて下さる」と御告げがあつたさうで、今に之を遵奉して居るのだ。

羽色山神社は山内長治安信の勸請で、寶永五年九月吉日近江守源久道の鍛へた、長七寸程の寶劍が納まつて居る。三種の神器に型つて劍ミ鏡ミ珠とを奉納してあつたが、鏡ミ珠とは夙に失せて仕舞ふた。

小目名の山頂に觀音を安置し、明王山として祭祀し、鎮守の奥の院として居る。正月の元日には村中の戸主味爽雪を踏んで登山参拜し、舊七月九日の晩には九日盆ミ稱して、初實りものを携へて登山参拜する例になつて居る。登山の男達が戻る頃には、里には踊の輪が大きく賑かに廣まつて居る。

小目名は現在四十餘戸、中に畑中姓十二戸、北上姓十一戸、山田姓八戸ある。男子は多く國有林に出て、官行の斫伐事業に働き、婦女子は農耕に従事し、副業に檜繩ひなはを製造する。

村の川原一帯に、樺太の奥地に見るアイヌ小屋の如き、小さな掛小屋が並んで居る、之は副業の檜繩を敲く場所である。檜の皮を乾燥して敲くために、火氣の危険を慮り住家より離して、川原に

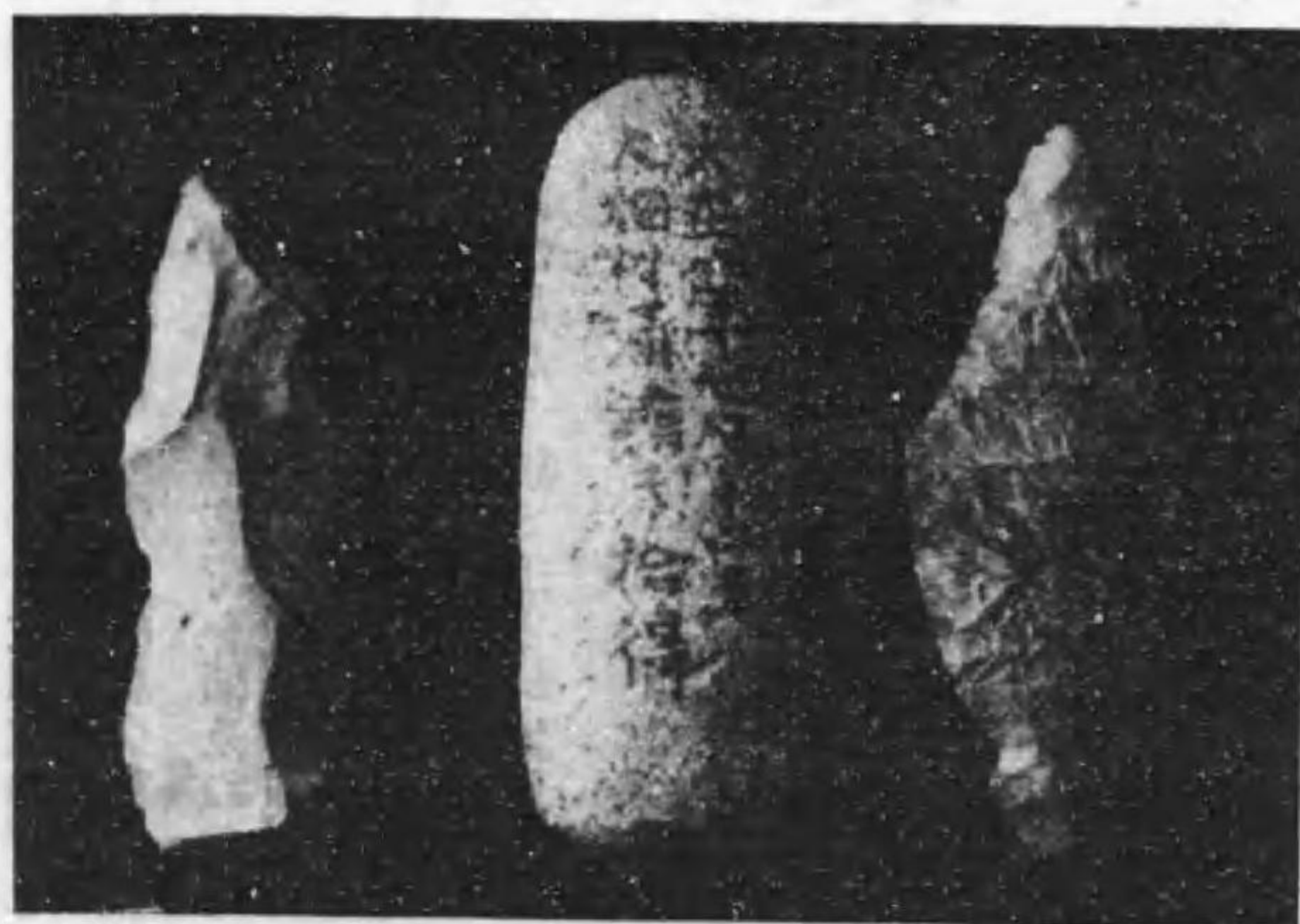


建て、居るのである。

### 涌 館

涌館は孫次郎間より二枚橋に越へる小丘の地である。蝦夷館の跡である。堅穴も多数あつた云ふが、既に畑地に耕起され、更に又營林署の貯木場となり、軌道敷地もなつて居るので、最早堅穴の跡を見る事は出来ぬけれども、附近よりは未だに矢石、石鎗、石斧及土器の破片等を發見し得る。

風土年表巻の九に「丸の距一尺三寸、郭の高三寸、此内に高五寸、長一尺、幅三寸に砥の如き物を彫浮せるを掘出せり」とあり。巻の十三に「湧館の峯際石原の中より、幅七寸に長尺二寸の樹盆にや、硯やうの物探り得し」とあるも、恐らくは石器時代のものなりし



(斧石と鎗石の取探りよ館湧)

かに想はれるのである。

涌館を波多城の趾と云ふものあれど、康正の古圖によれば、波多城は大畑川の東に在る、然るに涌館は反對に川の西に在る故、涌館を以て波多城の趾と云ふには疑問がある。

### 薬 研

薬研は大畑川の上流三里に在る。舊古畑と唱へた、古く柚人の耕起したものか、畑地の趾ありしに因むと云ふ。温泉ありて其湧壺が、恰も醫家の使用した薬研の形状をして居るので、後年薬研と稱するに至つた。景勝の地にして新緑の候、紅葉の節等最も愛でられる處である。流域に大瀧、鹹瀧、釜ノ澤、糸魚瀧、屏風岩、晝飯場及小目名澤の冠岩等がある、能く人の稱する處である。

薬研温泉は鹽類泉にして、浴効は伊香保の名湯に等しいと云はれる。

脂肪過多症、慢性便秘、全身多血、肝臟肥大、充血及痔疾、線病脾腫、腹の慢性加答兒、慢性胃加答兒、慢性氣管支及咽喉及喉頭加答兒、肋膜滲出物、子宮諸病、胃諸病、水腫、諸線の慢性炎慢性皮膚病

右は明治十八年内務省にての分析の結果である。外に眼疾にも効能あると云ふ。



藥研には萬治の頃、城大内藏居住した、越後の豪士城氏の子孫である。秀頼諸國の浪士を募れるに應じて大坂に入り、落城の後此奥地に隠遁し來つたとの説がある。城大内藏は此時麾下の生半左衛門を伴ひ來つた。城氏は後に大畑に下りて姓を山本と改め、田名部通の山役人となつた、子孫今に大畑に居住する。生氏は江劔西近江の産である、古畑旅館の當主淺吉氏は其末孫である、古畑の湯守別當として住し、狩獵及柚を業とした。

「古堂及破損候故、大畑肝煎孫兵衛殿え願上再建仕候此已後破損仕候共拙者子孫加修理、別當職相勤申筈に御座候。元祿十一年十一月十一日、古畑湯守別當江劔西近江杏木村産、生茂左衛門、同姓仁左衛門」と記した、藥師堂再建の棟札がある。堂には大坂の船が寄進した、南無藥師如來、元祿七年の石像を安置する。傍に樹齡三百年に近きおんこの大樹二本植はつて在る。



(糸魚淵)

因に城大内藏は八十三歳にて、正保二年十月廿八日歿した、碑は寶國寺境内に在る。

### 道 吟

道吟は舊小目名街道に當る。大畑より道吟を経て、丸木橋を渡つて小目名に往來した。古ちやがら、こみ呼ぶ老狐が棲んで居て、往來の者を惱ました話は有名である。村の者が大畑に用を辨じて、夕傾一杯の濁酒に蹣跚として、山唄などを歌つて戻つた。即ち道々吟みちくじ戻るの意にて、道吟の名が出来たのである。道吟稻荷大明神の古碑がある。

### 正 津 川

正津川は古妾塚こめづかも書いた。正津川の河口に部落し現在凡そ二百戸である。正津川は源を宇曾利山湖に發し、湖水に亞硫酸瓦斯を含むに因りて、此流域に魚が棲息しない、依て精進川とも異名する。

正津川は恐山への舊登山口である。此村の優婆堂は參拜登山者の喫所である、堂には慈覺大師作



の優婆夷の像を安置する。此像はもこ恐山の三途川の傍に祀り在りしが、或年洪水して正津川を流下つた。村の者共大いに驚き早速恐山に戻し納めた。然るに幾年も経ざるに又も正津川の里に流下つた、村の者共は再び驚き又々恐山に納めたが、尙ほ幾許ならぬに松の若木に載つて流下つた。如斯事前後三回に及ぶので、村の古老達は之を不思議とし、堂を設けて安置したと云ふ。



(像の婆優)

松の若木も形見に境内に植ゑた、枝振見事に生木し優婆松として、年久しく榮えたが、先年風のために惜くも倒れた。

### 關根橋

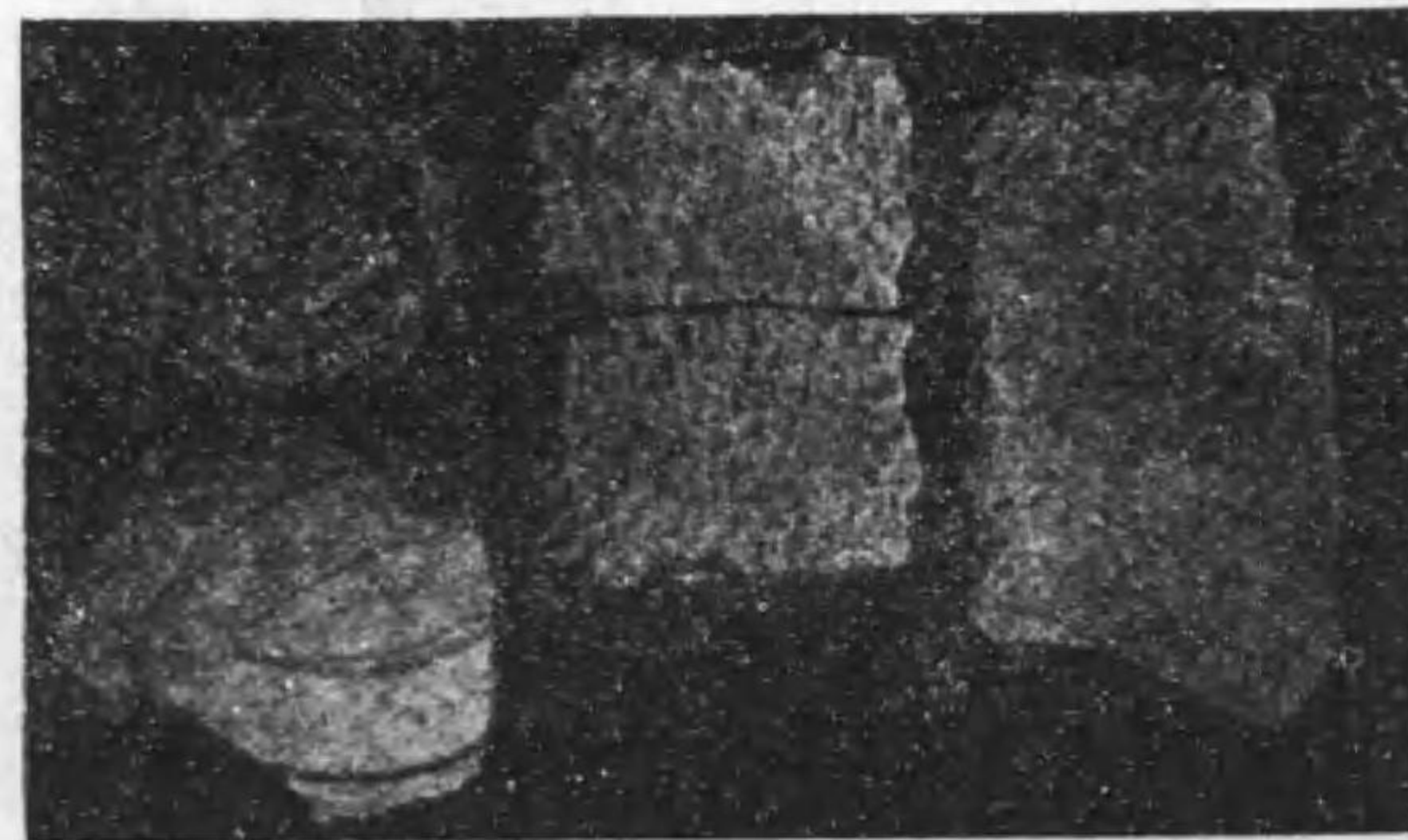
關根橋は別に外山ソトヤマと云ふ、正津川の枝村である。開拓は寛文の頃に五戸より来た人々だと云ふ。

外山長根の北端に蝦夷の棲める跡がある、朝日ヶ丘と通稱して居る、附近より土器の破片が出る。

關根橋は正津川の上流一里程の處に部落する。古は大畑の人々田名部に至るに、此里より關根を経て通行せしと云ふ、關根に至る橋の傍に部落するので、自然關根橋の村名が出来たのであらふ。北に約十町を離れて文久の頃迄下外山の里があり、五六の人家があつた。

關根橋は現在四十餘戸、中に佐藤姓十一戸、澤田姓十戸、柳澤姓五戸ある。

佐藤某の家に久しく傳はる、刀劍古文書等あつたが、維新の際に或は後難もあらんかとて、山深く埋め目標に木を一本植置いたとの説がある。上の宮として祀る觀音堂は、もこ佐藤家の氏神であつた。社前に樹齡三百年に近き老杉が二本あつたが、一本は先年惜くも風に倒れた。



(片破器土の取採りよ橋根關)



### 宇曾利山

宇曾利山は通俗恐山と書く、大畑の南三里に在り、貞觀四年慈覺大師の開き玉へし靈場である。田名部、大畑、大湊、川内の四つの登山口がある、田名部より登るものは縣道にして自動車を通ずる。大畑よりは正津川の流域に添ふて登る。一里にして關根橋部落あり、又一里にして水力發電所あり、之より宇曾利湖畔に至る一里、山深くして夏は新緑に秋は紅葉を著け、水は涼瑤として走り百鳥鳴き山水の美稱すべきものがある。大畑より宇曾利湖畔に至る森林鐵道がある。

### 代官所

大畑に昔から代官所があつた。深山神社の梁札に承應三年甲午十月、大畑代官三代目菊池平左衛門とある。代官役所は舊神明の社地にあつた、役所前の地名は之に因むのである。然るに大畑代官所は享保六年に閉鎖されて、寛保三年再び開設されたけれども、三、四年にして廢止された。文化五年二月三たび大畑に代官所を置かれ、楨快庵宅を借りて役所に充てた、此年中島に新廳舎を建てたが、大畑の物屋共にて金繰して建上げたのである。

#### 一文一本證文

此度大畑え以前之通御役屋御建被成候に付、右入料金當處物屋共繰合建上申度旨深切之依頼、伺之上願之通被仰付候、爲右補檜角一本に付一錢寸甫一挺に付一錢、掛與内錢取立方被仰付下置度旨、是亦申上願之通被仰付候間永取立可申候、尤繰合金相償候上者小破修覆可致候 已上  
文化五年辰五月

右證文は代官大光寺彦右衛門、久慈彌左衛門、三輪左司連名にて大畑宿老、檢斷、年寄連名宛に下された。中島に新築の役所は同年六月廿八日斧始、普請奉行堺丹治、大橋良藏、棟梁平田四郎兵衛にして、十一月三日落成した。

御役屋御普請御入用金其方共心付申上出金建上、今般御普請出來榮至極宜敷御満足被成候に付、御引移爲御祝儀御吸物酒並に樽肴被下置候、盛岡表も心付申上方宜敷に付尙御沙汰に候間、此旨一統申渡候

十一月三日

右は代官所より町方役人への御褒狀である。代官は田名部、大畑兩所順番交代に勤仕した。假役宅當初には久慈彌左衛門勤番、右十一月には今淵彌助勤番、翌六年三月より十月迄三輪左司勤番であつた。三輪氏は勤番の餘暇に、町重立を招いて詠歌の會など催し、また大弓の競射等をも行つた。



此頃寛政以前の如く上下の著用を許された。

上下著用之者共村林小平治、堺六兵衛、竹内傳右衛門、高橋源藏、田中小吉、菊池十左衛門、新谷兵藏、野口莊八、三國理左衛門、佐賀久兵衛、小笠原六兵衛、堺甚兵衛、湊組頭兩人、宿老堺伊兵衛、西田平四郎、木下清右衛門、檢斷池田義右衛門

大畑代官所の支配地は文化七年に至り、關根村より牛瀧村迄の十箇村に觸達あつた。此支配地一千二百七十石餘、六百四十六軒である。(田名部代官所支配地は三千三百五十五石餘、六百九十八軒ある)

申遣候當午正月、田名部御代官所之内、大畑通村分被仰付、關根村、牛瀧村迄大畑御役所にて取扱、御役金米錢御取立被成置候旨被仰出候間、以來諸願向並に御金米錢關根村、牛瀧村迄之村方者、大畑御役所へ上納可申、外西東村方は迄之通相心得可申候

御山之儀者は迄之通相心得行違無之様可申候、右之通被仰出候間此旨申越候 以上

正月十三日

大光寺彦右衛門 團

文化十三年大畑代官所を廢して、新に北浦番所を大畑に置いた。近海に露西亞船の出沒頻なるので之が警戒の爲めである。

申遣候然者田名部、大畑兩御役屋に被成候に付、御代官交代相勤候様近年御沙汰被成置候處、大

畑詰者御止被成大畑役所者、已來北浦番所、唱候様被仰出候、然者浦田伴助儀北浦奉行被仰付、田名部御代官御免被成候、尤御役格之儀者は迄之通被仰付候間、北浦番所相勤可申、尤四月、八月迄詰合候旨是亦被仰付、北地御用並に海岸筋御備之分、伴助得差圖御用相勤候様爲相心得可申此旨不洩様可申渡候

七月廿三日

中里伴左衛門 沼宮内 亘理

七月廿八日代官中里伴左衛門大畑を引拂ひ、翌廿九日北浦奉行浦田伴助到着した。

## 御陣屋

北地警衛のため、文化十三年大畑に北浦番所を設けたが、更に之を擴充して御陣屋とし、文政六年新に御陣屋並に御長屋等十二、三棟を中島に建てた。門には堂々たる門扉があり、正面左右に木柵を立て、他の三方は高さ五、六尺の土塀を築いた。門側には警固の士の詰所があつた。御陣屋には御目付諏訪民治、物頭木村與市、松岡八左衛門、御勘定奉行佐々木多助、外に諸士數十名詰合した。天下森濱に御臺場を築きて、數門の大砲を据付け、二枚橋の山にも大砲を備付けた。大畑の庶人を徴して調練をも行つた。



### 藩主巡行

卅三代の藩主利視公、御下濱と稱して、元文五年大畑に御出であつた。松前の海岸には諸木水上に生茂りて、爲めに多くの魚鱗群來する由を思出られ、此邊の海岸にも檜の稀に在るを愛でられて充分いたはり生木さすやうに、係役人へ御下命あつた。その砌り新町の軒續きて眞直ぐに開けたるを御覽あり、並木のやうに見事也と賞美ありし趣にて、新町を木並下と異名した。赤川の甲濱にて網曳の餘興を御覽に相成り、鮮鯛の多く入れるを殊の外に御歡興ありし云ふ。

卅六代利敬公にも御下濱まで、文化二年閏八月十五日大畑に巡行御宿あつた。御本陣は菊池與左衛門にして、一行は御目付、御側詰、奥使、御物書、醫師、御小納戸、御徒目付、御料理、御駕頭御先供、御鷹匠、御馬別當、御馬醫、その他上下總じて百七十五人、誠に立派なる御行列であつた。翌十六日は北通へ御發駕ありて異國間へ御宿、翌十七日は非常なる風雨にて同所御滞留、十八日佐井御宿、十九日奥戸御宿、翌二十日奥戸野にて御野馬取を御覽あり、廿一日異國間御宿、廿二日再び大畑御宿、廿三日田名部御宿、廿四日安渡へ御巡行、田名部御泊りの上にて、廿五日御發駕歸還相成つた。此度の御下濱にて異國間の異は穩ならぬとて、易の字に改め用ゐるやう仰出された。正

津川にて高齢者彌之丞百八歳の掌形を献じた。易の字に書改めの事は徹底しなかつた爲めか、文化六年十二月廿七日改めて觸達が出て居る。

### 御用金

御用金は藩に事有る毎に仰付つたが、文化六年十月十日海邊一統へ八千兩の御用金を仰付つた。大畑町のみにて二千四百兩餘を仰付り、内堺丹治八百五十兩、堺伊兵衛五百五十兩、堺忠兵衛百八十兩、湊屋百四十兩、西田平四郎百四十兩其外八十兩より五兩迄十餘名あり。曾てなき多額の御用金也とて、一同困難海邊一統の大混雜を來した。文政十一年七月には田名部通へ八百兩の御用金を仰付り、内大畑は西田平四郎三十兩、堺伊兵衛十五兩、磯谷忠兵衛十兩、小林半六八兩、野口六衛門五兩二分以下數名であつた。

### 檜山

大畑の檜山は藩の寶庫であつた、財政が澁るに何時も檜山を伐る態であつた。明暦の江戸大火に



上方商人の請に應じて、飛彈、信濃地方より數百の樵夫を雇來り、大畑山の良材巨木數十萬本を伐出した。延寶の頃にも五年山、三年山杯と唱へて盛んに伐出して居る、之は千人宛にて五年又は三年伐る山を云ふのである。正徳六年財政の窮乏から、即金五萬五千兩にて古仲津山十五ヶ年の伐採を、大坂の天王寺屋彌右衛門に差許した。十五ヶ年間の伐り放題は、殆んど亂暴の事にして、果然數百年の星霜を経て成りし美林山澤は、數年ならざるに忽ち禿山となり、赭岳となり、上下を擧げて今更の如く痛惜し驚嘆したと云ふ。茲に於て大向伊織の献策により、寶曆の林政大革新が行はれた。伊織は舊名坂牛五左衛門、故あつて終をよくせぬけれども、田名部通檜山の山法を定めて、今日の檜山を遺した大なる貢献者である。

### 檜山入札

寶曆二年田名部の檜山は受負入札となり、代官所にて開封して居る、翌三年の檜山入札は盛岡表にて開封して居る。檜山入札の運上金は前金何程、抽入後何程、末何程杯と數回に分納して居る。普通千兩の山にて前金三百兩位であつた。然るに明和の頃には前金の多少乃至遲速を問ふことなく徒に入札金の高きを可とする風を生じ、自然前金を寡にして千兩の山を千百兩、千二百兩杯と入札

し、終には千兩の山に前金を僅か五三十兩として、千四五百兩にも受負ひ、初年に極力多くを伐出して、賣上代金を巧に運用し、二、三年には利息に利息を生まして、首尾よく五、六百兩を産み出さす手段のものが出来た。明和六年は如何なる都合にか入船少くして、木材の捌けざるため計劃大いに顛倒し、受負人何れも困難した。官に於ても亦深く覺る處あり、已來無謀なる糶上の弊は革つたと云ふ。

### 贈献木

明暦の江戸大火に藩主の江戸邸建築材を大畑から送つた。寶曆九年加賀城の焼けた際にも添木、高橋の兩山より伐出し、翌年二月十四日菊池久左衛門、新谷彌平太、坂井平右衛門、工藤彌惣治を使者とし、大畑から檜材一千本を四艘で積送つた。寛政十年に江戸櫻田の藩邸用材として、檜の巨材七百石を羽色外三ヶ山より伐採して送り、文化九年に江戸藩邸用の檜柱、厚七分巾二寸二分四十八枚結を二千三百束送つた。天保九年三月江戸西丸焼失の際には、復舊御材木の内へ藩から大畑の檜一萬本を献納する筈の處。同年閏四月十一日檜山へ火入りて、十四日晝頃迄も焼續け、木和田川高橋、添木、葉色、八幡林の五ヶ山を全部焼拂はれた。依て献木の叶はざる旨を述べて、幕府へ深



く陳謝したと云ふ。此山火事は未曾有の災にして、四日三晩も焼續けた、田名部より早飛脚を以て盛岡表へ申上げ、飛脚の者戻るも尚ほ燃えてゐたと云ふ。此時山に残雪あつた爲めに六、七寸以下の幼樹は幸に焼殘つた、之が百年位の一齋林にして今日美事に成木して居る。因に文政八年五月十二日にも高橋山に火入りて、二日一夜焼通した事がある。

### 埋 木

天明六年東町にて井戸を堀つた處、一丈ばかりの地下より檜の枝及葉が出た、色艶は生檜のもの其儘なりしも、暫く經ると色を失ふてくづれた、何年位埋まつたものかと當時評判であつた。享和元年乘頃にて浪闕の際に、帷際に二圍餘りの木株頭が現はれた。昔より生立ちありしものか、或は他より流來たものか杯々怪しまれしに、月日經る儘に砂深く埋まり果てしと云ふ。

正津川谷地の戦式と呼ぶ場所にも、地下五、六尺にして澤山に檜が埋没し在つた。曾て檜の伐採を嚴禁されて人々俄に困窮した際、何人か思付きて長七、八尺の細い鐵の棒にて、此戦式谷地を丹念に搗廻りて檜を探し當て、之を堀出して紐に挽き急場を凌いだと云ふ。

中島には地下二、三尺にして、山毛櫨の厚板が堀出される。長さ二間より三間、厚さ七、八寸、

幅尺二、三寸より二尺位迄の立派な山毛櫨板である。文化の頃の造船場の跡にして、造船工場に敷詰めた板の其儘埋まり果たのである。同じく中島の川尻の方には徑七、八寸から一尺位の檜の丸太と、同じく檜の長物が澤山に埋つてゐる。之は千石舟を巻上ぐるに使用した、俗にコロミシツギと云ふものである、船揚場の跡へ自然と埋つたのである。

### 薪 採

檜、杉、松、栗、楢は五木と唱へて古より伐採を制された。官山は勿論私山の立木も雖も、此五木は許なくして勝手に伐る事は出来なかつた。其餘の雜木となれば、官山のものも雖も容易に頂戴された。大畑では薪材を佐渡ヶ平から伐出した、大畑全体が此ために春木御役として三十六貫文を納めた、而も三月四日九百文、七月四日九百文、十月残り廿六日二百文と分納が出来た。三月堅雪を踏んで薪を構曳した、此頃男達は大抵松前へ出稼して不在なので、留守居の女房と娘達が、未明に堅雪を踏んで佐渡ヶ平に登り、薪材を伐つて構に積み、それに跨乗つて彼の急坂を滑り降つた。何百臺の薪を積んだ構が夫々の女主人公を載せて、彼の急坂を陸續と滑降し來る壯觀は、大畑の春の一名物であつた。



乍恐奉願上候事

一當所端々之御百姓共雪中に罷成候得は日用薪不足に而難儀仕候、依之佐渡ヶ平御山は雜木斗之御山に御座候得共、前通檜葉御山斗にて不斷通路無御座候御場所に御座候、雪中に罷成候得は木和田川御山端、雜木斗御座候處拜借仕橋道相立、佐渡ヶ平御山其日限橋薪取來候、然所當年は別而春木不足にて端々御百姓共甚難儀仕候間、右之御場所拜借仕橋薪取出申度奉存候、橋道之儀は御山奉行様得御差圖を相立候間、右橋薪取仕廻候は、是亦御見分申請候様仕度奉存候、尤橋薪取出之内は宿老檢斷組頭交々毎日附添居、無調法無之候様可仕奉存候、以御慈悲を右願之通被仰付下置候は、御百姓一統に難有仕合に奉存候 以上

年 月 日

宿老名判

檢斷名判

御代官 御山奉行 連名様宛

毎年右之通の願書を差出して、佐渡ヶ平に橋薪取に登つたのである。

船舶輻湊

大畑は山深く檜の美林が茂り、古來檜を多く産したので、輪漕の船舶大畑川に輻湊した。江戸、

大坂を首め赤間關、長崎、尾野道、坊野津、浦戸、博多、敦賀、下田、洞津、鞆浦、新潟、酒田、秋田、宮古、石巻、松前、箱館等諸國の船が出入して、港は常に賑ふたのである。是等の船がどんな日數で到着したかと云ふに、海路は千里一瞬也古來謳はれた如く、案外迅速に著船して居る。文化六年の春筑前船十二艘は二月廿六日江戸を發して、同廿九日大畑に著船した、御船山王丸も二月廿八日江戸を出帆して、三月朔日大畑に入船した、四日目に到着した譯だ。此春大坂の船も二月廿三日下ノ關を出帆して、同廿六日安渡へ入船した、之も矢張り僅か四日で到着して居る。尤も春の海にて日和の良かったにも因らふが、又一面に當時の船頭達は日和見が達者で、一たび纜を解けば大抵日和を間違ふことなく、短い日數で易々と目的の港へ入得たのである。

錨を煉る

大畑には往昔より木材積取に諸國の船が輻湊した。諸國より集まる船の中には、航海中に錨を失ひ來るもあつて、大畑で錨を拵いたものだ。元文の頃に池田萬右衛門とて腕達者を鍛冶があつた、其先は寶永の頃越前の三國から來た錨鍛冶だ、萬右衛門は脊戸の外に煉場を設けて、大小の錨を盛んに造つた。其子孫代々錨を煉つて業こした、明治の初年には池田六之助と云つた。外に鍛冶工が



村上市右衛門、村上彌五郎及畑中某があつた。千石船などの錨を注文されるも、此四軒の鍛冶屋が總掛りで、一致してどんだ大きな錨も造つた、大畑鍛冶の腕の自慢として、損得は往々度外視して造つたのである。寶曆十二年大安寺の坂下の平場にて、大安寺の梵鐘を鑄たのも池田萬右衛門であつた、其子の六之助は文化五年に、一貫目玉込めの大砲一挺を造つて献上した。

### 砂 鐵

高橋川は別に金山たなば云ふ、舊鐵山たなば書いた、承應の頃釣屋濱の砂鐵を掘んで鑄た事のあるに因むのである。砂鐵を吹くに松木が尤も適する云ふ、當時附近一帶に松木が豊富に在つたので、此處に砂鐵の製煉が行はれたのだ。木野部の村端にも銅屋ノ澤すゑとて、矢張り鐵山の跡と云ふがある。文化十年に宮古の關口伊三右衛門、盛岡の五兵衛名儀にて三月の末より、釣屋濱、木野部の海岸から砂鐵を採掘し、六月山方共に九人となり、高橋川に吹場を探したが濕氣が多いとて、野牛山の獺穴と云ふ個所に吹場を設けた。赤坂産は純鐵と評判されたが、試験の結果四合吹ふき決つた、非常に質が良かったけれど、翌年九月迄に堀盡くした。其後木野部の砂鐵を堀つたが、幾許もなくして中止した。明治四、五年にも田名部の辻武八郎、釣屋濱の砂鐵を採掘して製煉したが、之も兩三年にし

て中止した。

### 漁 業

寶曆以前は大畑通の村々に專業の漁戸はなかつた。大抵は山稼を主業として生活し、少數の者が副業に漁撈するに過ぎなかつた。然るに寶曆十年に有名な田名部通槍山の山法改革があつて、從來槍山の伐採等に從事して生活してゐた者が、遽に活計を失ひ難澁するに至つたのである。茲に於て松前に渡つて漁撈に從事する者が出來、或は地方にあつて漁業に轉ずる者も出たのである。風土年表に「烏澤は樵夫を專業とせるが、天明元年には漁に移りて蝦夷地へ行くもあり、地方に在りて漁するもあり。二枚橋も寛政の中頃迄は柚稼の家交りしが、九年には全部漁撈に従へり」と記されてある。正津川も、木野部も、赤川も同じく之と前後して漁業に轉じたのである。松前に出稼する者は他領へ赴くので、其時々願出て許可を得て居る。

一筆啓上仕候、然者當所御百姓共爲渡世之松前へ働に罷越度候由願出候者共、左之通に御座候

大畑 誰

誰



何人

右之通に御座候間吟味仕候處相違無御座候、御慈悲を以渡海御切手被下置度奉願上候、尤秋中此方へ渡海次第御訴申上度奉存候 以上

年 月 日

御下役御兩人様宛

檢斷名判

### 漁網

大畑湊及び附近の濱では主として鰯を漁した。網は享保の頃既に江戸或は鹿島産のものを求め使用して居る、江戸網も鹿島網も糸が太かつたので、水揚が重々しくて操業上には不便であつた。處が之を改良した細糸の網を、寛延三年に仙臺領水澤の大倉吉郎治が嚮ぎ來つた、網の糸目が細く目方が軽いから値段も安く出來た、水切れもよく操作に至極便利だつたので大いに歡迎された。爾來網は水澤物を使用し、安永の頃には盛岡の高島義右衛門名儀にて賣るに來たが、寛政の頃には竹谷三郎助、山形屋林治の兩店に分れて賣來つた。

### 丸木舟

昔の漁船は天當に丸木舟であつた。寶曆五年の鰯網役天當一步一分九厘一毛、丸木舟六分五厘五毛、鰯漁役天當三步五分二厘六毛、丸木舟一步六分四厘四毛と認められたがある。丸木舟でよくも漁に従事されたと感心されるが。更に此丸木舟で海峽を渡つた者もある、天明五年に尻矢の孫四郎云ふ者、函館から丸木舟で大畑に渡つた、文化十年三月朔日箱館の漁師が、丸木舟にて釣屋濱へ漂著した、翌十一年には關根橋の丑松なる者、箱館の勤先を出奔し丸木舟に乗つて戻つた。其又翌年には下風呂の庄三郎と呼ぶ男、箱館の妓樓から名染の女を盗み出して、兩人丸木舟に乗つて還來つた。丸木舟での駈落などは一寸見ない圖である。中野澤、大平などの舟が大利の船越から山を舟曳して海峽に越し、關根、正津川の濱にて昆布採をした云ふのも、矢張り丸木舟を山越したのである。此丸木舟は長さ三、四間、巾一尺七、八寸乃至二尺一、二寸が精々である。

乍恐奉願上候事

一丸木船

壹艘

赤川半兵衛

一同

壹艘

木野部兵助



右之者唯今所持仕候漁船古罷成乘廻相成兼、漁師共迷惑仕候間來春雪之内打出申度奉存候、大畑之内近御山にて雜木壹本宛被下置度奉願上候、檜無御座雜木立の打出可申候間、御慈悲を以願之通被仰付被下置候は、難有仕合奉存候 以上

年 月 日

大畑町檢斷 宿老連名

御代官 御山奉行 連名殿宛

### 昆布棹

昆布採取に用ゐる棹や、鮑突きを使用する棹はすべて檜である、處用の都度願上けて官山より伐採して居る。文化の頃は一本に付五拾文宛を差上げて伐採して居る。

乍恐書付を以奉願上候事

一 當濱浦々御百姓共渡世方に相用候檜昆布取棹權、先年〆壹本に付御代物五拾文宛差上、近御山之内〆頂戴仕相用渡世仕來候處、段々流失又は折損等に而、此節用切に罷成迷惑仕候に付、先年之通爲冥加壹本に付五拾文宛差上申度奉存候、恐入候申上様に御座候得共、員數左之通奉願

上候

昆布棹一人二本ツ、  
一 貳拾本 二枚橋村

昆布棹一人二本ツ、  
一 貳拾本 赤川村

昆布棹一人二本ツ、  
一 四拾本 木野部村

水棹一人四本ツ、  
一 四拾本 湊

筏棹一人二本ツ、  
一 貳拾本 大畑

網上げ棹  
一 八本 網師利右衛門

棹數百四拾八本

右之通明春〆渡世方に相用申度奉存候間、來未ノ二月中迄に元伐被仰付被下置度奉願上候、御憐愍を以願之通被仰付被下置候は、難有仕合に奉存候 以上

文化七年十月

大畑町檢斷 徳兵衛

宿老 榮左衛門 同傳右衛門 同多兵衛

御代官 御山奉行 連名殿宛

### 鯰ノ粕



鱈漁は正徳、享保の頃より試みられたが、寛延三年水澤網の持來られし頃より漸く盛んになつた。寶曆五年に鱈群來して五月より十月迄に、一漁場大抵一千釜を焚いた、誠に未曾有の大豊漁であつた、爾後年々鱈漁が続いて寛政に及び、濱方一統此鱈漁に潤ふたのである。文化十年も鱈豊漁にして、一漁場矢張り一千釜を焚くものがあつたけれど、此頃は例の露西亞船出沒による北地警衛のため、諸士の往來頻煩にして、至る處不時の諸人費が累み、爲めに世間一般の不景氣にして、海の物も山の産も相場遽に下落し、鱈ノ粕は殆んど平常の半に激落して兩に六俵半となり、同十三年には兩に七、八俵迄に惨落した。翌十四年は不景氣一層深刻となつて、粕、昆布、材木其他の物價も柚夫漁人の賃金も従前の半分に到せず、加之柚働の賃銀も漁場の給金も支拂はれざるもの多く、松前へ遁ぐるもの等あつて、空家が續々出る有様であつた。

### 鯨

寛政五年正月より三月の間に木野部、正津川、下風呂、異國間、大間、尻矢、尻勞の七浦へ鯨が漂ひ上つた。此頃の掟にては突鯨は二十分一を納め、漂流の鯨は十分一を納め、寄上りの鯨は三分一を納めた、俗に鯨が漂れば七濱榮ゆると云ふた位で、素晴らしい景氣であつた。文化十四年正月八

日にも、木野部の濱へ四尋の鯨が一頭漂上つた、此前後に尙ほ數頭の鯨漂上つて居る。

文化六年正月廿八日岩谷へ十七尋の鯨上る好品也、此年尻矢へも上る。文化八年野牛濱へも上る。文化十年岩谷へ又も鯨上る。同十一年尻勞へ一頭上る百九貫。同十二年又々岩谷へ上る。此年十二月十三日入口へ七尋の鯨上る好品也。同十三年正月大利濱へ十尋の鯨上る。

### 鹽 竈

寛永の頃正津川境の新堰と瀬川との間に、鹽竈を焚いたものがある。寛文三年には赤窟長坂籠の釣屋濱にて鹽竈を焚いたが、海水の故か焚方の爲めか、鹽が荒目に出來るまで間もなく中止した。池田兵吉なる者、天明八年甲濱にて鹽竈を焚いたが、此時にも矢張り鹽が荒目に出來るとて、寛政二年に中止した。

### 米

大畑の飯米は主として津輕米を仰いだ。諸國の船が出入するので稀には越後米、出羽米、秋田米



なども這入つた。寶曆二年に津輕米數千俵を積來り、問屋へ預置いて幾月もなく掛かり徐々と賣つた。大凶の天明三年には津輕米の輸入が止まつて甚だ困難した。田名部より一駄、二駄と買求めて急場を凌いだ。文化二年に江戸より米八千俵を積來り、中島に在りし御廩二棟に藏入して逐次に賣渡された。此八千俵は津輕、美濃、下總、下野、常陸、河内、越後、會津の八品であつた。津輕米は二斗六升、美濃米は二斗五升として拂渡されたが、何か事情あつたと見へて代金の延納を許して居る。二千俵は同年十月拂の翌三年五月納、殘る六千俵は翌三年五月拂の一ヶ年貸付である。文化四年には米拂底して、殊に六月廿七日より廿九日迄は、大畑に一升の米もない騒ぎであつた。此頃北地警衛のため諸役人の往來激しく、路筋の者共甚だ困難したので、藩より米五十俵を中野澤より佐井迄の驛々に賜り、大畑にては家毎に一升宛を割渡された。

文化九年六月九日、津輕の米積船が大畑にて一艘、佐井にて一艘破船し、津輕の家臣某が兩所の遭難顛末を取調に出張した。大畑の濡米三百俵は金子五兩にて地元へ落札し、中以下の者一軒へ一俵宛を分配した。

因に明和に川代谷地東町後ろに、稻を二枚試作したが、後絶えぬたるを文化八年に至り前谷地に二枚試作した者があり、翌九年には三ヶ所にて十枚程も植付たるに、此年は殊の外に良く稔つた。大畑の稻作は此頃より徐々と試みられた。

## 天明大飢

天明三年は干支の癸卯不和に當ると云はれ、春より天候を氣遣はれたが、五月より連日の曇天にて太陽を仰ぎ見ることは殆んど無く、土用に入りても東風吹き續いて、綿入を着るも寒むい位であつた。七月の末には飢饉の響き類々として聞え、世間が物騒になつて來た。海邊にては海藻の種を盡す迄に削取り、尙ほ山に小屋掛して葛根、蕨根、白花蘭、華草、白蒿、艾の類を懸命に堀採つた傳吉丸、萬福丸、大慶丸、正徳丸などを米買取に新潟に差立て、更に百石船をも秋田、酒田等へ差向け極力飯米の準備をした。此年は各地共に凶稔の事故望む程の買受は出来なかつたけれども、各船何程か宛の米を買整へて戻つた。十月に入ると早くも雪降つて、蕨根堀の人々は山の掛小屋から里に下つた。然るに五戸、七戸通より物乞多く集來つて、世は愈々容易ならぬ状況となつた。

代官所からは不意に役人を出して町々村々の倉廩を封じ、五日に亘つて貯藏の米及酒類雜穀等を改め書上げた。大畑にては曩に船を新潟、酒田、秋田等に差向けて比較的多く貯藏してゐた爲めに其中より百俵を買上げて東在及奥内、中野澤等へ拂渡す云はれたが、夫では大畑にて折角買集めた心勞の甲斐が無になるので、百方陳辯して五十俵だけ賣上げた。斯かる場合にと兼て用意の義倉の稗は十月に割渡し、救のために十一月兎澤の立林を伐採した。町の有力筋武川久次郎、栖原彦兵



衛、佐々木半兵衛、菊池新右衛門、堺紋兵衛、同伊兵衛、同忠兵衛の諸店一同にて米の賣出數量を取定め、救助の義捐出錢高等をも取極めた。玄米八百文と相場して一人に十二文宛を救護し、中以下の人數を調査して、家々に人數を記した木札を渡して置き、十一月より翌春三月迄、木札の人數に應じて一人一合宛を賣渡した。枝村及關根、烏澤、出戸、川代、正津川へも夫々救護した。

十二月より正月にかけて餓死する者多く、其上に他郷、他國の饑人も街に累々として死骸を並べた。此等累々たる死骸を飛越え跳越えて歩行し、宛然此世乍らの地獄の相であつた。

一段々奉申上候通、御百姓共極窮に罷成去十二月より只今迄、別張を以奉申上候通餓死仕候、此段御訴奉申上候 以上

天明四年辰四月

大畑町檢斷 平 八

越後覺右衛門様 金田一善左衛門様

大畑宿老源助 同小左衛門 同傳兵衛

餓死者は乘頃に穴を堀つて埋め塚を築いた。本門寺七代の僧供養のため其跡に一字一石の碑建立を發願し、七代八代さか、り十四年を経て成就し、寛政十年七月十五日大供養を営み、大施餓鬼を行つた。碑は先年本門寺の門前に移建てた。

## 牛 馬

邦内郷村誌によるミ、大畑馬百廿四疋、牛百六疋、正津川馬卅六疋、牛十三疋と書記されてある。大畑に牛馬の斯く多く飼はれて居たのは、運搬駄送のためであつた。百姓町人の荷物を運ぶのミ、上役人の通行等に乘馬又は駄馬を屢々徴されたからである。大畑の御用分擔區域は關根から赤川迄であつた、關根へは人足と馬を毎日詰めさせた、其詰所が現在の駄賃場方であつた。大畑の内にて二枚橋、釣屋濱方面にては主として牛を飼つた、男達が松前へ出稼するので、留守居の女子供にて、牛は扱ひ易しいからであつた。關根橋にては牛馬ともに飼つたが、大畑で馬の多いのは同部落であつた。關根詰の人足と馬は、各部落當番があつて詰合したが、關根橋が最も便宜の地點にあるので、自然同部落にて他の分をも請負ひ代理する事もあつた。

當時牛馬の取締は嚴重であつた、特に馬は他領出を禁ぜられて居た、また捨馬も法度であつた、濫りに殺すことも亦出来なかつた。馬が斃死すると兩耳ミ尾を切取つて訴出た。

差上申死馬手形之事

一何毛駄(又は駒) 何歳

馬主 關根橋 誰 ㊦

右之馬當月何日相煩死馬仕候處實正に御座候、其節五人組檢斷所へも相斷立會見届相違無御座候



に付、兩耳尾共に切取指上申候、若偽仕他領へも賣拂申由脇より訴人御座候はゞ、馬主は不及申に五人組檢斷共に如何様にも可被仰付候、爲後日之手形指上申候 以上

年 月

五人組名判 檢斷名判 馬肝煎名判

牛馬御役人様宛

牛の斃死した際には、兩耳、角及尾を切取り、之を添へて右様に届出た。

### 調 練

寛政の末々文化にかけて、北地警衛の諸士大畑に屯營し、五ヶ寺に分宿して、正津川谷地、天下森濱等にて訓練を行つた。正津川谷地を戦式と通稱するのは、戦争訓練の跡なるに因る。

寛政十一年 南部家の岩間佐五右衛門、八木橋良作一行三月八日大畑著、同廿四日蝦夷地へ渡海した。菊池平治右衛門、菊池泰作の兩士三月八日十月迄滞留。

文化二年 大村治五平地士を集めて種々鳥流の銃術を稽古せしめ、翌三年春池ノ尻にて百目玉の巨靈神と名くる短銃を試射し、其他の銃火薬をも比較試験した。五月大村治五平、宮川忠作、大畑忠平の三人天下森に地士を集めて三百目玉の銃を射撃せしめ、之を甲崎に備付て大畑、下風呂兩村

の擔當とした。當年新渡戸丹波、長内良右衛門の兩氏海岸通行あり、木場にて巨靈神の試験を行つた。

文化四年 五月廿八日臼井仁左衛門、川島木左衛門、主従二十人、吏五十五人を引率して、寶國寺に屯營し。帳帳二本、鐵砲五十五挺を備へて數日操練を行ひ、六月十五日佐井を経て箱館へ渡つた。同じく五月廿八日吉田友左衛門の一隊三十五人、正教寺に屯營して數日操練を續け、火術係五人を残して六月十五日盛岡へ戻る。五月廿九日三戸給人二十人、七戸給人七人、従者を合して總勢六十人、心光寺に駐屯して晝夜各番にて海岸を見廻りしが、六月十五日歸郷。

文化五年 正月七日木砲用の松木長四尺、徑尺五寸なるを二本、苗代澤の福士立林より伐出した此頃日々に木砲到來して今日にも戦争の始まる評判であつた。四月十三日裨將玉山六兵衛主従以下總じて百十六人來著、大安寺に屯營し、十七日正津川谷地に於て、金鼓勇しく操練あり、尙ほ七月十四日迄に引續き廿九回の操練ありて、同十七日に引上た。火器隊にも新町川原にて鐵砲の射撃を行つた。焰硝二百貫目、硫黄四十貫目到着して、湯坂下に工場を設けて合藥製煉を行つた。

文化六年 五月十日色見崎にて鐵砲組の訓練あり、同所備付の大銃二挺を試射した。同月十六日乘頃濱にて火器隊訓練を行つた。六月十日より又も鐵砲組の訓練あつた。翌七年も四月十七日正津川原にて火器隊の訓練あり、銃砲を試験した。



文化八年 三月廿九日正津川原にて火器隊訓練、四月十一日湯坂原にて同上。  
文化十年 七月廿七日日本宿良助田名部の士及吏二十人を率へて本門寺に屯營し、大畑の庶人百六十人を徴集して、數日に亘りて訓練を授けた。

### 造船

蝦夷地の警衛渡海の用意に寛政の末頃より造船が始まつた、同十一年八月御船準丸二百五十石積造船のため、圓祥山の杉六尺四、五寸圍り四本を十八兩にて伐出し、田名部杉五本を十兩にて求めた船匠向井清兵衛である。翌十二年には御船如神丸を奥戸にて造船した。

文化三年 五艘にて二千五百石積とし、三百兩の拜借金を得て造船。江泥府箱館等を一上下宛年々廻船して、十ヶ年賦返済した、拜借人は湊甚兵衛、大畑安兵衛、田名部忠治、佐井傳四郎、奥戸覺右衛門の五人五艘である。當年御船新萬全丸千四百石積、新天福丸八百石積の兩艘湊にて芽出度竣工した、船匠向井清兵衛。

文化五年 艫廿四挺立の飾橋百石型の金龍丸と沖和丸との二艘を、木村金藏中島にて見事に打立た。當年十一月十六日露木平太夫、同十九日吉見専三郎の兩士到着、カムサツカ征伐の艫艫二艘を

造る内命にて。一を守眞丸と名けて、御船頭中山仲五郎、大工向井清兵衛、取扱新谷元左衛門、一は安貞丸と名けて御船頭石井茂八郎、大工木村金藏、取扱菊池與左衛門と定まり。正津川に圍ひ在りし造船材を曳出して、安貞丸は十二月二日敷据へ、守眞丸は同五日敷据へて、大工木挽六十五人を集めて双方へ配置し、一艘の中をも面揖、取揖と二つに立分れて仕事を急ぎ、寒中にも一同汗を流して働く忙しさであつた。然るに作事半にしてカムサツカ征伐は沙汰止となり、守眞丸は垣虎丸と安貞丸は彪虎丸と名替りて、商船造の千石積を改造し、彪虎丸は翌春三月三日に臺卸し、垣虎丸は同六日に臺卸を行つた。

文化九年 大石の造船場にて御船順應丸を打立た、關司中山仲五郎、大工向井清兵衛。此頃御船山王丸も造済にて、記念に地神の社を建てた。文化十二年四月、御船大樂丸湊濱にて臺卸を行つた大工向井松藏、御船頭中山仲五郎、關司露木平太夫。  
中島にブナの厚板の敷埋つて居るのは、此等文化年間に於ける造船場ので跡ある。

### 渡船

大畑川は昔は渡船で越した。藩主の巡行又は重役の通行には船橋にして越した、川に八、九艘の



舟を並べて、其上に板を敷いて渡したのである。川船は從來大畑町限で拵居てたが、文化には往來頻繁であつた爲めに、代官所に願出で其費用十三兩を郡内惣郷に徴して拵いた。

乍恐奉願上候事

御支配處大畑渡船之儀者往還筋と乍申、松前御用無之内者差而御用往來と申も無之、佐井迄の御百姓共往來候而已に御座候得者、御町限作場通用同様之船に而も相濟候故、右渡船刷替入用共に懸りも少く御町限出錢に而相辨居候、然處松前、箱館、北地御用に付公義御役人様、御國御人數様御通行御座候以來、前々之通之渡船に而者御渡船危御座候に付新規刷替仕度、是迄御町限に而御用辨仕來候得共、連年御町方一統及困窮此上御町限刷替及兼當感至極奉存候、且是迄相用候渡船朽損危相成候に付、別紙積書を以奉申上候通長八尋に幅六尺之馬船一艘、並歩行船一艘刷替仕度奉存候、尤前文申候上通御町方一統困窮の上に御座候得者、右之入方如何様にも出錢可仕様無御座候得共、右入方御上様御手當被下置候にも、又者田名部通大畑通總郷御割合にも、被仰付被下置候様奉願上候、尤繕之節者御町限に而可仕候間、新規刷替之節者惣郷御割合被仰付被下置候は、無滯右御用相勤可申難有仕合奉存候、御憐愍を以願之通被仰付被下置度、乍恐此段奉願上候 己上

文化十年酉六月

大畑町檢斷 傳 藏

宿老 四人 連 署

折内瀬左衛門様 本宿良助様 沼宮内互理様

明治十五年に縣の土木工事として初めて土橋が架けられた、戸長大場小平太氏の時である、之が渡船に代つて大畑橋の架始まりである。

旅 亭

寛政の末頃より文化にかけて蝦夷地警衛の人数が繰出し、此の人数往來のために大畑は毎年大いに混雜した。旅籠の料理は質素に兼てよりの觸達なりと雖も、善美を喜ぶは人情にして自然と屠宰の術増長し、随つて收入にも潤ひが出来、旅籠の業は人々の羨む處となつた。文化七、八年頃には古村の南町、本町、東町は元よりのこゝ新町、湊にも旅籠を營む家續々として出来た。從來雜魚として賤しめられた鰯、鮓、鱒子も頓に價貴くなり、初鮓は三十二文と相場し、鱒子も准じて十六文となり、一籠幾らの鰯も一尾何程と議せらるゝに至つた。

政 德 丸



大畑の長川仲右衛門は、腕も出来れば膽も練れた船手であつた。寛政三年御船手向井將監組に召出され、朱塗の御船政徳丸を預つた。乗組は水主同心組頭格長川仲右衛門、添役露木元右衛門、水主同心岡本清左衛門、三浦文八其他であつた。政徳丸は同六年大畑に入津した。

政徳丸御船御召船手向井將監組水主同心海船爲修行差遣候間、何國に廻著致候共入津出帆之節差支無之様引船可差出候、且積荷物賣買之義商人仕來候通、水主同心組頭格長川仲右衛門可申談間帆役者不差出口錢者聊無相違差出可申間、可得其意者也

寛政六年寅正月

向井將監印

東海道、西海道、右國々浦役人名主年寄中

政徳丸は或る年江戸へ廻航の砌り、房州沖にて遽に入水して危険に陥つた。長川組頭は伊勢の大神宮を首め奉り大畑鎮守の八幡宮、湊の春日明神の神々へ祈誓を立て、只管神々の助を祈願し、水主共も必死となつて入水を汲み捨てた。其間に不思議と入水が止まり、近くの湊へ船を寄せて調べた處、船底破損の箇所に六、七寸大の鮑貝が吸著して居た。此鮑が吸著して呉れたので、船は辛くも助つたのである。長川組頭は後に鮑を伊勢の大神宮に持参して肉を納め、貝は家寶にとて頂き戻り、同家の家寶として子孫に傳へたが。一家の者後に松前に渡るに際して、郷社八幡宮へ什物として納めた。

寛政九年政徳丸から日の丸の燈籠二張を八幡の神輿へ、同じく二張を八幡の廣前へ、同じく二張を春日の社壇へ納めた。

## 大砲運搬

天下森の御臺場に据付置いた大砲の中、最も大型の鐵製の一門と、赤銅造の一門とを、維新になつて東京へ送る事になつた。運搬方を船大工の棟梁大畑の岩吉と、大平の兼吉の二人に命じた、二人は大畑から關根迄運搬し、關根からは別に田名部の分擔であつた、岩吉は自ら進んで大型の方を引受けた。岩吉は角材の端をそぎて大きな橋を拵いた、兼吉は御祭の野臺車のやうな丈夫な車を造つた、九月の末頃各請負の大砲を載せて曳出した。大畑から川代迄は砂土なので、橋の方は一寸曳の態で一向に進まない、車の方はドン／＼走り、喊聲を揚げて進んだ。然るに川代を越すと、野土の道路であつて、其頃は荷牛や駄馬の往來頻繁なので、脚趾にて畦を立て居りヒドイ道路であつた、車は重い大砲を載せて、其畦に落ちる毎に引上げねばならず、今度は大變な困難に陥つた。橋の方は反對に此畦立つて居る悪路に差かゝるに、却て調子を得て何の苦もなく滑つて進んだ。岩吉が豫め慮る處のあつて橋を拵いた事が、後に知れて大いに稱讚されたと云ふ。御臺場に殘した大砲



四門程と、孫次郎間と二枚橋にあつた大砲は運搬が厄介なので、破損したと申立て、附近の土中へ埋捨てたと言傳へられて居る。

因に二枚橋は舊湯坂を越へて往來したが、明治廿年頃に岩吉は大畑橋より右折し、河岸に添ひ孫次郎間を経て二枚橋へ至る、現在の道路開鑿を献策し、自分の弟子及村人夫を督して、首尾よく之を開鑿した。岩吉の姓は山田である。

### 木綿取組

海路の便があつたので享保の頃には、大坂と木綿の取組が行はれてゐた、取組先は島屋市兵衛である。此頃來た太物は紺、淺黄、紅、紅板染、紋羽などであつた。元文には奈良屋九郎兵衛、寶曆には伊丹四郎兵衛、和泉屋傳右衛門、明和に小橋屋新右衛門、小山屋吉兵衛、天明に井筒屋治郎兵衛、加賀屋源兵衛、寛政に小橋屋四郎右衛門、安政に河内屋與三兵衛など、取組先が幾分變つて居る。河内屋は明治になつても暫く取引があつた。吳服は享保の頃より盛岡の美濃屋、茶碗屋、芦野屋などの嚮來るを需めてゐたが、寶曆に京都の小刀屋太兵衛と取組を始め。明和に松屋清左衛門となり、江戸越後屋八郎左衛門、天明に龜屋七郎右衛門、寛政に曾家名莊兵衛、小橋利三郎など、取

組が行はれて居る。郷社八幡宮の石燈籠と唐獅子は安政年間に、大坂の木綿問屋河内屋與三兵衛に託して、大坂の石工みかけ屋新三郎の拵いたものである。

### 雜貨

江菰商人の隅屋定四郎、享保十四年に京都の小間物を嚮來つた。好みの煙管、煙草入、櫛、簪の類は此頃より徐々と大畑にも廣まつたと思はれる。元文には越前新保より石室、水屋、井戸梓、樹盤、戸間、板石、角石、石塔などを、相馬より串柿、相馬焼などを持來つて居る。大畑及北通一帶に石材、石塔などに北越もの又は御影ものが多いのは、往來の諸船が荷脚の都合より、好んで石材を積來つたからである、適當な石荷のないときには惣々砂利を積込んで來たといふ。

### 問屋

大畑の問屋は享和の頃に六左衛門、與左衛門、左助の三店があつた。慶應の頃には關谷善右衛門、青柳惣兵衛、菊池與左衛門と云つた。外に小宿と云ふのが拾軒程もあつた。船頭とか上乘とかは問



屋に泊り、水主達は小宿に泊る筈であつた。

### 寺小屋

明治六年二月十一日大畑小學校の出来る以前迄は、教育は所謂寺小屋で施された。大行院宮浦觀黃、菊池治五右衛門、坪弓治、正教寺竹園義澄の四ヶ所にて、村内の子弟を預つて教授した。宮浦菊池、坪の三氏は男兒を預り、竹園氏は専ら女兒を預つた。教へる處は読み書きの二つ、即ち讀書と習字の二つであつた。先生は漢學者と僧侶となつたので、算盤は卑しきものとして教へなかつた、故に算盤を覚えやうとする者は、寺小屋より戻つてから、更に店屋に行つて二三天作五ミ、改めて教はつた。

### 漂流人

大畑湊村の佐兵衛なる者、寶曆十一年仙臺領荒濱浦より出船の處、難風に逢ふて唐國へ漂著し、同十三年五月日本に送られて盛岡へ下り、一應取調の上にて湊村の親類共へ預けられ、御助扶持を

下されて海上渡世を禁ぜられた。同じく湊村の文治なる者も、寶曆十二年宮古浦の釜石を出船して難風に逢ふて唐國へ漂著し、明和元年七月日本へ送られて盛岡へ下り、一通り御調の上にて湊の親類へ預けられ、御助扶持を下されて海上渡世を差止められた。文治は寛政九年七月病死し、佐兵衛は享和二年三月七十三歳で病死した。

#### 乍恐御訴奉申上候事

一大畑湊村佐兵衛儀、寶曆十一年船手渡世に付仙臺領荒濱浦より出船仕逢難風唐國へ漂著仕、同十三年五月森岡表え罷下候處、海上渡世御差留御助扶持被下置在處に相愼罷在候、然所去月中旬より風邪に付御役醫榎快庵様御療治申請候得共、當七十三歳に罷成至而老衰之上、尙又持病之瘡差發御町醫榎昌庵、同鍼醫林養設藥鍼相用色々養生仕候得共不相叶、今午刻病死仕候此段御訴申上候 以上

享和二年三月十二日

湊村佐兵衛組合連名 印  
大畑町檢斷傳右衛門 印

箱石覺左衛門様 毛馬内伴治様



### 追放人

追放の科刑には近中遠の三階があつた、遠追放の者は大抵此田名部通に送られた。其多くは牛瀧に謹慎を命ぜられたが、大畑にて謹慎を命ぜられた者もある。

大畑へ追放被仰付た者安永九年五月上田通澤田村喜助、天明八年十二月廿一日野田通澤田村源之丞、寛政四年二月盛岡十三日町三太、寛政八年五月沼宮内通一方寺村肝煎巳之助、同九年十二月池田左平太組同心幸七、同十一年八月尾去澤銅山獅子村安右衛門、同十二年十二月遠野上齋澤村忠之助、享和二年正月矢幅村權藏倅倉之助、文化元年十一月見前通見前村惣七弟善助、右之内上田通澤田村喜助と、野田通澤田村源之丞の兩名は謹慎中に欠落して行衛不明となり、見前村善助は東在に謹慎地を替へられた。

乍恐書付を以御訴申上候事

一當五月大畑え御追放被仰付候、上田通澤田村喜助ニ申者、去る十八日夜風と相見得不申、枝村は不及申近郷共色々相尋候得共行衛知不申候、若重而立歸候は、早速御披露可仕候、右爲御訴如此御座候 以上

安永九年子八月 大畑町檢斷 平 八 宿老連名

野村嘉左衛門様 岩間十郎右衛門様

### 佛法僧

寛政三年圓祥山にて、大安寺の軒近く佛法僧の啼くを聞いた。文化二年にも圓祥山にて佛法僧の鳴くを聞いた。此鳥は宇會利の山深く棲むと云はれる、大畑は其の山續きなので、斯くは圓祥山にも屢々來り啼いたのであらふ。佛法僧は鳩位の大きさにして稍細長く、雄は嘴脚ともに朱く、首より胸前の邊青黒く、腹下背上及翅本は一帯に濃線をなし、翼の中間に微な濃線の羽あり、雙翼より尾にかけて黒さも烏よりは淡いと云ふ。雌は嘴に淡き線ありて脚は淡褐色、首微に黒くして頂より尾、兩翼に至る迄、皆な淡黒色を帯びて淡い斑紋があり、喉下より腹下白くして黒点があると云ふ文化八年には宇會利山にて佛法僧の啼くこと繁く、或る夜佛法と六百八聲僧と三聲を鳴いたと云ふ佐井山にても時折聞くことがある。

### 熊送り

大畑山にて熊送り



大畑の山中には昔から熊が居る。今でも時折熊獵を聞くのである、現在熊獵に従事する者は小目名の北上藤三郎君、畑中惣助君、藥研の古畑淺吉君の三名である。古畑淺吉君は親父の代から、伴れられて熊獵に従事して居るが、先代以來三十九年の間に、三十八頭の熊を射留めた云ふ豪の若者である。熊を射留めると熊送りと稱して、所謂引導を渡す法式がある。此熊送りの法式が下北には二つある。刀の立て方や呪文の唱ひ方に違ひがあり、假令ば禪宗と淨土宗と云つた様なものだ。熊を射留むると、先づハタと稱して幣束を截つて祭る。此ハタの截方は春と秋とによつて異なるし牝と牡とによつても又違ふのである。呪文を口の中に唱ひながら、射留めた熊に刀を立て、呪文の間に皮を剥ぎ四肢を取去るのである。皮を剥ぎ終ると家に擔ひ戻つて、祭壇を設けて頭をちやんと皮の上に乗せて安置し、燈明を點じ神酒を獻じ種々の具物を供へて、町重に祭事を營むのである。之を熊送りと云つて、狩人の行ふ最も嚴肅なる神事の一つである。此祭事は七日の間は朝夕神酒と燈明を獻するのである。都合によつて熊を賣却した際には、ハタ即ち幣帛を代りとして、祭事を行ふのである。

## 良俗

正津川、關根橋、小目名、木野部などには、今も僧侶に對して美風を維持して居る。不幸があつて僧侶を招くと、物堅い家にては戸主又は親類の者二、三人にて村端迄出迎へる、少くも二、三軒先き迄は出て迎へるのである。戻るときにも矢張その如くする。僧侶が家に入ると、主人は横座を去つて、其處に僧侶を坐らすのである。横座とは地方に於ける圍爐裡の正面にて、常に家長の坐る處である。

關根橋や小目名にては、婚禮の際に幹旋の人々はもとは袴を著け刀を帶びた。先づ酒一巡した頃に、莊重なる神樂の調子に伴れて三々九度の盃を行ふ、之を「うけとり、わたし」と云つて居る。次にお嫁さんは宴の最中、燈火持と稱するものを左右に侍して、神樂の拍子につれて盃を客にさして一巡りするのである。袴帶刀の事は明治の末頃迄行はれたが、今日にては廢つた、神樂の拍子につれて盃をする事だけは、今日尙ほ行はれて居る。因に此神樂の調子を七琴調と云つて居るが、實は盛岡の七軒町から出たもので、七軒町と正し。

## 黒森山

黒森山には神秘的な物語がある。大畑に坪長右衛門といふ侍があつた、明暦何年かに木野部山の



木を澤山に伐つたが、其年は相憎雪が薄くて、如何やうにも木を出すことが出来なかつた。依つて山嶺に祈願を立て「何日以内に大雪を降らして頂ければ、此山に立派な御宮を建立して差上ます」と誓つた。此願は叶つて幸に大雪が降つた。神助によつて望み通り木を出すことは出来たが、其後忘れたやうに建立を怠つて居ると、坪は急病で頓死した。近親の者共が集まり葬式の相談をして居ると、其相談最中に死人がウンと唸つて不思議にも息を吹返したのである。そして「只今枕許に白装束して黒い馬に跨つた神様が現はれて、坪ッ、坪ッ、と呼ばれて祈誓を果すならば、此度限りは差許るして遣はずぞ」と仰せられたと思つたら眼が覺めた。何年前に木野部山に願掛して、夫を等閑にしてゐたのは相濟まなかつた、全く悪るかつた物語つたのである。坪は早速修験者大寶院覺圓の許に參つて、右の顛末を詳細に話して、木野部山へお宮建立の事を相談に及び、延寶二年九月御宮を建立して、宮古の黒森山神社を分靈し、黒森山玉垂大明神と勸請した。

木野部山へ神社建立の頼合を受けた大寶院覺圓は、宮古の産である。神官松林氏の二代目に當る人で、大安寺の開山一東異寅に隨伴して、正保二年の秋大畑に來り共々禪達庵に在つた。然るに庵向ひに住する松林氏は女子ばかりで、繼嗣がなかつたので婿に貰はれた。明暦年間上京して聖護院官殿にて院號並に法官を頂戴した。郷里の黒森山は附近に聞へる靈山なので、之を木野部に分靈し勸請したのである。

## 丸山稻荷

大安寺にて圓祥山の頂に祀る丸山稻荷は、靈驗あらたかなる稻荷と尊信されてゐる。毎月十日には大安寺にてお供物をして居る、婦人の手の觸れた物は嚴禁で、一切は寺の男達の手で調度して供えて居る。此丸山稻荷が明治の初年頃に、上林藤右衛門の持船富榮丸に乗つて、函館へ往返した話が傳つて居る。富榮丸は函館に船懸りをしてゐた、明日は大畑へ戻る事に準備してゐるに、丸山稻荷は其晩船頭大畑屋宇之松の枕神に現はれて「函館に用事ありお前の船に乗つて來たが、私の用が未だ濟まぬゆゑ、明日の出船を一日延ばして欲しい」と告げられた。船頭の宇之松は大いに恐縮し船中を清掃してお神酒を供え、出船を一日延ばして戻つた。大畑へ著くと直に大安寺に行つて、丸山の稻荷様は只今御戻りになりましたと報告した。哲龍和尚は馬鹿を云ふなと叱つたけれども、委細を聞いて始めて合点した、此丸山稻荷が函館へ行つて來たことは、當時遠近の評判であつた。

丸山稻荷に就て尙ほ物語がある、大安寺の乾餅と云ふて名高い位、大安寺にては寒餅を吊して乾したものだ。或る時菊池治五右衛門（九江氏の父）が大安寺に赴き、道の傍に狐が親子二匹腹垂れてキチンと坐つて居た、妙なこゝもあるものと思乍ら寺に至ると。泰中和尙がカン／＼に立腹してゐた、昨晚狐が乾餅を大半何處へか運んで仕舞つた、甚だ不埒な狐である、丸山の稻荷様に申



上げて、今日から寺の山を退出して頂くと云ふのであつた。治五右衛門は先刻の狐の態度が初めて領けた、悪い事をしたので謝罪して呉れろと頼むのであつたらふと、泰中和尚に今回限り寛辨して貰ふこゝを頼み、夫より四方山の話をして戻ると、以前の狐二匹は又候道端に走出て、頭を垂れて感謝の意を表したと云ふ。

### 平助 稻荷

寶國寺にも古から稻荷を祀つてゐた、年経るまゝに何時もなく供物も忘れられてゐた。然るに天保の頃或る晩、南町の平助の宅を夜更けて叩くものがあつた、御用なら明日に御願ひしたいと、平助が寢床から答へる。平助ツ、平助ツ、己れは寶國寺の稻荷である、和尚が近頃粗末にするゆゑ、貴様から注意して呉れろと云つて立去つた。平助はびつくりして起出て見たが、戸の外には最早影も形もなかつた。平助は翌朝早速お寺に行つて委細を話した、和尚もびつくりして、其月の十日に日光院の行者を招いて、稻荷様のお祭を執行し、爾來十日にはお寺でお供物を續けて居る。

### 佛像 二体

義光山寶國寺に在る彌勒と大日の座像は、高さ二体にも五尺程もあり、稀に見る大きな佛像である。古く天下森に到樂寺といふがあつて、其寺に此佛像が納まつてゐたが、年経るまゝに何時しか廢寺となつた、湊の下町を寺町とも呼ぶのは、此到樂寺の趾だからである。佛像二体は寶曆の頃には春日神社の軒下に在つた、明和には延壽庵の軒下に移された。其後百年餘も風雨に露されて、明治の初年頃には甚だしく壞敗してゐた、庵主の教全が始末に困じ恰度薪が欠乏したので、既に打割つて焚物にしようとしたのを、寶國寺の察音和尚が止めて寺へ引取つたのが明治十六年である。爾來修服を志してゐたが、明治廿六年二月佛師を得て修腹を始め、二ヶ月にして出来上つた、其年七月七日開眼式を行つた。其日は前夜來大雨であつたけれども、開眼式に併せて郡司大尉千島遠征隊の、鮫浦に於ける遭難溺死者の供養をも兼營だったので、參詣者遠近より群集し非常な賑であつた。恐山にも半身にて三尺ばかりなると、頭のみにて二尺にも近い佛像があるが、或は同一佛工の刻んだものだらふと云ふ。

### 不動 尊

文政十年七月十九日夜、八ツ半頃御制札の近所より出火して、本町四十軒焼失した。此火事に東



町は危険に類したが、幸ひに延焼を免れた。現在町役場の在る處に當時庚申堂があつた、火の子は庚申堂に雨のやうに降り落ちたが、不思議にも焼けなかつた。日光院の行者が堂を開けて調べると机の上に不動尊が一軀在つた。庚申堂も焼けず、東町も延焼を免れたのは、不動尊の御利生に因るのであつた。然るに此不動尊は元來は寶國寺のものである、火事の騒ぎにどうして庚申堂に遷されたものか、誰も持つて來たと云ふ者がなく、全く不思議であつた。火事の後に寶國寺から戻して呉れるに、日光院に話があつたが「行者の許に御出になつたものは、假令何處から掛合が來ても戻すことは出來ぬ」と、日光院の行者が斷つた。此時火形と劍が失せてゐたので、新に作つて爾來日光院に安置して居る。

### 道祖神

明治十年頃、大畑に警察分署があつた、現在町役場の建物である。庚申堂の社地に建てたのであるが、下は事務室で二階は當直室であつた、分署も雖も署員は巡查部長と、巡查二名だけであつた。當直の際に、枕を爐の方に向けて寝ると、夜中に突然床を持上げられる氣配がしたり、或は家鳴り震動して物凄いやうなこゝがあつた。分署が廢されて後暫く空家になつてゐたのを、大畑村役

場に敷地建物とも僅か六十二圓にて讓受けた。役場になつてからも、當直の人々は夜々種々なこゝに脅かされた。宮浦力四郎翁も其頃の村筆生で、當直の度毎悪夢に襲はれたが、遂に其正体を發見した。村役場の裏口に踏石にして居たのが、もつたい無くも庚申堂の御神体、道祖神であつたのだ。此石を引起して住吉神社の社前へ建てた、爾來何事もなくなつたと云ふのである。

### 靈夢の鶏

青森丸と云ふ小蒸汽船が青森、大湊間の定期航路に就いた、明治十五年舊十一月晦日が初航海であつた。此日晝の十二時に青森を抜錨した、船客は大畑心光寺の住職岩神存龍師外一名であつた。青森丸はもと利根川を往復してゐた古船であつた、初航海の日に早くも汽鐘に故障を起して、寄港地の野邊地に入つて修理した。爲めに豫定より遅く来て、二日の朝大湊に入港したが、岩神師は此朝不思議な夢を見た。赤い鶏冠のある雄鶏が羽織袴を着けて船室に入つて來て「私は昨日買はれて參つたものであるが、三十錢を惠まれる私の命が助かる、依て何卒御慈悲を願ひたい」と云ふのである。著船して岩神師が舳に乗移らうとしたら、一羽の雄鶏が飛び來つて肩に止つた。流石は僧侶である、今朝の夢は之であるかと直感して、船の者へ交渉すると、矢張り三十錢で讓つて呉れ



た。師は上陸して布施松司方に休憩し、携へた鶏を差出して、適當な雌鶏を探し一番こして養ふことを頼んだ。

岩神師はそれより三年を経て大患にかゝつた、其際に頻死の病床にあつて、又も不思議な夢を見た。前回同様に羽織袴を著けた、首だけ鶏の男が病室に入つて来て「私は先年貴僧に助けられた者である、貴僧は只今大患に悩むも、必ず回春して七十五の三月十五日迄は壽命がある」を告げられた。處がその後奇蹟的に病氣が薄らいで、一時は絶望視された大患も癒えたのである。

大患後二十年の月日は流れて、岩神師は七十五歳の老僧となつた。曩に鶏に告げられた死の三月十五日も近づいたので、老僧は自ら遷化の日の調度を整へた。後日のため靈夢の次第をも、自ら繪き讀をして一幅の軸とした。三月十五日には、田名部常念寺を首め郡内同宗の住職を招ぎ、齋戒して入寂の法會を行つた。此日は老僧に別條なく假葬式だけを取行つたが、之より三月遅れて、明治三十九年六月十五日（閏四月廿四日）大往生を遂げた。

### 尼 妙 鈞

淨土宗義光山寶國寺第四世隨緣和尚の代である。寛文七年或る日、野邊地の船問屋立五一から

「私方の船が大阪から、御寺様宛の大箱荷物一個を積参つたにより、荷請取の人数を御遣はし下さるゝ」この態夫があつた。寺では心當りのない荷物なので、一應壇家の總代達へも聞き合したが矢張り不明であつた。不審ながらも兎に角若者數名を野邊地へ差遣はした、すると數日の後に、大きな箱荷物を擔いて戻つた。箱蓋には奥州南部大畑村寶國寺殿行、と立派に認められてあるが、差出人の名は何故か書かれて居らなかつた。

壇家の總代達も立會ふて箱荷物の蓋を開けると、金光燦然たる阿彌陀如來の御立像が出て來た。御身丈三尺、臺座から後光迄六尺、誠に有難い御姿であつた。何れ篤信の人から寄進したものとして、寶國寺の本尊佛として安置し。従前の本尊佛は湊の延壽庵に直した。



◆來如陀彌阿寺國寶◆

之より前、南町に木材を業とする中島傳助と云ふ者があつた。藩山羽色の北の股から檜の良材を密伐し、樺材に賣出して密に巨利を獲てゐたが、如何なる故ありしか、妾の某之を盛岡に訴出でた



ので、傳助は直に召捕られて、吟味の上にて斬罪に處せられ、梟首された。然るに一兩日するに獄門臺の首は盗まれた、役人衆は勿論詮議をしたが首泥棒は不明であつた。傳助の妻は愁しみ嘆いた、遂に剃髪して尼妙鈞となり、亡夫の菩提を弔ふために諸國巡禮に出立ち、到る處の神社佛閣に參じて、亡夫の冥福を祈つて廻國し、數年を経て大畑に戻つた。歸村の後には渡世の料に豆腐屋を始めたが、尼は信心堅固にして淑徳の名あり、豆腐も至極上手なりしたため繁昌した。尼は亡靈供養のため大安橋向ふへ五輪の塔及地藏尊をも寄進した。斯くて老後を安らかに送つて極樂往生を遂げたが。臨終の際に獄門臺の首を盗んだ者は自分である、首は大安寺の藥師堂の頂に葬り、遺髪を身に付けて廻國し、大坂にて名ある佛師に頼みて、遺髪を内佛に納めて彫刻して貰ふたのが、寶國寺へ納めた阿彌陀様である、云々と語つて冥目したと云ふ。

### 僧 異 寅

圓祥山大安寺の開山一東異寅は、廿九代の藩主重信公と幼少の頃御手習明輩であつた。此二人は母方に就いて、奇しくも相似た物語を持つて居る。異寅は閉伊郡豊間根村肝煎助左衛門の倅にして母を松云ふたが非常な不女であつた、色黒く鼻低く齒反りて眼圓く、丈短くして加ふるに鳩胸で

あつた、四十に及ぶも誰一人娶ると云ふ者がなかつた。然るに旅僧の勧めに随つて觀世音を信仰し朝夕怠らずに觀音經を誦してゐたが、有難くも良縁あり三日月の懷に入るに夢見て妊娠した、生れたのは異寅である。一子出家すれば九族天に登るの諺に従ひ、洞澤山の花嚴院に入れて出家さして一道と云ふた。重信公の母は花輪村の郷士花輪内膳の女松子である、異寅の母も同名である、此松女も非常な醜婦であつた。廿八代主重直公領内を巡視して、花輪内膳の家に宿られ戯れて懐胎せしめたのである。異寅は慶長十九年に生れ、重信公は元和二年に生れたから二つ違である、彦六郎と稱し同じく花嚴院の和尚に學ばれた。彦六郎は十三歳にして三戸城に迎へられた、異寅の一道は時に十五歳である、兩人は手をこつて別を惜しんだと云ふ。

異寅は十七歳にして行脚に出た。巡り／＼て雲水十五年、正保二年大畑に來た、三十二歳のときである。善達庵を修して留まることにした、萬治二年七戸に赴いた。此時七戸城には彦六郎二千三百石を食みて、七戸隼人正重信と名乗つて居た。城に入りて拜顔を得久瀧の情を申述べた。夫より再び大畑に戻り、寛文三年大安寺を開いたのである。異寅を三月和尚と俚言したと云ふが、母が三日月の懷に入ると夢見て懐胎せしに因む。

異寅は貞享元年盛岡に出で、廿九代の藩主とされる重信公に御目見得をし、御言葉によりて暫く城内に逗留し、藩公に親しく御話相手をした。元祿元年は公の生母、慈徳院殿松室貞林大姉の五十



年忌に相當したので、大安寺を隠居して豊間根村に隠退し、花輪の御廟所に於て讀經燒香を申上げた。後に重信公より隠居扶持を賜ふた云ふ。

一東異寅を圓通寺五世の法子とするは當らない。異寅は藩主と非常に親しい關係にあり、且又重信公は名君であつたので、幼少時の交りを捨玉はず、随分と異寅の面倒を見たやうである。湯坂山から圓祥山一帯を指して、彼れを御坊に遣はすと云はれた等の話も強ち無稽とは云へない。然るに後世半島の曹洞宗の統制の便宜上から、異寅を圓通寺五世の法子として、客末扱にして來たのである。實曆に鑄た梵鐘の銘に「奥州階上郡圓祥山大安禪寺者、州之圓通五代命庵和尚之神足一東寅公挿艸之地而」云々と刻まれてあるけれど、大安寺は事實上異寅獨創の寺なのである。

### 僧 音 柳

心光寺の九世音柳は同寺中興の僧である。順禮三十三觀音と六地藏を建立し、安永六年に江戸石町から石工を招いて、山門前に石橋を架けたのも此音柳である。至極豪氣の僧にして、容易に人に屈する事はなかつた。曾て藩主の寺に附動に参越した、其日は相僧と雨模様の天氣であつた、門前に於て警護の士から長柄傘の使用は門外限である、門内は差掛罷成らぬと制止されたけれども、音

柳は一向に平氣なもので、萬一にも法衣が濡れては附動が出来申さぬと突張り、門内をも悠々として長柄傘の儘で玄關へ通つたと云ふ。在住四十五年にして、寛政八年入寂したが、茶毘に際して常の人よりは舍利が多くあつたので、時の人之を音柳の無理舍利と稱した。

### 僧 日 瑠

本門寺の十二世日瑠は博學にして宏才又豪邁の僧であつた。中山の法華寺にあつて修行し大いに徳を積み、馳て貫主にも推さるべき地位にあつたけれど、一婦人のため破戒の僧として山を逐はれ松前に渡つて流浪してゐた。之が嘉永の頃で日瑠四十歳臺の時である。「大畑の本門寺は久しく無住である、松前に放浪して居られるよりは、大畑に行かれたがよい」と世話して呉れるものがあつて本門寺に坐るこゝになつた。葵と十六瓣の菊の紋打つた過中箱を捧げさせ、立派な長柄傘を差掛けさして堂々と入山したと云ふ、過中箱は什物として今に保存されて居る。此時日瑠は留守居の寺男山村の爺といふのに寸志として、金十兩を遣はしたと云ふから、可成な金を持參して居つたらしい。日瑠は中山の本山に在つた僧だけに祈禱がよく出來た。慶應三年四月はじめ頃の事である、加賀の御城米船が大畑滯泊の砌り、御役方淺倉元助殿保管の金子壹千貳百兩紛失した。加賀の役人衆か



ら犯人は土地の者に相違ないを訴出たので、代官所より出張して詮議に及び、浦々は船止めをなし白糠に中野澤へは役人を派して、通行人をも厳しく詮議する騒ぎであつた。嫌疑を蒙つて責め折檻に遭ふ者も寡くなかつた。其間に塵捨場へ七百兩を箱へ入れて捨て、置いたのが発見され、次で貳百何拾兩かも発見されたが、残る貳百兩餘りは如何にしても出て來ない、また犯人も舉らないので本門寺に於て祈禱することになつた。日環は潔齋して祈禱を行つたが、列席の衆中に「何の法華坊主が」に密に嘲笑した者があつた、加賀様下役の作太郎と云ふ者と家來の嘉六とであつた。祈禱中に果然此兩人は震ひを起して嫌疑がかつた。取調の結果は果して兩人の所爲であつた。

日環は病者をも祈禱で癒した。病人の非常に衰弱して居るさか、或は遠方に在るときには、寄人さ稱して代り人を用ゐるのが例である。此寄人にペンタ子と云ふ女を使つた、彼女は寄人さして遺憾なく効果を擧げた。少しく低脳であつたけれど裁縫は頗る達者であつた、ペンタ子の縫つた物さ云へば、今にお針上手なことの代名詞になつて居る位だ。

明治十三年の秋九月、寶國寺の入佛式に増上寺の管長福田行戒上人が來られた。天下の名僧である、一行の行列は盛んなもので、人々は土下坐して此の生佛様をお迎へした。此時に行戒上人は、土下坐の人々の中に首を垂れて恭々しく出迎へて居る、一人の僧侶の上に目を留めた。噫何んさ云ふ奇遇であるか、其僧こそは四十年來消息を絶えた學友、曾ては博學宏才を稱せられた朋友の日環

であつた。行戒上人は駕籠を降りて日環の傍に立ち、衣の下に兩僧堅く手を握つた、そして一は昔を忘れざる友の温情に泣き、一は昔の友の餘りにも恵まれざるに泣いたと云ふ。

日環は明治十七年三月十三日八十歳にて入寂、亨教院日環聖人法號する。

### 僧 察 音

寶國寺中興の僧十四世察音和尚は偉らかつた。察音は三戸の産、故あつて母に抱かれて大畑に來た、三歳のときに寶國寺に貰はれて育つた。幼にして慧悟、十六、七のまきに奥戸の信願寺を預つて居た、安政五年九月寶國寺に入つて十四世を繼いだ、察音時に十九歳である。普々の僧でなかつた事が窺はれる。此頃寺が廢れて居たので之が中興を念とし、百方勸化して文久二年鐘樓を建て、慶應二年庫裡を建て、明治十一年更に本堂の建立に着手し、同十三年竣工した。同年九月増上寺の管長福田行戒上人を招じて入佛式を行つた。在住四十年に及びて明治三十年五十八歳にて隱退し、同四十三年三月七十一歳にて入寂した、辭世の歌がある。

我は只僧の一字をいたゞきし、しるしはかりに一字建立

察音師は三男二女あつたが、肉親の故を以て敢て之を殊遇する事なく、寧ろ他人の法嗣子を重じ



て却て之を厚遇し、遺産の如きも悉く之に譲つた事などは、餘人の容易になし能ざる處であつた。因に明治十一年本堂再建に當り、寮音師は次の作業歌を作つて、地固めの善男女に歌はした云ふ。

一ツトヤ 偏に御上の御恵みで目出度い今度の御再建、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 二ツトヤ 再び逢はれぬ御再建参りて御縁を結ばれよ、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 三ツトヤ み法の庭には縁の綱すがりて助かれ御本願、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 四ツトヤ 容易に出来ない御再建彌陀の本願強き故、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 五ツトヤ いつでも参る人々は横に厄難障りなし、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 六ツトヤ 無量の悪事は皆なすて、今より頼めや御本願、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 七ツトヤ 南閻浮洲のこの端に嬉しき今度の御再建、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 八ツトヤ 山より高しと聞くよりも彌陀の御恩を報すべし、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 九ツトヤ 此處のお寺は我々の盡きせぬ住家と定まれり、アラ有難や南無阿彌陀佛  
 十ツトヤ 遠い未來はこゝにある大願満足限りなし、アラ有難や南無阿彌陀佛

### 村林源助翁

村林氏初代は享保三年江劬の生、同十七年二月十五歳にして郷里を出で、四月大畑に移住した。

二代源助氏は寛延元年の生れである、大畑の檢断宿老等を勤むるこゝ二十五年、識高く文秀で、頗る重きをなした。鋤叟山人、風雷窟、鬼工、藤南囊など、號した。晩年中風に罹り、其病中に筆を執つて「原始漫筆風土年表」五十二卷を記述し、文政四年六月十八日歿した。享年七十四、文山義海居士と法號する、碑は大安寺に在る。遺著「風土年表」は貴重なる文献として推賞されるが、第一、第四の兩卷は惜くも既に散佚して、今在るは五十卷のみである。



◇碑の翁助源林村◇

盛岡親興

藤南囊碑銘應需

蘭室妙香非炷香。花之君子不汚裝。幽玄靈異天然理。英譽光借日月長。



### 孝子小次郎

大畑に竹野小次郎と云ふ孝子があつた、其篤行縣に聞へて表彰された。明治十四年 明治大帝東北御巡幸の砌り、北白川宮には御代巡として、田名部に御出になつた。小次郎は孝子として御旅館へ御召を頂き、難有も拜謁を賜つた。

青森縣下北郡大畑村

竹野小次郎

其方儀爲人篤實にして幼年より孝心深く、殊に家貧親老ひたるを思ふや、癡疾の身を勵して日夜職業に従事し、未だ會て一日も息ふあらず、而して僅に賃金を得れば、己れ夫妻は惡衣粗食に甘じて、専ら父の衣服、飲食の資に供し、且父の身追々老衰歩行自由ならざるにより、常に蟄居して鬱屈するを慮り、時々負ふて田園等に伴ひ遊行せしめ、居常致々勉めて其歡心を失はざるを以て、父の齡八十に超ると雖も會て叱咤の聲を聞くなし、又曩に父病に罹るや、晝夜枕邊を離れず能く看護する等、凡そ茲に二十年終始一轍奇篤に付、爲其賞金參圓五拾錢下賜候事

明治十三年十月二十九日

青森縣下北郡大畑村

### 歌人文水

眞宗一峯山正教寺の墓地に、小さな碑ではあるけれど、一風異つた墓石がある。碑面に高松碑枯骨干爰埋とある、歌人高松南向齋文水の墓である。此仁は大畑の産にして、詩歌を以て全國を漫遊し、到る處に知己を得たが。歸來頻りに世の無情を觀じ、自ら右の碑を建て「うき世には、たれ残るべき、山ざくら。その落葉こそ、こゝにくちなむ」と辭世を詠じて刻ました。歿した年月は詳でないが、明治三十年頃迄は遙々此墓を尋ね來つて、懇に回向を頼む旅の歌人もあつたと云ふ。

### 菊池起氏

菊池起氏は天保元年大畑の生である、九江と號して詩を善くし、又、書を能くした。足跡全國に至らざる處なく、菊池九江の名は、關東、關西に於て特に籍甚である。醉興に乗じては俳畫を書いた、美女琴を彈するの圖は尤も見る處である。明治卅三年六月仙臺に歿した、享年七十三、碑は大安寺に在る。



大隴古廳老松

菊池九江

清陰百步碧龍笈。枝幹帶古如紫銅。地僻恨無三顧客。龍蟠獨自嘯天風。

述懷

菊池九江

一書一硯淡生涯。何幸時迎長者車。投轄慙吾乏供具。梅癭竹倒雪橫斜。

### 平野勇造氏

明治十四五年の頃、堺冒嶽の名にて書を元老院に送り、志を披瀝して推輓を請ふた者があつた。右書狀は差出地の野邊地警察署へ返送されて、差出人を取訊ねられたが、冒嶽は立五二の手代、當時十八歳の堺勇造氏であつた。一手代の身分にて、元老院へ上書したと云ふことは、物堅い商家の掟に叶はぬにて、主人から痛く戒しめられた。然るに氏の志は田舎の小商人ではなく、他に大いに期する處があつたので、遂に主家を退ぞき、意を決して東京に出た。

東京に出て見るに、苟くも志を他日に伸べやうとする輩は、比々として皆洋行して居る。依つて氏も洋行を企て、四方に奔走し漸く旅費を調達して、明治十八年米國に渡航した。最初は政治家を志したが、渡米後に政治家は第二である、先づ實業家たるべきであると考ひ直した、旅館の皿洗ひ

迄して苦學した。彼の武藤山治氏や、和田豊治氏などは、何れも米國苦學時代の朋輩である。

在米四ヶ年、専ら建築學を研究して歸朝した。偶々芝愛宕山に五重の塔の建築工事があつて、主任技師に招聘され、豫期以上に美事に竣工させた。其技術の卓拔優秀なるは都下に好評籍甚たるものであつた。間もなく京橋の平野家に養子となり、茲に平野姓を名乗ることになつた。次で三井物産に入社して、上海支店詰となり、上海に在ること二十餘年、巨萬の産をなして、大正十二年東京に戻つた。

氏は非常な勤儉力行家である。曾て東京を旅立つ時に、友人から饒別された麻の靴下一打を以て破ければ繼ぎ貼ぎして、上海で十一ヶ年履いたと云ふ、其一事が氏の勤儉のすべてを物語つて居る大畑出身の代表的一偉材である。因に氏が上海を去るに臨み、別宴の席上になしたる「儉約」に就ての筆記は、大正十二年六月廿五日發行の「下北新報」紙上に掲載された。

### 畑中昌太郎氏

函館の英國領事代理を務めて居る畑中昌太郎氏は、明治十五年正津川の出身である。父は盛岡の産で福田と云つた、氏が幼少の折に妻子三人を残して、家を飛び出して仕舞つた。母は二人の幼兒



を抱えて、女の手一つに随分難儀をした、氏が十三歳のまきに、その母も病死して、弟と共に伯父の家に引取られた。正津川の尋常小學校を卒へて、大畑の高等小學校に通つた、筒井武士君とは互に首席を競つたものだ。

畑中氏は志を立て、函館に出た。様似に親戚の者に佐藤と云ふ通詞があつた、氏も將來通詞にならふと決心し、ラッセルの塾に通つて英語を勉強した。ラッセルの塾からは中々人材を輩出した、氏もその一人なのだ。初め渡島支廳に通詞雇を勤めた、聽て屬に任官した。英國領事官に轉じたのは明治四十年である、此所でも最初は雇のやうな低い位置にあつたが。氏の眞摯な勤務振り、温良な態度が、間もなく認められて、遂に領事代理と迄昇進したのである。

函館に在る下北出身者のために、常々斡旋盡力されて居る。殊に青年學生のためには、好んで面倒を見て呉れる、非常に懇切に指導されて居る。

### 宮浦力四郎氏

宮浦力四郎氏は安政四年十月廿一日大畑に生る。家は慶長以來連綿として郷社八幡宮の神官である、明治八年九月大畑村八幡宮祠官となり、春日神社祠掌を兼勤した。同八年十二月大畑小學校世

話懸拜命、同十年十二月三等授業生、同十二年六月二等授業生となりて、大畑小學校に奉職したるが、明治廿二年七月大畑村収入役に當選就職、同廿五年六月大畑村助役に當選就職。同卅二年三月十七日大畑村長に當選就職して、爾來每期推されて再選重任し、大正十一年二月三日後進に途を譲りて勇退した。村長勤続二十四年、教育、治水、納税等業績頗る多かつた。在職中三十七八年事件の功により勳七等に叙され、青色桐葉章を賜ふた。

### 森又四郎氏

森又四郎氏は明治四年三月廿三日の生、明治十七年四月郡立田名部中學二年修業。夙に水産業に従事して名聲あり、識見、徳望ももに兼備はり、地方の一偉材として重きを爲した。曩に大畑村消防組頭、大畑漁業組合長、下北郡會議長、下北水産組合副組長、青森縣會議員等の要職に就き、地方産業の振展、教育の興隆、治安の維持等に盡瘁貢献せる處頗る大である。昭和七年三月大畑村長に當選し、就職幾日ならずして、大畑市街の大火に遭遇し、其復興並に前年燒失せる大畑小學校舎の再建に奔走し、大いに其實を挙げ。又、大畑多年の宿望たる大畑漁港の修築並河岸の改修を完成し、其竣工を記念して町制を敷ける等、時の然らしむる處とは云ひ、氏の力に負ふ處亦實に尠くな



いのである。現に下北郡水産會長、青森縣水産會代議員並帝國水産會代議員である。

畧歴 △明治卅七年五月大畑村會議員△同四十年九月下北郡會議員△大正四年十月下北郡會議長△明治四十三年十月大畑漁業組合長△明治四十一年四月下北郡水産組合議員△大正五年四月下北郡水産副組長△大正十一年四月下北郡水産會副會長△大正十五年二月下北郡水産會長△明治四十三年九月大畑消防組頭△大正十四年三月所得稅調查委員△大正四年四月國稅營業稅調查員△昭和二年三月青森縣會議員△昭和四年一月帝國水産會代議員△昭和六年一月帝國水産會評議員

### 町 村 長

大畑村外二ヶ村戸長役場時代に於ては、戸長は松田俊藏、大場小平太、柳澤伊左衛門三氏相續いで就職した。町村制施行當初の村長は菊池雄太郎氏にして、次で大場篤三郎氏就職し、明治卅二年三月十七日宮浦力四郎氏就職した。宮浦村長は毎期再選重任して、二十有四ヶ年勤続精勵し、教育及び衛生の普及、産業の發達等に貢献する處多かつた、大正十一年二月後進に途



大畑町長 森又四郎氏

を讓つて勇退した。大正十一年三月瀬川忠夫氏新に村長となり、在職十年最も力を村財政に致し、治績尠くなかつたが、在職中病魔の冒す處となつて斃れた。昭和七年三月廿六日森又四郎氏名譽職村長に當選就職した、氏就任の前後に大畑小學校舎の燒失、大畑市街の大火等あり、村政頗る艱難の時に遭遇せるが、先づ村内黨争の弊を除去して、舉村一致以て災後の復舊に當るの策を樹て、此方策大いに効を奏して、復舊の諸施設迅速に成り。例の河口修築と相俟つて、遂に昭和九年五月一日町制を施行するに至り、初代の大畑町長となつた。

### 助 役 收 入 役

大畑村助役は町村制施行以來、磯谷嘉藏、宮浦力四郎、穴澤直哉、吉田小十郎、高橋寛享、伊藤金治と相續いだ。伊藤金治氏は大正九年一月十二日就職、毎期再選重任して現在に至つた



大畑町収入役 石澤喜代太氏



大畑町助役 伊藤金治氏



収入役は宮浦力四郎、柳澤伊左衛門、堺藤次郎、堺龜吉、椎野恒治、石澤喜代太と相續いた、石澤喜代太氏は大正十五年三月二十二日就職、毎期再選重任して現在に至つた。

### 土地

大畑町は約十六方里の廣袤を有するも、其九割強は國有地である。國有地は山林二萬一千五百九十七町六反歩、原野其他二十五町九反歩にして、外に御料地一百三十九町三反歩がある。民有地は凡そ一千五百町歩にして、之を内譯すると次の如くである。

△民有々租地 宅地十四萬二千坪、田一百十三町六反歩、畑二百七十九町五反歩、山林七百四十九町三反歩  
原野三百卅二町四反歩、其他一町二反歩 △民有免租地 學校敷地六千七百五十坪、墳墓地二千三百坪、社地二町歩、其他七反歩

### 戸口

昭和八年末に於ける大畑町の現住戸數は一千三百六十一戸にして、人口は七千四百廿八人、内男

三千七百六十三人、女三千六百六十五人である。

字	戸數	人口	字	戸數	人口	字	戸數	人口
南 町	四七	二六二	本 町	九三	四一一	東 町	九〇	三三三
新 町	一九三	一、〇六八	中 島	六三	三四一	淡	二一七	一、二〇四
上 野	六九	二四八	湯 坂 下	五〇	三一	孫次郎間	四二	二五七
二 枚 橋	六〇	三七七	釣 屋 濱	二〇	一五五	水 野 部	七〇	三八五
赤 川	三四	二〇五	高 橋 川	一二	七二	小 目 名	六三	三六九
正 津 川	一八六	一、一七七	關 根 橋	四五	二一九	上 下 小 川	四	一七
藥 研	三	一一	計	一、三六一	七、四二八			

業態別戸數は漁七百十戸、農二百七十戸、商九十五戸、工二十四戸、交通四戸、公務及自由七十戸、其他百八十一戸である。

### 生産額

大畑町に於ける昭和八年の生産總額は、五十九萬六千圓である。内水産三十四萬七千九百圓、林産十六萬八千八百圓、農産七萬二千六百圓、畜産三千八百圓、工産二千九百圓である。水産は本町産業の大本にして、總生産額の六割に當る、其主要なるものは柔魚にして三十三萬圓に達する、柔



魚漁の豊凶は實に本町の振否を分つ處である。農産の重なるものは米、大豆、馬鈴薯等にして、米は平年一千二百石を産する。林産は製材、木炭、薪材等にして製材は樺を最として、杉、松、桐の類である。

### 財政

町村制施行當初の明治廿二年度に於ける、村歳入出決算は次の如くであつた。

村歳入 壹千三百卅三圓卅錢八厘（内國稅交付金六圓余、繰越金貳百九十五圓余、村稅壹千卅一圓余）歳出 壹千三百卅三圓廿四錢二厘（内役場費壹千貳百四十五圓余、會議費八十圓余、雜支出七圓）

一區歳入 壹千八百八圓六十六錢七厘、歳出 壹千卅三圓五十三錢二厘（内會議費卅七圓余、土木費二圓余、教育費三百十六圓余、衛生費六百六十六圓余、雜支出九圓余）

二區歳入 二百卅七圓六十九錢一厘、歳出 百六十三圓九十八錢九厘（内會議費十七圓余、教育費百四十六圓余）

村區を通じて一ヶ年度約二千六七百圓の歳入出であつた、翌廿三年度も略ほ同額にて、此頃村長俸給月十一圓、病院長月俸二十圓であつた。之より十年を経過して、明治卅二年度に於ける決算高は歳入四千九百九十六圓九十七錢六厘、歳出三千四百十六圓三錢五厘となり、約五割の増加であつた。然

るに日露戰役以降は世の趨勢に伴ふて、年々著るしく激増し來つた。

年 度	歳入決算高	歳出決算高	臨時	經常
三十八年度	六、二一〇・一三七	四、九二七・五九六		
四十四年度	八、八六六・一三九	八、二一九・四二八		
大正六年度	一五、八九二・三四九	一四、九九六・〇七〇	臨時	四〇、六一七・六一〇
大正十年度	八二、一六三・四六〇	八二、一六三・四六〇	臨時	四一、五四五・八五〇
昭和元年度	五七、三一三・六八〇	五七、三〇六・九三〇	臨時	四二、四五二・四二〇
昭和五年度	六三、二二七・七二〇	六三、一六〇・八二〇	臨時	四二、七〇八・四〇〇
昭和八年度	一一一、四六六・一一〇	一一〇、七五七・〇三〇	臨時	四二、二五九・〇六〇
			臨時	六八、四九七・九七〇

### 小學校

大畑尋常高等小學校 明治六年二月十一日の創立である。舊役所前小路の神明社地跡に在つた。大正九年現在の地字伊勢堂に移る。學級尋常科十二、高等科四、兒童尋常科七百八十八名、高等科二百四十四名である。外に分教場四ある。

小目名分教場 明治十年創立、兒童五十九名



關根橋分教場 明治十三年創立、児童四十八名  
 二枚橋分教場 大正六年四月三十日創立、児童六十二名  
 佐助川分教場 舊木野部、赤川の兩分教場を併合して、昭和九年九月一日創立、児童百廿七名  
 正津川尋常小學校 明治十年一月十七日創立。舊村の東端に在りしが、明治三十三年六月現在に移した。四學級、児童二百十名。

### 公立病院

公立大畑病院は明治十六年の開設である。初代の院長は長谷川庄之助氏であつた。現在次の通り  
 院長 高橋幸喜、副院長 音喜多兼太郎、書記 相馬榮吉、産婆看護婦 佐藤ときわ、看護婦 北村きい

### 消防組

明治廿二年八月本町に出火ありて、全焼十三戸、半焼三戸を出し、土藏一棟を焼失した。同廿八年五月湊に出火ありて、全焼十二戸を出した。此兩度の災害に懲りて、村有志者の間に消防設置の

議起りたるも、當時成年男子の多くは北海道へ出稼して、火災警戒季の春に不在なので、公設消防組の設置は至難とされた。依て尾本清助氏等主唱し、商家の子弟を叫合して、明治卅二年二月大畑火防組合を設けた、之れ大畑消防組の濫觴である。明治卅五年七月、村會の議を経て腕用唧筒一臺を購入し、大畑唧筒組と改稱し組頭に森又四郎氏を擧げた。同四十三年九月十五日を以て、茲に公設消防組となした。大正八年十月第一部、第二部に分ち同十年二月更に第三部を増設した。大正十二年六月廿九日、本縣知事より優賞旗一旒を授與された。

歴代組頭 自明治四十三年九月十五日、至昭和五年三月 森又四郎 △自昭和五年四月、至同七年二月 伊藤金治 △自昭和七年二月、至同八年四月 濱田與一郎 △自昭和八年十一月、至現在 池田峯八

### 銀行

田名部町に本店を有したる、株式會社下北銀行にて、大正十一年三月三日大畑に出張所を設置した、之れ大畑町に於ける銀行業の創始である。下北銀行は昭和四年四月八日、株式會社第五十九銀行に合併したるを以て、同日より第五十九銀行田名部支店大畑出張所と改稱した。主任山本辰吉氏は開業以來の勤続者である。



盛岡銀行田名部支店大畑派出所は、大正十一年三月十一日開業したが、昭和七年三月閉店した。

### 郵便局

明治五年七月一日大畑郵便取扱所を設置された、主任菊池小吉氏であつた。同九年一月一日新に樋口金藏氏主任となつた。同十三年一月十六日横順藏氏大畑郵便局長となつた、同十七年五月七日横謙造氏局長となり、同廿七年十月廿四日横末治氏新に局長となつた。同氏は在職四十年に及び従六位に叙せられて勳六等を授けられた。昭和九年九月六日勇退して、後任は養子の武雄氏同日付にて任命された。



大畑前郵便局長 横末治氏

### 營林署

大畑營林署は明治廿三年五月の開廳である、當時は大畑小林區署と稱した。最初新町に家屋を借

りて廳舎に充て、るたが、一兩度火災に遭遇したので、書類を焼失し歴代署長の更迭年月等一切不明である。後に中島に移り、大正十三年字筒坂下に現在の廳舎を新築して移つた。署長小野田吉平氏は昭和四年五月著任した。

### 水産分場

青森縣水産試驗場大畑分場は、下北半島一圓の水産業の改良發達に資し、併せて漁家の子弟教養の目的にて、大正三年七月廿三日開場した。敷地七百四十六坪及建物は、下北郡有志者よりの寄附である。設立當初は試験部及傳習部を置いたが、大正七年三戸郡湊に水産傳習部を設置せるにより、傳習部を廢して、爾來試験部のみを存置し今日に至つた。

歴代所長 八木三千彦、横山將來、本田鹿人、合原一、山路政一、中西治吉郎、飯村實

### 部長派出所

大畑巡查部長派出所は、大正十三年七月十三日落成して、同月十五日より開所した。初代部長は



藤本清太郎氏にして、現在の西澤文之助部長は十代目である。

歴代部長 自大正十三年七月十五日 藤本清太郎。自大正十四年四月十日 船水清雄。自大正十四年六月十日 日姓名勝太郎。自昭和二年二月二日 阿部重藏。自昭和二年八月廿六日 野呂武四郎。自昭和三年十月五日 日福井喜代衛。自昭和五年六月二日 齋藤慶吉。自昭和五年七月一日 小山内秀四郎。自昭和七年一月廿五日 中島谷種五郎。自昭和七年十一月七日。至現在 西澤文之助

因に明治十年頃は大畑警察分署と稱した、建物は現在の大畑町役場廳舎であつた。巡查部長一名 巡查一名勤務してあつた。

## 神 社

郷社八幡宮 大畑開闢の地なる深山に祀りありしが、民戸南町に移り開け本町も建續きて繁昌するに至り、慶安元年現社地（南町）に奉遷した。祠官宮浦氏は大行院と稱し、慶長年間より今に連綿として奉仕して居る。祭禮は從來陰曆八月十五日なりしを、太陽曆にて九月十五日と改めた。享保三年に至り本町より八幡山を操出し、五年には南町より山神台を牽出し、六年には東町より鞍馬僧正を操出し、次で湊よりも明神丸を曳出した。新町は押大名の儀仗行列を出したが、寛保元年の火事にて儀仗の装束一切を焼失したので、同三年より放生會の野台飾を出すに至つた。延享三年

南町は山神台を廢して神輿を昇ぐ事になつた、寶曆四年に四神の幡を江戸から下した。安永三年の祭禮に練子花車と稱へて、町々の有力三、四軒宛一組となり、二、三人にて曳ける美々しい飾物を曳出した。年々趣向を凝らして莊觀を極めたが、天明三年の大凶に遭ふて、此盛んなる練子花車は絶えた。明和八年三月十七日社殿類焼して、安永五年に再建した。本殿及び豊岩窓、櫛岩窓の兩像銅燈、華表は江戸伊藤久右衛門の寄進である。

什物に後醍醐天皇の御宸翰と傳ふる、小色紙の軸物がある。紀州熊野尾鷲の産南忠右衛門大畑に住みたるが、文化四年その末孫常吉よりの寄進である。南氏は尾鷲屋と稱し、後に菊池姓を名乗つた。北海道の檜山は同氏の開拓にして、大畑の檜を移植したるにより地名を爲すと云ふ。

村社春日神社 湊に鎮座する、慶安二年の勸請にして指定村社である。文化六年唐銅造の華表を建て、此年神輿を江戸より下した、誠に美々しい莊嚴な拵であつた。春日神社の祭禮には、代官所より役人一統參籠して祭事を執行し、玉垣に添ふて關根村より牛瀧村に至る、村々よりの燈籠が吊され、賑なるこゝ八幡の祭禮に譲らなかつた。同社の神輿は後に藩公御覽になるとて盛岡に上げせたが、其儘御下渡しなく後年舊城下の三戸へ賜つたと云ふ。

村社光主神社 正津川に鎮座する、天和三年九月正一位釜臥山大明神を勸請した、指定村社である。祭禮は七月十五日にして神輿の渡御がある。



**無格社深山神社** 大畑開闢の地深山に鎮座する。御神体の臺坐裏に延暦三年甲子の文字がある、或は勸請の年月ならんかとも云ふ。元和二辰年再建の棟札がある、郷社八幡宮の奥ノ院として祀る。社地の近くに椽の巨木が二本ある、樹齡凡そ五百年と推定される大畑の名木である。外に村社として祭祀する次の八社がある。

- |             |        |             |        |
|-------------|--------|-------------|--------|
| 稻荷神社 (孫次郎間) | 文化八年創立 | 鹽釜神社 (釣屋濱)  | 安永八年再建 |
| 西宮神社 (二枚橋)  | 安永三年再建 | 玉垂神社 (木野部)  | 延寶二年創立 |
| 八幡宮 (赤川)    | 天正二年創立 | 大山祇神社 (高橋川) | 天明二年創立 |
| 大山祇神社 (小目名) | 貞享元年創立 | 妙見神社 (關根橋)  | 天和三年創立 |

### 寺院

**圓祥山大安寺** 圓祥山麓に在り曹洞宗である。寛文三年一東異寅の開山である。之より前本町に古道場があつた、慶長十九年道心禪達住してより禪達庵と云つた、庵主は大畑の産坪氏にして學者であつた。寛永十一年卒去して、無住となりて廢れるたるを、一東異寅來り住して寺格を得たのである。異寅は藩主重信公に幼時學問朋輩であつた、重信公に請ふて圓祥山の地を申請け、寛文

より延寶にかけて樹木を植立て、天和三年伽藍を建立した。寶曆四年正月七日炎上して寛政五年再建。梵鐘は寶曆十二年寺坂下の平場にて鑄たるも、響きが悪いとて明和六年江戸にて鑄造したが、銘は寶曆の儘に刻んだ。山門の石段は安永九年に着手して翌年に竣工。文化五年蝦夷地警衛の造船材に杉を賣り、數百金を得て方丈、客殿、鐘樓等を建立した。龍の欄間は文化八年江戸より持來るに云ふ。

山門の左右に二本の老杉が、天を摩して聳立つて居る。曾て此杉を賣買することになり、買人が來て見ると、遽に杉が枯れ朽ちて居つて、遂に賣買破談になつたが、後に改めると不思議にも何時もの通りであつたに云ふ。又或る時、寺にて授戒を行ふたが、確に人數分揃へた御札が一枚不足になつた。然るに不足した御札は、山門の此老杉の梢高く懸つてゐた、杉の樹が見なれぬ婆さんの姿をして、授戒を受けて戻つたに後の人々は噂した。

大安寺谷地は柳の木が澤山に生茂つてゐた、例のお鳥子踊に「田名部お鳥子の音頭取る聲は、大



大安寺開基坪禪達書



安寺柳の蟬の聲」と云ふのは、當時の状況を歌ふて居る。

### 義光山寶國寺

本町に在り浄土宗である。田名部常念寺良翁龍山の法弟良自慶正、寛永七年七月の開山である。舊蟻光山と書きたるが、貞享の頃より義光と虫を省くやうになつた。元禄七年三月廿五日類焼、同年六日朔日大工初めをなし、九月廿五日竣工して入佛供養を行つた弘法大師作と傳ふる地藏尊がある、脊に慶長二十乙卯年四月五日再色、妙範と書かれてある、寔に古色ある佛像である。梵鐘は江戸深川之住、田



◇像木尊藏地の寺國寶◇

中七右衛門尉、藤原政春の鑄にして銘に「洪鐘震響覺群生、聲徧十方無量土」正徳四年とある。

什物に文化六年釣屋濱の橋本佐平治より寄進の觀經漫陀羅がある。又、明治十三年大本山増上寺法主より下された、葵紋章付の湯呑茶碗一ヶがある。

先般中其地巡教中は永々厄介嘸かし疲勞察入候、陳者遺失せし御茶碗申請の儀御披露申せし處、

申越之通り下賜候、似右御品は徳川愼徳院殿（十二代家慶公）御持用にて、即今天璋院様（十三代家定公奥方）へ御遺物相成候御品を、昨明治十二年天璋院様より、當太法主へ賜りたる御品之儀に付、廢末に被致ざる様仰せ聞られ候、此旨御承知永く其寺の重寶とすへき様申達し候也

明治十三年十月十六日

増上寺執事

之は大本山法主福田行誠上人、大畑巡教の砌り同寺へ置忘れしを、寺寶に申受けたものである。同寺の庭に樹齡數百年を経たる高野槿と、おんこの大木がある。又、寛永年間の古碑が一基ある。末庵は湊に延壽庵（延寶八年五月宗頼開基）、正津川に優婆堂（天和三年七月再興）がある。

### 一峰山正教寺

本町に在り眞宗である。延寶七年正月、田名部徳支寺二世專受の開基。明和八年三月十七日南町火事に類焼して、安永八年再建した、棟梁は盛岡の治平。欄間は寛政に京都より持來れるが、構圖は同寺七世義山の手に成つたものだ。義山和尚は書に堪能であつた、細工物も女人の域を凌いだ。欄間の構圖を見て、注文を受けた京都の彫刻師が驚いたと云ふ。石垣は寛政四年長卅四間四尺、高四尺を築いて、享和三年更に四尺を重ね築いた。梵鐘は延享三年江戸深川田中七右衛門尉、藤原知義の鑄造である。

### 月想山心光寺

南町に在り浄土宗である。正保四年四月盛岡大泉寺五世眞入の草創である。



同寺七世の僧薫堂は享保十六年隱居したが、延命地藏の建立を志して、數年の間勸化をなし。元文三年江戸神田西村和泉守、藤原政時に托して地藏の尊像を鑄させ、戻りの途に六月六日横濱村にて馬より落ちて寂した。薫堂勸化の地藏尊は山門を入つて右に据えてある、唐銅造の大きな立派な作で、地方には稀に見る處である。山門の石橋は安永六年に江戸石町の石工鈴木勇助と、信濃の與市との兩人して拵いた。山門は文化元年に再建、大工吉田平治郎、梵鐘は享和十年、盛岡住藤原貞愛、半田重兵衛の鑄造である。

**究竟山本門寺** 東町に在り日蓮宗である。舊本門山法華寺と云ふた、元祿十三年七月序柏院日柔を開山する。之より前寛文の頃に、高橋川に庵として存在したと云ふ。明和七年本堂及庫裡を再建した、棟梁は關根の萬助。天明五年七世日省餓死者供養と開山の百年忌を營むために、大乗



◇鑄守泉和村西 尊藏地の寺光心◇

妙一石一字の碑建立を發願し、八世日慎代に及びて成就した。此碑は寛政十年七月十五日乘頃に建立したが、先年山門の右側に移した。梵鐘は正徳四年二月、江戸深川之住田中七右衛門尉、藤原政春の鑄造である。





### 風土年表より

村林源助翁の遺せる「原始漫筆風土年表」五十巻から、大畑に關係ある重なる事項は本文中に採録したが尙ほ断片的ながら大畑に因むもの、若くは直接大畑に係はりなくも、下北として樞要な事柄や、趣味ありと認められる事項を茲に書抜いた。編輯の都合で原本ミ行文を異にした處もある。

#### 松前に渡せるもの

馬

寛政十二年 長嶋新左衛門三歳牡馬三十四を五戸七戸にて買需め、七曲の雪堀除き庭を繰布せて大間へ渡せり。文化二年 萱部ミ江友に牧野を始めて牝馬三十四を渡せり。文化三年 久奈尻へ馬二匹渡す。同四年 江泥府へも馬四匹を渡さんとして風待す。

鶉と雉子

寛政十二年 鶉百羽を渡せり。文化四年 雉子雌雄二番を箱館へ渡せり。明和三年にも雌雄松前へ渡せしが落失せしにか、此島には猿、猪、狼も見へすと也。文化八年 雉子五番砂間荷へ渡せり。

苗木

寛政十二年 檜の苗木三千本、檜の實三升及埃付の松苗木五、七寸なるを三百本渡せり。文化二年 檜、杉、松の苗木數萬本を箱館に渡せり。

木砲

天明六年 松木長八尺の五尺圍るを十本一兩にて松前へ渡せしが、大筒に用ゐるとぞ文化四年 大筒に用ゐるにて松木短一尺五寸長七尺五寸三十本、同長六尺三十本箱館へ渡せり。此年圓祥山の木數を點檢し松木三尺圍以上七百六十七本、杉木八百十本の中へ松五尺以上十七本十七兩一步、大筒用にとて箱館へ渡せり。杉は五尺三寸へ八尺七寸迄を廿五本百五兩にて當湊にて造船たり。

造船材

蜆貝

寛政十二年 生蜆二斗渡せり。

鹽釜

文化四年 南部家にて屯田の術に倣ひ江泥府へ鹽釜を渡せしも、此の島の海水鹽氣も薄く殊に薪も多くはあらずと也。

水車工

寛政十二年 水車工を砂間荷へ渡せり。

兵具

文化元年 一貫七百目玉へ三百目玉迄、大筒八挺大坂へ戸田又太夫乗船。兵具長持十餘挺江戸へ長嶋新左衛門佐井乗船箱館へ渡せり。

寢具

文化四年 寢具五十五梱江戸海へ宮古浦迄廻せしが、好風を得ずして當處へ著し、再び船積内藤關藏當湊へ七月十五日出帆たり。



羊魯澤笹者編



木材關係のもの

筏の巧者

元祿二年 秋田の越前屋久右衛門とて筏の巧者來る。之に倣ふて杉本助十郎、檜の鹿採橋筏に組み西灘へ廻せり。此頃江戸栖原の山受負支配を新川八兵衛勤めたり。

種檜木

寶曆三年 仁部川、長治郎川、彌一郎川、葉色山、下狹川、三右衛門澤、赤川山の七ヶ山へ檜七、八本宛種木に虞り伐らじ殘せり。

山吏處尉

寶曆四年 生木寸甫山中護せしにより、此事に關はりし人々知行十分一を削らる。

木挽百人

寶曆九年 蒲野澤松板徐々ニ鬻出せしが、鹿橋、石持三村の挽工此頃百人に至る

大工作料

寶曆十年 屋大工、木挽の作料は七日一步たりしを、金貴くなりて九日一步と直せしか。船大工は冬細工乏しとて舊の如く五日一步、木挽細工は七日とす。

御山役所

寶曆十年 田名部館下令局(代官所)の古跡へ山鎮台局を儲けたり。然るに寛政十一年に此局も館坂の上に移せり。

松植立

寶曆十一年 葛山及出戸平へ松植立つる。

袖宿取締

寶曆十一年 木場材木卷立の袖組、木場小屋ならで町家に宿るを制して火災を厭ふ。

山吏馬上

安永元年 山鎮台寶曆の山法より馬上たらざりしが、此頃よりして馬上たらしむ。

栖原支配

安永三年 檜山數ヶ山江戸栖原角兵衛受負の支配人同彦兵衛十四五年寓居。明和中に

並木植立

山受有りし當所の人々へ、同家取組支配は池田兵吉七、八ヶ年也。

野火制禁

文化四年 街道並木、類を定めずとも一棟にて二本宛植立べきの法令あり。偕並木を按ずるに街道の正きを休し、防禦の逆茂木を用とし、陣具或は凶年等の虞をや兼ねむ

並木植ゆ

文化五年 野火制禁たらしむ。

山吏

文化八年 二月廿五日正津川原に並木植立たるも翌年大方生えず。

加賀取組

文化八年 山吏山本佐兵衛帶刀に復し海邊總山の關司。

木材下値

文化十一年 加賀へ取組材木五萬五千石。

板子眞木

文化十三年 鱧、鯡、糟鱈、鯨子價賤き事古に復し、箱館松前証八十五束、丈五角三十本、大平、佐井丈五角六十本より八十本、百本、寸甫三四五十挺、秋更けて當灘鰯六七百釜兩に七八俵迄も下る、材木は江戸運賃十一兩。

鱧と鯡

元祿十二年 大間浦にて鱧と鯡多く上りて遠國へも鬻き漁家潤へり。

ト

享保三年 正津川にて海馬漁始まりけるが、寛政に至りて廢れたり。

蛇浦勢ふ

寛保元年 蛇浦にハリタメを用る漁業勢ふ。

漁撈關係のもの



昆布役

寛保二年 昆布類一把一錢役。

鯛鱈役

寛保三年 鯛鱈槽一俵砂金三厘三毛、魚油一挺砂金一分五厘、水鱈一尾砂金一毛の役立受負になり。古來の五十八貫役は止しかき、水鱈の元役廿六兩二步七分八厘八毛、前段收納は猶し、材木に抽役有て間尺役立有が如し。

鮭川

寶曆元年 鮭川を併し川役六貫文九ヶ年に至れば新設文勘定局を賜ふ。

漂り魚

寶曆五年 十二月大時化にて浪荒く繁く湊濱町崩れ、漂上は鯛ばかり千本、海栗、海鼠、老海鼠など也。文化十三年にも二月廿一日、廿三日荒浪にて漂り肴、蛸、海栗、海鼠、ホヤ、蟹等也。

雙鬚鮫

明和三年 木野部にて八尺量の雙鬚鮫を獲。文化元年釣屋濱、四年川代にても獲たり

人魚

明和三年 長三間幅四寸程にて金鱗の魚、臨野澤にて車權を遮り上れるは、西海にて稀に見る奇鮫と唱ふ魚なるべし。後の日船の船先に半上りし人魚を見たり。

赤魚

明和四年 川代より下風呂灘に赤魚多く上れり。此の魚は紫古粗島に群産と云へれば其潮筋の通じけるにや。宮古浦にて毎年多く漁れり。

大龜

安永四年 正津川にて四尺餘の龜漂上る。

外濱昆布

天明元年 外濱昆布、棒結、棹前の受負熊谷又兵衛喜田川莊吉、菊池新右衛門を變

舟越曳船

り、翌年は莊吉と新右衛門翻翻として變りしが、菊池與左衛門へ移り千兩餘に聞えしが寛政八年よりぞ布海苔も併て百兩にて間尺入札へ合したり。其頃の昆布船は下風呂を安渡邊迄數十ヶ村を濱下り、内海よりは船越を名付け陸曳、總て四百廿五艘の五千石と迄に點檢たるも、東蝦夷地開けしかば御用地の利用を考へ、人々多く彼の地へ渡行しゆゑ文化の今は七、八ヶ村と減じ五百兩位に成行けり。

鱈役

天明元年 臨野澤水鱈役二十六兩位にて有しが、五、六十兩の請負となり。其後百五六十兩に及びしも、文化に至りて東蝦夷より江戸直く廻の鱈多くして、百兩位に成行けり。

烏澤

天明元年 鴉澤の里は樵稼を專とせるが、此頃を蝦夷地行或は地方の漁人と變ぜり。

長崎俵物

天明四年 長崎俵物十人組の受負止しにより、御普請役なる青島俊藏通行有しか、田名部に於て煎海鼠八千五百斤、白干鮑三萬斤例年出産たらしめんこの法令有て以來は、長崎地役なる苗字帶刀の兩人、松前及び此邊宮古迄も來往す。然るに海住る物も年を追つ、漁盡くして斯く迄減じ來れるにや、或は價の賤きによれるにや、以前には白干鮑六萬斤、煎海鼠は萬斤に及びしと聞ゆ。

コッコ鰯

天明五年 コッコ鰯と云ふが夥く漂上る。蝦夷方言にて佳加茂古留倍と唱ふ。



漂リ昆布 天明五年 八月六日風雨大浪、湊濱漂昆布多かりしかば、外濱析に結立しを棒昆布局  
 の制しけれど、棒結、外濱析何れも役局にして私ならねば容させず。  
 大烏賊 寛政三年 下風呂にて九尺量の烏賊一尾漂上る。  
 浅網二文 寛政三年 安渡の浅網貝來て一升二文。  
 間尺荷役 寛政十年 自他船々間尺入荷役共に五分引にて有しを、當年の地船は一割の減役な  
 り、分限船役は舊の如し。  
 二枚橋 寛政九年 二枚橋の里は或は袖働る混りしが、此頃の漁働のみの業に變れり。  
 鮪多し 寛政十一年 三月大畑に赤魚群來し、大間に鮪群來せり。五月鮪多くして百文に一貫  
 目、此年河口の大石にて鮪七釜を獲たり、之は魚に追はれしや汐に糶られしにや。  
 鮪鱈に入 寛政十二年 下風呂にて配繩を手繰しに、磯の内より鮪が針に釣られて上れり。  
 始四文 文化元年 安渡にて始多く大畑に持來りて一升四文。  
 いしなぎ 文化元年 いしなぎ又はをよと云へる大魚の子、一尺程なるを木野部にて獲たりしが  
 翌年には六尺量なるを拾ひしに、其の腹子芥子の如く微少にして、皆々育てるものなら  
 ば、蒼海も塞ぐべく思はる。此魚佐井の海に多く有て其腹には毒ありとぞ。

油 鮫 文化四年 十月入口濱にて油鮫百箱を鮪網にて獲たり。

鮪と鮪 文化五年 秋田の鮪は當冬將來。江州の源五郎鮪は安永に來る。

鮪 文化八年 正津川鮪網に或は鮪三、四尾も混る事も數年の間は稀に有しが、當霜月上  
 旬鮪五尾に三尺量の鮪一尾入る。入口にては雙鬚鮫を獲たり。

五月鮪 文化九年 五月鮪は實曆の寛政にも上りしが、當年五月鮪豊漁。

鮪 文化九年 八月十九日秋分鮪多く川へ入しを、新町裏通り二百三百宛を拾ひ獲たり。

昆布受負 文化九年 昆布、布海苔當九月の丑年迄、二千四百兩にて山本理左衛門受負。

鮪 文化九年 錫一捆三匁役立にて巳年迄十ヶ年受負、然るに其先運上五十兩村々割符六  
 捆湊、八捆二枚橋、釣屋濱、七十捆木野部、四十五捆赤川、九十捆下風呂、九捆易國間  
 十七捆蛇浦。

丸木漁舟 文化十年 三月朔日箱館の丸木漁船釣屋濱へ漂著。去冬は尻矢と下風呂へ三人宛。

煎子白干 文化十年 煎海鼠二千斤、白干鮑二萬斤の内赤川、木野部、釣屋濱にて白干百斤出來

百廿文、百十五斤出來百卅五文、百卅斤百五十文、百五十斤百六十文、二百斤百八十文

鮪二十籠 文化十年 七月十七日大間に鮪二十籠。

鱈舟漂著 文化十年 箱館の鱈釣舟二艘尻勞へ當冬も漂著。

玉光鮫 文化十二年 二月十五日玉光鮫木野部へ乘頃迄二十餘も漂上る。



餅四百石 文化十二年 四月岩谷、蛇浦、大間、奥戸鯨二百石目餘り。安渡川内迄二百石餘漁す。

鯨 文化十二年 霜月十八日鯨七、八本。天明元年にも文化四年にも二本、三本。

鯨卅三頭 文政元年 八戸の濱へ鯨三十三頭漂流。

湊と浦 文政元年 大畑、大間、奥戸、佐井、牛瀧、川内、安渡を湊と稱し。易國間と大平は

浦と變れり。

田畑關係のもの

桃の實 寶曆五年 下總の銚子核紅き桃の實持來りしにより植ゆ。

マルメロ 寶曆十一年 温梓柿の樹を植初む。

粟と黍 明和三年 粟と黍を蒔初む。

蝦夷稗 明和八年 何時の頃か異國間足高、脇野澤發比羅云へる蝦夷人の末孫にとて、蝦夷稗と唱へ家々量出し來りしを當年に止む。

梨接木 安永五年 青高麗とて瓶子形の梨久しく以前能登より佐井に移植せるを、當年大畑に

ても接木。

常樂寺稗 天明三年 常樂寺祈禱稗は梨や李の落し際、稗、蕎麥の實取の場にて五升量にて吠に

佛 米 量入れるを一升と呼ぶ例にて、一升と云へる令也しかど五升の量にて寛永今に量れり  
天明三年 五年以前常念寺にて常念佛せん料に備へるとて、七合五勺入廻向袋を  
家々へ年々配りしが、當年に至りて止む。

榎の實 天明三年 寶國寺の榎の實例年は五七粒宛なるも、當年數千粒實熟れり。山原の榎の

實例には見る事もあるに、當年は實熟れることの甚だ多し。(此年凶稔也)

茸 寛政九年 關根橋縫道茸觸賣は天明の頃より來りしが、此頃濕地茸をも賣來る。

團ひ稗 享和元年 團稗一人二合五勺宛毎年たるべしとの法令也。

類草 享和三年 烟草は或は植ゑ或は止しが、當年五三軒植試めり。

藍草 文化三年 藍草は素より蒔もせざりしが當年試めり。

薩摩芋 文化三年 十輪庵(大畑)にて薩摩芋を植え繁茂せるが、ドクダミの葉に似たり。此

庵主は因幡來れる六部なるが、梢を傳ふる事鼯鼠の如く巧み也。

椰子の實 文化七年 赤川へ無傷の椰子の實一果漂上る。

昆虫除札 文化十年 昆虫除の守札を官所賜りしを川目、上野、川向へ一札宛建てたり。

巳六豐年 文化十二年 元三迄に巳の日あれば雪女早く歸りて其秋穀類遍滿、六日七日に及べば

雪女長く居りて穀類乏しみの諺あり。當年は八日の巳なりて擧めりしが、然るに當年



雪女と榛 六月三日巳の日たりせば、六月の巳の日三度有て巳六の豊年と觸達也。又小目名の俚言に榛多く實熟れば秋荒りと云へり。

甲子の雨 文化十三年 六月十六日甲子に雨降らざりしかば暑氣強し。春雨の甲子は早の兆、夏の甲子は洪、秋雨の甲子は霖、冬雨の甲子は寒嚴しくして牛羊凍死す。

河川及水溜池

大利骨沼 寛保二年 原平兵衛關司にして大利骨沼の水道成れり。

早掛堤 寶曆十一年 田名部早帷に川井九藏關司にして堤を築き、水門に底樋を埋めり。

新川 明和二年 造坂と湯坂川岸に百間餘りと、木場州先五十間とに新川堀通せしが、年を経ずして崩れ塞り、造坂下に方りはりかへくち戻河のみ少しく残れり。

兔澤堤 明和四年 兔澤に長さ十間に堤の根九尺、上巾四尺、高八尺を築き底樋に鎖を備へ雪解頃水湛々たりしに、安永を経ずして崩れたるは、高に應ぜず巾の狭きより底樋際を穿破りて崩れたるなり。

橋架替 明和七年 此前後に正津川橋、田名部橋、それより寛政に至り赤坂橋等、何れも廿四五年或は三十年に架替、海邊總郷に割れり。

川筋切替 安永元年 外十兵衛山の川筋を川内の十兵衛山へ堀落したりしを、山吏山本佐兵衛、

水溜 佐賀其兵衛、芦田徳兵衛之を制して舊の如し。

新川 安永四年 火防の水溜本町は制札後ろに、東町は庚申前に、新町は門前東側、南町は八幡の漢に、湊は延壽庵前に造る。

安永七年 釜野澤、晝飯場兩山の末木を頂き、此入札金にて品ノ木の川闕幅四間、長廿一間、深さ五尺新川に堀替。池野尻の闕を片湧三百間に築立、鐵山立林と兔澤山の松樹を伐出して用に充てたり。

田名部川 寛政六年 合船百石一兩二歩の役立、七ヶ年受負の利潤にて、田名部川石墻築立つ。

赤川路修 文化元年 四月大赤川々境瀧迄を、赤川と下風呂兩村入混りての道繕ひ、關司堺門藏

大石打碎 文化五年 洪水川繫に慮り切らず残せる大石とも考へず、水勢を直くせんと辯を巧みに、郷保里正の新なるに乗じて、當年の何時しか半を割れり。

田名部川 文化十年 田名部川は橋先より、屈曲多きを厭ひ眞直まことに切通せり。

道普請錢 文化十年 關根街道普請料として、驛錢よき安永の例に倣ふて三ヶ年中四文は八文となる

津浪又は洪水被害

田名部 寶曆五年 七月二十日田名部洪水。

各地出水 天明六年 九月七日地方一帯の大洪水。新町々役所前へ舟にて通じ、新町番屋流失、



大石に繋ける七、八十石船古道川に押上げられ。小目名にて畠の中へ方四五尺の巨石を  
押上げらる、材木、薪などの押流されしもの釣屋濱へ正津川迄の海岸に漂寄りて、至る  
處へ漂木の山を築く。

大風雨

寛政六年 秋大風にて奥内中野澤吹荒され、義倉稗三斛貸渡す。寛政八年九月高水。

佐井津浪

文化三年 十月廿八日佐井の海溢れて、市中浪音トドロくたり。

大間津浪

文化四年 十月十四日大間の海溢れり。寛政十二年のものよりも強し。

田名部川

文化四年 八月五日と八日迄田名部川水溢る。

奥戸大浪

文化五年 十二月十二日雪混の大風にて奥戸、佐井夜更に浪荒々しくも市中へ打込み  
繋船、圍船も破れしが。松前及箱館にても被害多し。

大雨連日

文化六年 七月七日洪水。九月十一日東風高水。翌十二日北風に變り洪水、十三日大  
雨滂沱として盆を傾ける如し、大雷轟き十四日迄に及ぶ。同月廿五日又大雨咫尺を辨  
ぜず。

田名部

文化七年 八月廿八日と晦日迄雨り、九月朔日宵電雷、二日三日も雨にて田名部洪水  
市中舟に及ばんす。

浪

文化八年 霜月十七日湊濱へ乘頃迄浪闕。

浪

文化八年 霜月十七日湊濱へ乘頃迄浪闕。

穀雨

文化九年 三月十四日穀雨の洪水、石倉埋浮留を放ち材木、春木濱に漂ひ、翌朝には  
五穀雨々々と誼し。

大間洪水

文化十一年 六月十七日大間洪水。赤川烏賊間へ大魚入たり。

安渡風波

文化十一年 七月十七日安渡風波にて二軒潰れ二艘破船。奥内、中野澤田畠荒さる。

奥戸洪水

文化十三年 閏八月四日風雨にて洪水、奥戸溺死三人。

火災

大畑新町

享保十六年 新町火を出し、此が寶國寺門前小路東の半家を潰して後來の火防さす。

新町全焼

寛保元年 四月朔日大畑新町總て焼失。

南町本町

延享元年 南町、本町、大安寺道片側火たり。

田名部

延享三年 田名部火たり。

大安炎上

寶曆四年 正月七日宵に天和三年造立の大安寺炎上、開基の正面は先年異國間の末庵  
へ譲り、二代の正面及び禪堂正面十六羅漢共に灰燼に歸し。經藏、鐘樓、山門のみ残れ  
り。

出戸山

寶曆五年 出戸山へ火發り宇曾利山危しと當處も人夫を驅促す。

湊七軒火

寶曆八年 湊七軒火たり、以來消炭を停止。



下新町 明和元年 正月六日下新町火。  
 烏澤 明和三年 烏澤火たり。  
 南町本町 明和八年 三月十七日黄昏に南町火發て八幡宮、正教寺、本町、横町焼失、燒死一。  
 正津川 安永三年 正津川火。翌四年南町又も火。  
 赤川 寛政元年 赤川の里火しにより精粟十五叭、錢三十貫を助く。  
 異國間 寛政八年 磯開きに大風吹來り、異國間の里火して、義倉稗三斛四斗一升貸渡す。  
 角達 寛政十二年 角達火しに、義倉稗一斛五斗貸遣はず。  
 川内 享和二年 川内火。文化二年十月脇野澤火たり。  
 湊の大火 文化五年 四月二日巳午二刻に湊四十八軒焼失。霜月廿八日川内二軒火。  
 正津川 文化六年 正月七日夜八つ時出火、八日曉迄燒け、三十七軒焼失。晝飯場山の末木四百石を賜る。  
 下新町 文化六年 十二月廿八日下新町上林長屋二軒火たり。明和には碓煉萬右衛門脊戸。寛政十一年に鍛冶與兵衛、全十二年鍛冶市右衛門脊戸。享和に本町傳右衛門脊戸大工小屋火。  
 岩屋奥戸 文化八年 五年以前に岩谷火しか、閏二月七日再び火。閏二月廿七日奥戸火。三月廿

源藤城 日脇野澤の源藤城火。  
 正津川 文化十年 三月廿二日正津川七軒火。霜月晦日大利火。  
 斐部 文化十年 岩谷の枝村なる斐部は野牛へ屬せしが二軒火。  
 鹿橋白糠 文化十一年 七月廿八日鹿橋三軒火。霜月白糠卅五軒火。同月十二日田名部横町火。  
 木野部 文化十二年 二月十七日宵木野部廿四軒火。九月四日尻勞四軒火。  
 宇曾利山 文政元年 四月廿日宇曾利山長屋火。

雜の部 第一

芝居興行 享保十三年 八幡社境内に稚童戲場始まる。  
 蝦夷漂着 寶曆元年 蝦夷二人天下森濱へ漂著し、水と糧を與へて歸す。  
 彌子入湯 寶曆元年 御連技彌子婦人下風呂へ御入湯にて通行あり。菊池與左衛門を亭さす。  
 究竟山 寶曆五年 本門山法華等を、究竟山本門寺と改めし住職は、山門の額を筆せし徳永流の書法にて、呆水と稱す。  
 他郷行女 寶曆六年 湊のサワ便船にて相馬へ行しが、戻り鬼柳の關所にて符翰を呈せしに、女の街券は制外也きて、地頭へ預けて逼塞たり。  
 三兒分燒 寶曆六年 東町シモ母三つ兒を産せしが、赤子にして皆死せり。文化十四年正月廿五



日江戸本所石島町川船頭の妻シケ三男子を産しが、三人扶持の上に二百金を賜ふ。

儉素 寶曆十年 役人の賄は一汁一菜と限り、上役たりとも歩行。此は往來繁く殊に近年阿諛に長じ奢侈に流れ、鴨鶴鷄卵鰻海鼠薯蕷の品大に貴かりしも、茲に至り半を省けり。

儒者藍田 明和三年 古學の足羽源翔藍田ニ號し田名部寓居。此儒大畑新町の産たりしが、幼孩にして田名部へ移り、父の本國越前へ伴はれ、成人して業を東都の南郭に受けたり。

平等庵 明和七年 正津川優婆堂の南に地藏平等庵を發起せるは、大安寺偶居の編後寛明、萬人講を積みて建てたり。

壯者點檢 安永元年 五尺五寸以上の壯年點檢、引越の里より來居りし岩藏見抜かる。天明元年にも五尺五寸以上の壯年點檢にて、關根より亂髮櫛右衛門と云ふ角無出づ。

福士轉居 安永二年 湊の開闢者福士大畑へ移れり。大畑は寛延のはじめに移り來る。

養蠶始む 安永四年 田中甚右衛門の婦、釜石産なりしが蠶を飼ふ。

卅三燈籠 安永六年 田名部明神へ田名部と大畑より大燈籠吊せしが、當年川内村も宿老檢斷と稱し、享和元年田名部大燈籠に代りて川内町と書せる大燈籠、大畑燈籠と雙排。

左京入湯 天明元年 御連枝左京の君、下風呂御入湯にて通行。

妻を讓る 天明元年 與兵衛ミ云へしが貧窮に耐へず、己が妻を他人へ嫁せしめ月を越せしが、

藥師堂の叢の中に緘れるたり。明和四年には虎松ミ云へる者、貧に迫り其妻を人に讓りて、其人の家に借宅せるもありし。世は様々の洒落也。

河口新禱 天明七年 莊内大山善法寺の僧來りて、港を深からしめんきて、船を漕出し海に浮びて祈禱せり。夫水脈の溢る、や群木繁茂に應じ増となん。

御願見使 天明八年 御願見使來り、小田野澤畫備の人數當所より出向く。

神輿渡來 寛政六年 大間、異國間、下風呂の神輿渡來せり。越後と聞へり。

狐を生む 享和元年 大和の里にて女と狐ミ一産たりしが、女子は文化に自若たり。

四つ兒 享和二年 横町治郎助の妻シノ四つ子を一産たりしが、男子一人閔々焉たり。

百十一翁 文化元年 二月廿七日奥瀬内藏太夫海岸通行にて入口へ當所詰合、廿八日正津川彌之丞百十一翁の掌形を献ぜり。然るに此彌之丞翌年百十二齡にて雲繼れにけり。

ロクロ首 文化五年 佐井の逗留中に轆轤首と聞へしは、常々飲酒度有て而も頭をば立具の際に返らせ寝る。烏隸の風待長きにや屈しけん、飲酒節せず襖にも楯せず臥たりしが、斯の響き類々たる故窺ひ覗くに、其首一尺三、四寸も伸びて長かりしと。文化十四年にも沼宮内人の轆轤首なるが、下風呂温泉へ入浴せり。

髪剪らる 文化七年 易國間のタツ、娘の髪を剪られしとて訴出づ。



繼見折盞  
問屋株

文化八年 下町の繼母、九歳の女子を熱めの水風呂へ浴させ、釜煎りの風聴あり。  
文化八年 佐井へ御用藏建上御褒美として、松谷傳四郎へ問屋株を賜ふ。天明には下  
風呂八谷與兵衛小宿株。享和には異國間廣谷孫治も問家となれり。

反レ矢

文化九年 的場の反れ矢、箭取の童の頭へ射込めり。

蝦夷渡來

文化九年 五月十九日ネモロとビロウの蝦夷五人は赤紋羽の陣羽織、五人の裨夷は抽  
多留倍著し、順應丸より陸上り列して市中を廻る。文化十二年五月廿四日、佐井へ大寶  
丸乗組にて悪消の蝦夷三助、彌七、彌八、忠兵衛の四人來る。

胞衣色々

文化十年 胞衣に蛸、鳥、牛、鱧等と形容によりて唱る、や、當年蟹胞も云ふべき  
岩谷の里にて産せり。又去年孕みしにや當春下總土浦領藤代村にて、八齡にて子を産め  
るが五人扶持を賜ふ。寶曆には松前に十一歳の春産めるもありし。

火消指南

文化十年 江戸より薦の者と云へるを三人申下し、火消指南を田名部、川内、大畑に  
令せられ、町々より二人宛を出し十日の間稽古。

佐井松谷

文化十年 佐井の松谷傳四郎、去冬割符褒賞にて苗字帶刀御免。

背合の子

文化十二年 牛瀧にて背合の兩頭四手四足を産したりしが、母子共に即日死せり。

雜の部 第二

硫黄山

享保十六年 大坂の榎本善兵衛小赤川にて硫黄を採掘せしが、礦脈弱ければにや樋の  
口に及はず、鷹眼、鶴眼等も見へずに年経らざるも止めにけり。

町と稱す

延享元年 宿老、檢斷を改り大畑町と市札を賜り、二日と定まりぬ。

落雷

寛延三年 田名部井口清兵衛宅へ雷隕ちたり。寶曆七年 大間の里にて耕耘の女雷に  
碎かる。文化八年 六月三日箱館松本店へ雷隕しが、水屋より抜けて人を損せず。

火柱

寶曆三年 三月初更中島に火柱立ちて橋前島道へ行けり。文化五年 四月初更赤  
坂道より火柱立ちしが中島谷地へ行けり。文化十四年 正月十二日古川北畝の火柱。  
近年夜半向井清兵衛二階より徐々と走下り、千葉惣右衛門座敷にも出たり。

座敷童子

寶曆三年 南町三吉家に座敷童出で。岡松吉兵衛が家の釜鳴ると妖言あり。

ガラン鳥

寶曆七年 金谷川岸より曳上り落ちたる鶴鶴は、兩翼にて三間量り有て、首際に水袋と  
云へる、大なる瘡やうのもの見へたり。

牛馬改メ

寶曆九年 牛馬改め既元に至る。

病狼徘徊

寶曆十一年 田名部市中を病狼狂ひ廻りて、嚙まれて二人惱死。

鹿肉霽ぐ

明和二年 諸獸は勿論鹿肉なども、獵人ならでは喰はぬ事にて有けるを、近き頃生  
養家にて瘦せたる人は食療に用ひしより、肥瘦に拘ざるも觸賣迄成弘るは。此許の醫



鹿渡り

術は名古屋立醫の流儀にて有しを、近年香川の醫方流行來れる故と知られし。天明五年牧狩にて鹿と兎を獲。文化二年 異國間にて當歳の牡なる鹿の子を獲たりしを官府へ献上。文化四年 榎山灘を渡れるや野牛海を來りしか、砂鐵山より見たりしに鹿渡と云へる一連なるべし。初の一匹は頭をあげ残るは幾匹ならむ七、八丈にも見へ、正津川沖を字賀杜沖に至りしに、森陰に障られて見へず游失にき。晩相に及しか、鴨豚の一連、鰯を車に廻すが如く群て一興なりし。

漆器

明和七年 能州輪島の松木平兵衛塗物を嚮來れり。

新湯

明和七年 此頃下風呂の新湯焼送りて、至つて湯かりし湯の暖になれり。

染看神

安永元年 紺屋向井喜四郎、東町の看神染出せしに、追年本町、新町も著す。

疫痢流行

安永三年 疫痢大に流行して天死する者多し。

大雲積む

安永三年 霜月の雪二尺量へ一夜にして一丈余に降り積む。

鐵山

安永五年 川内ミ戸澤の街道際に鐵山を始しが、年有らずして止にけり。然るに何時か有けん木野部の里端、銅屋の澤と云へるにも鐵山の後ぞ残れり。檜川の葉川と云ふにも五金が掘し跡も見ゆらし。天明元年 宇曾利山木立塚なる陀羅目岐澤の蕨根にきて、鐵槽と藥罐の蓋を壘出せしは、其槽の大き鐵吹にても在しと思はる。樵夫の便利に小屋

鐵精

近邊に鍛冶にても居しやらん、日影淵の許に鍛冶屋渡とてあれるも宜也。

尾花澤米

安永七年 出羽尾花澤城米周防の孫右衛門船積來り、大間灘にて沈めしを査して、御陣代より平塚良助出役。

麻疹流行

安永七年 麻疹流行により舛麻、葛根頓に貴し。享和三年 麻疹流行し葛蕪と鰯豆を禁ぜり。牛糞新汲水は往昔よりの觸達さぞ。

湧館

天明元年 湧館の峯際石原の中より、幅七寸に長尺二寸の樹盆にや硯やうの物探り得たり。外山谷地よりは三百石船の壘を壘出し、出戸川にて五、六百石積の掛頭を壘出せしと云へる奇也。

鷄卵貴し

天明元年 鷄卵十六文に貴し。

鉛山

天明五年 長後の鉛山田名部の丸山莊三郎受負しが、寛政末迄堀續けり。

古錢壘出

天明七年 脇野澤觀音堂地面平準せんとて、古錢一貫文程も壘出せしに、洪武の錢ぞ多し。文化十三年 新町七之丞背戸を穿ちて三十金を得たり。

ミヤマ鳥

寛政元年 斑鴉來しか文化二年にも見へ、其より毎年五月頃見へぬる。文化八年胸より首に白斑の鴉雌雄四、五十日も見へし。

宿老加判

寛政四年 家屋敷、田畑賣券は檢斷印證にて有しを、宿老印をも判す。



除牝馬

寛政五年 大間、奥戸の兩牝の劣牝を撰除せり。之は除牝馬ハネウマと稱し十四、五年宛を隔り行はれし。大間の牧は元文迄は或は駿馬を産せしが、矢立の水勢いかに成行しにや、寛保は余牧と異なるなし。

人馬

寛政六年 諸侯の通行万石に賃馬二十五匹、人夫四十五人。

菓子型

寛政六年 湊の幸助田名部にて菓子型を彫弘む。文化六年 菓子匠毛馬内の淺利與四兵衛、當所にて菓子型を彫弘む。

八月の雪

寛政十年 八月二十日雨に混りて雪を降らす。

小提灯

享和元年 初更頃に正教谷地より、古川畝傳に橋の脇より横町迄も、往返せる小吊灯の妖怪出づると云へる浮説三、四年たり。或は夜鳥か。

狗と狐

享和二年 寶國寺裏門前の汀にて、狗と狐の遊び戯れし事の二、三度も有しを、危かしく思過し中に狐は狗に噬殺さる。

拔荷制札

文化二年 拔荷制札二枚。

米船破船

文化四年 津輕城米江戸へ廻らん破船シロベ査として、家臣の佐井へ通行には天明のはじめ。享和には大間浦、當年も亦佐井へ通れる。文化九年 三月晦日米積破船査として、津輕家臣四月十二日通行、濡米を大間浦に吳渡せり。

石工

文化五年 石工佐賀仁三郎盛岡へ出しが、小頭となりて歸來る。

強震

文化五年 閏六月十六日辰時地震にて、本町の倉庫壁壊てり。

鶯色の鳥

文化五年 佐井には鶯色の鴉見へ、川内には白鴉、野牛には佳蹴の如に鳴ぬる鴉一番去年遠洋を渡來ると云へり。此類雌雄を知らんには右翼に左翼を掩へるは雌とぞ。

大蛞蝓

文化六年 宇曾利山街道井戸桁にて、三寸五分も圍るべき蛞蝓見へし。

孔雀

文化六年 寛政九年孔雀田名部迄來り。當年六月廿四日と廿八日迄當處見世物。

鷄鳥止む

文化六年 九月二日大安寺の鷄鷲に威されしが、其晝より邑中の衆鷄鳴を止めて、鳴かざる事廿八日迄に及べり。

夷物禁制

文化六年 九月朔日蝦夷産木皮衣カウシ著用は元より、細工物等も音物に用ゐる事を禁ぜり天明には蝦夷人の詞を假りに真似る事も禁ぜり。

易國間

文化六年 十二月廿七日異國間を易國間と書替の觸達出づ。

私大

文化七年 私大を當郷は十一日より直せしが、當十二日觸達には正月十九日を正月二十日と稱し直すべし。

市日

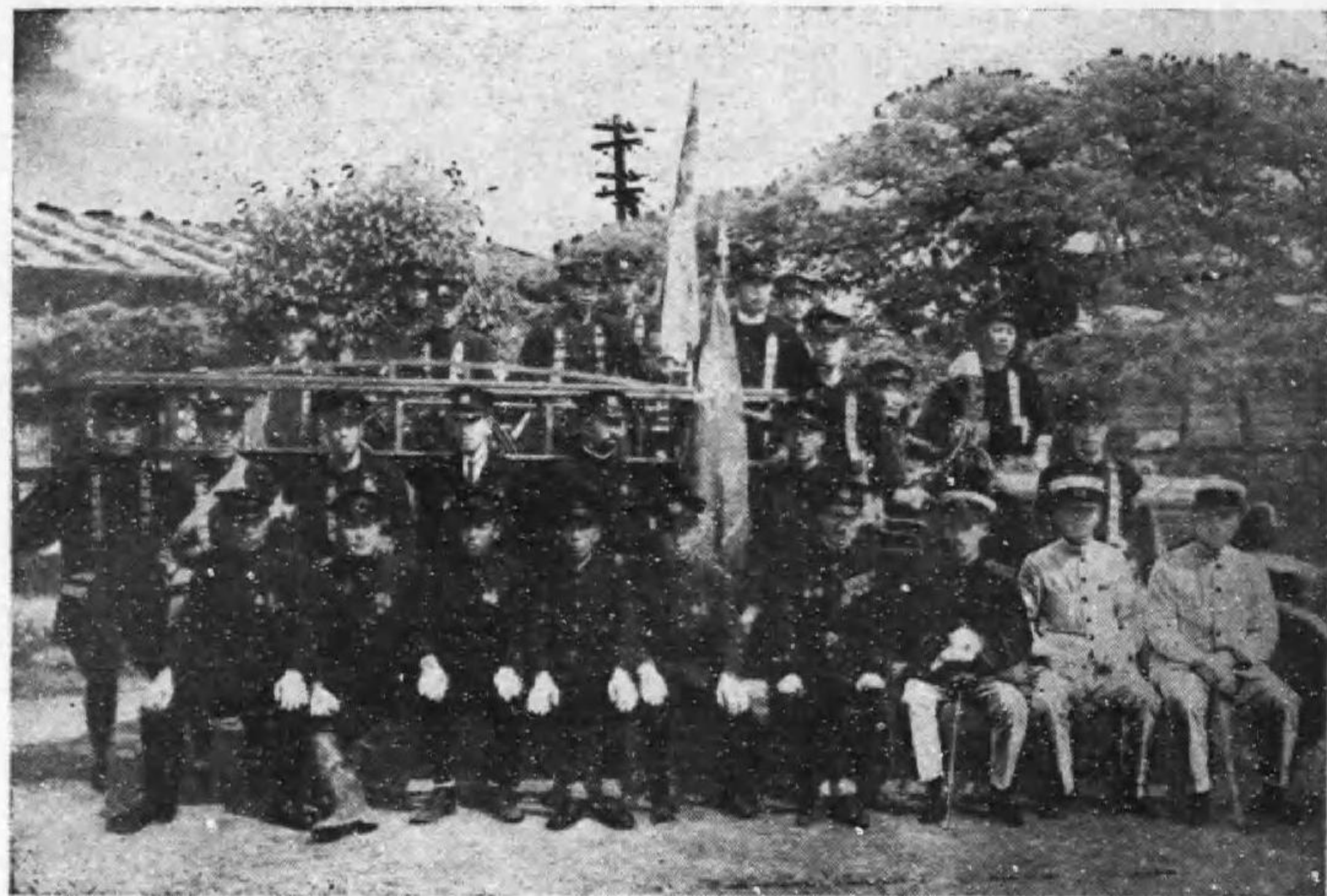
文化七年 五月八日東町に市を開く。

白雀

文化八年 奥戸に白雀見へたり。天明八年には目名にも獲たり。



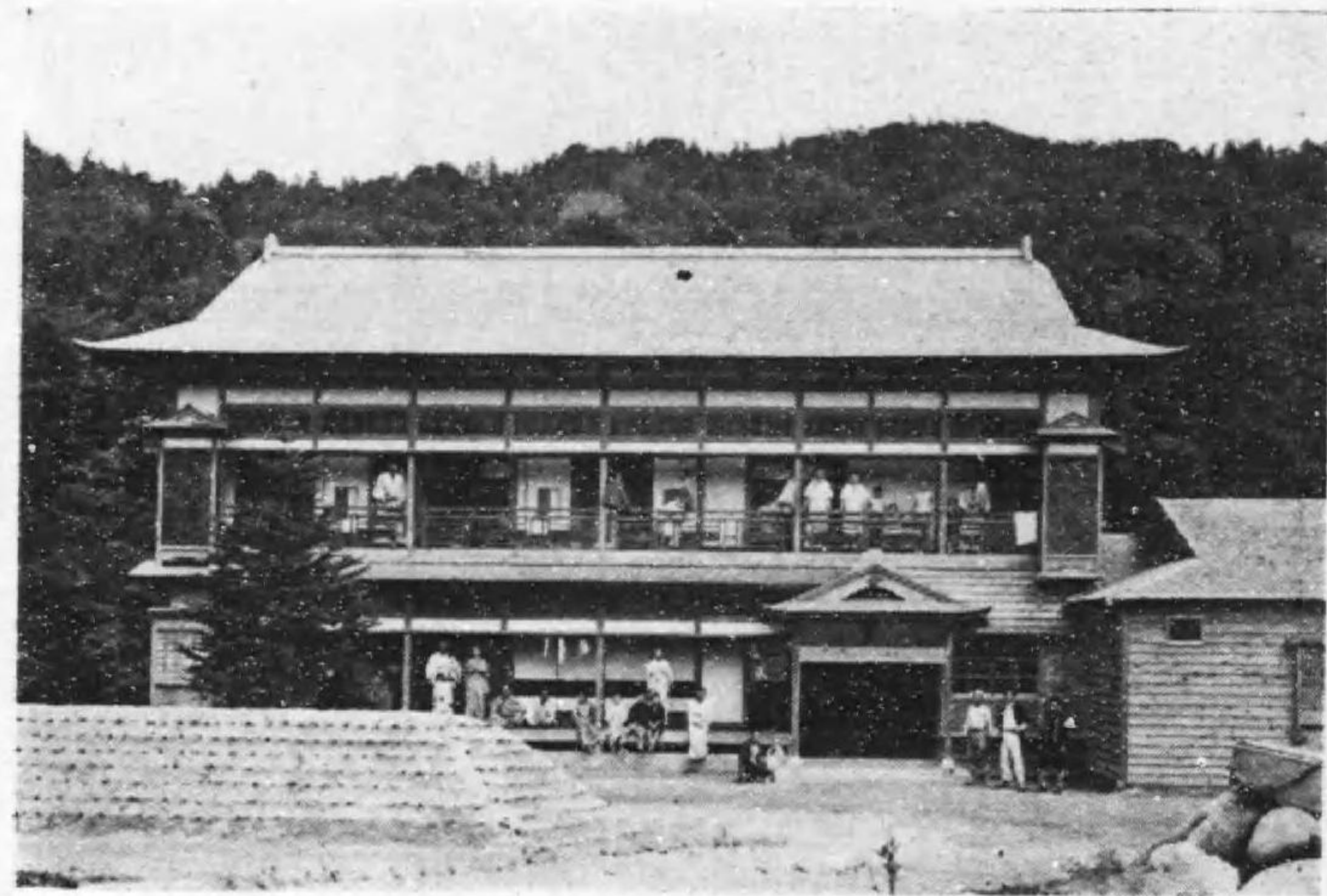
漢書 文化八年 左傳史記の此邑へ將來せしは、寶曆の初年、漢書は寛政の初年來る。  
 恐山祭典 文化九年 宇曾利山にて開基九百五十年の供養を、六月廿四日地藏の祭日に執行。  
 入湯錢 文化十年 下風呂湯錢は一人三十二文を、安永に五十文ミ増して村補たりしが、當年  
 の七日にて一人八十文。  
 火噴鳥 文化十年 三月廿二日 正津川七軒焼たりしが、鷗の如き鳥四羽炎の上に或は翔り見  
 へしと云へり。安永南町焼にも見へしと云へれば、火氣を嗜みて現はる、ならん。  
 牛瀧 文化十年 牛瀧は長後の枝村なりしを、近年長後は牛瀧の枝村となる。  
 兩頭の蛇 文化十年 佐井望遠局の許に兩頭の蛇、委々曲々として訝れる事三日に及て見しミ。  
 連錢栗毛 文化十一年 東通より連錢栗毛の見ゆ。  
 鶴雛と準 文政元年 脇野澤村松屋與兵衛の家の窓、鶴の雛翔入りしを献上す。文化丙寅の元  
 旦には下風呂八谷與左衛門の家の窓、準翔入れり。



# 大畑町消防組

- 組頭 池田 峰 八
- 第一部長 高橋 哲 四 郎  
 小頭 館村 善 五 郎  
 同 島 山 才 吉
- 第二部長 新保 又 太 郎  
 小頭 矢本 吉 太 郎
- 第三部長 國田 健 太 郎  
 小頭 畑山 重 太 郎





大畑薬研温泉  
古畑旅館

- ◇元録以來連綿として御愛顧を蒙り營業致して居ります
- ◇御湯治御宿泊、団体、御旅行の御宿泊、避暑又は觀楓の御宿泊すべて御勉強申上げます
- ◇初夏の新緑、秋の紅葉、川には鮎釣山べ釣などの行樂があります



資本金 壹千八拾萬圓  
諸積立金 壹百貳拾五萬圓  
創立 明治十一年

株式會社 弘前市親方町

第五十九銀行

電話五十九番

田名部町

田名部支店

電話四番

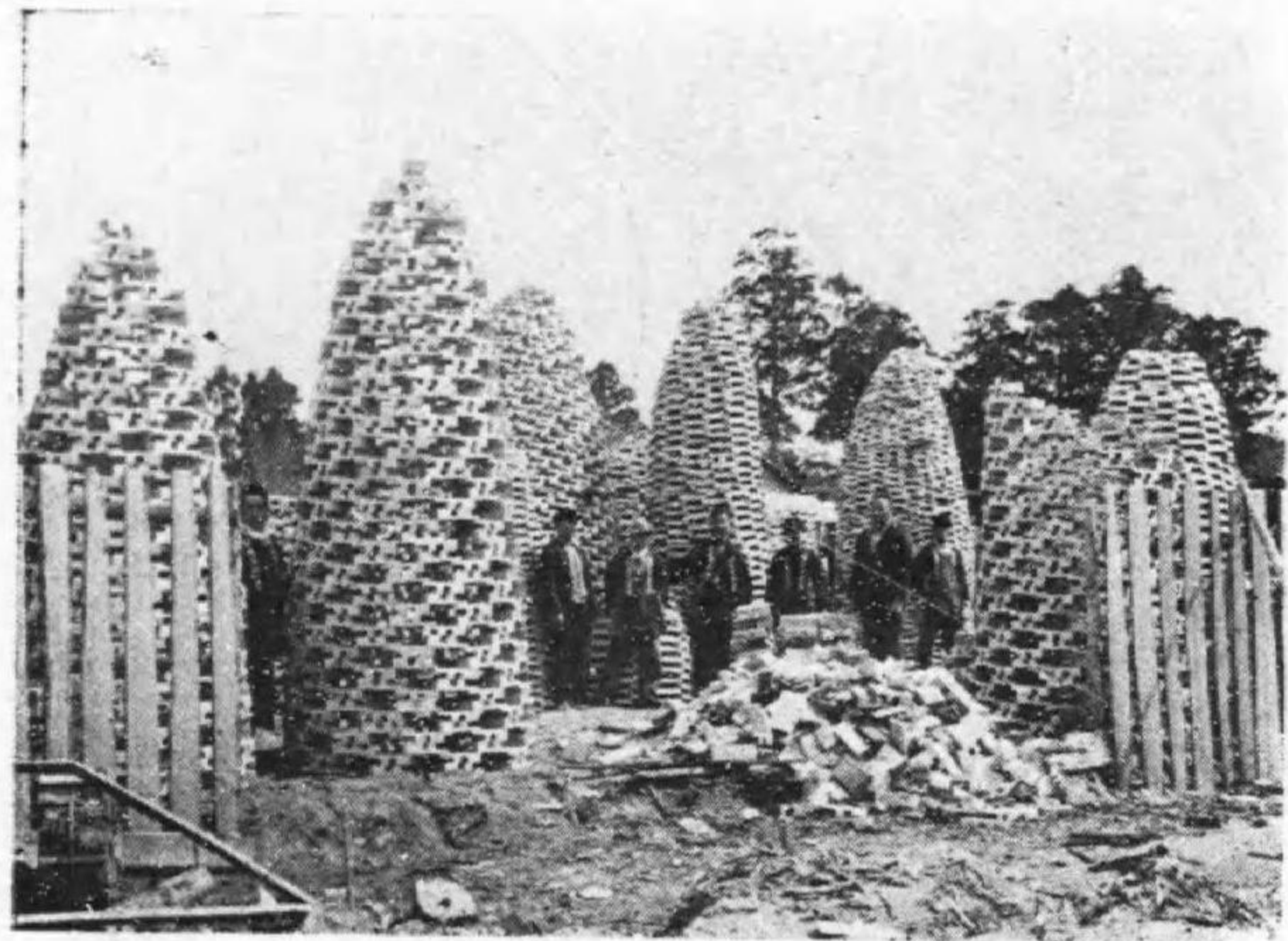
大畑町

大畑出張所

電話十五番

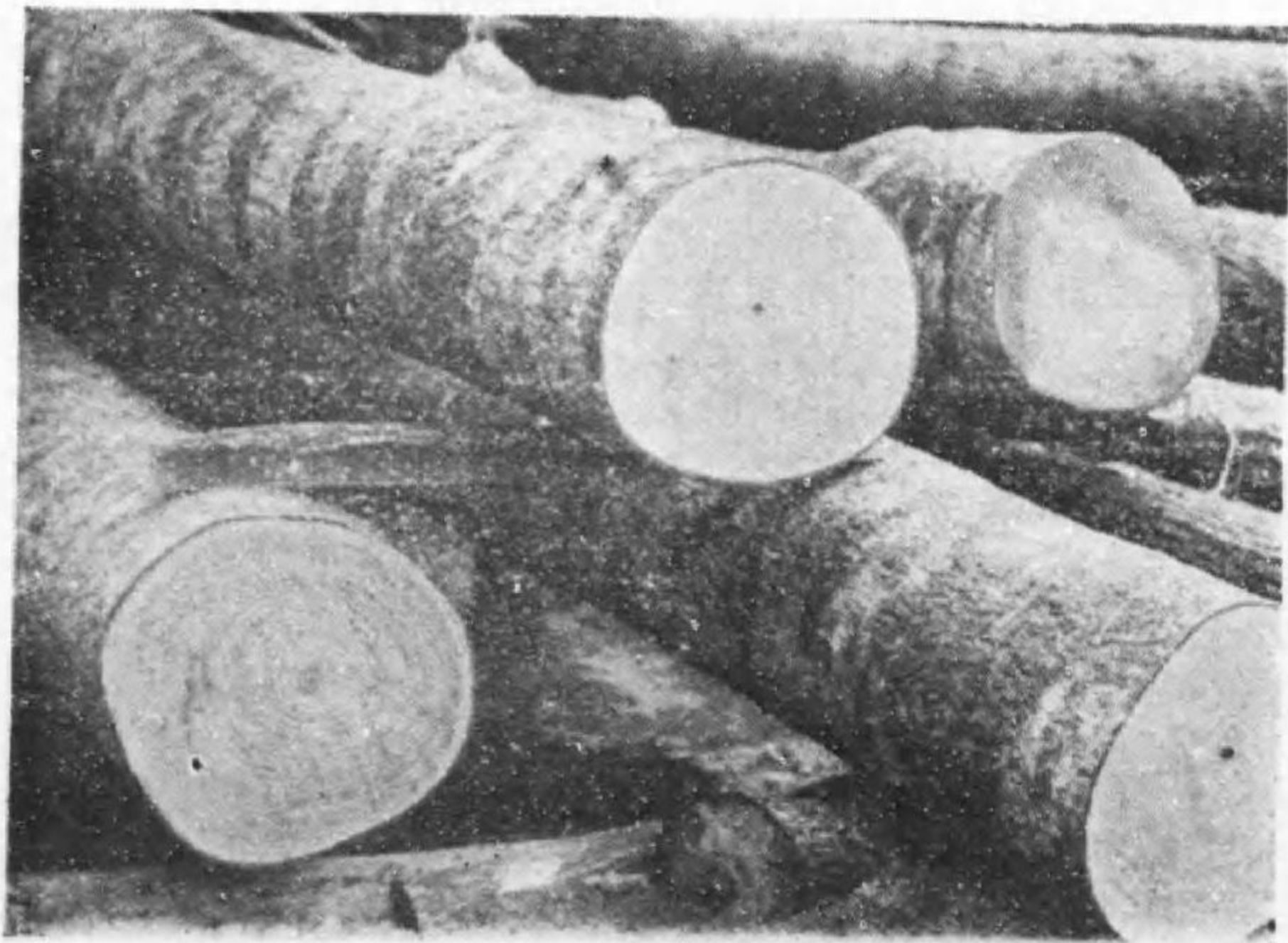
(寫眞は田名部支店)



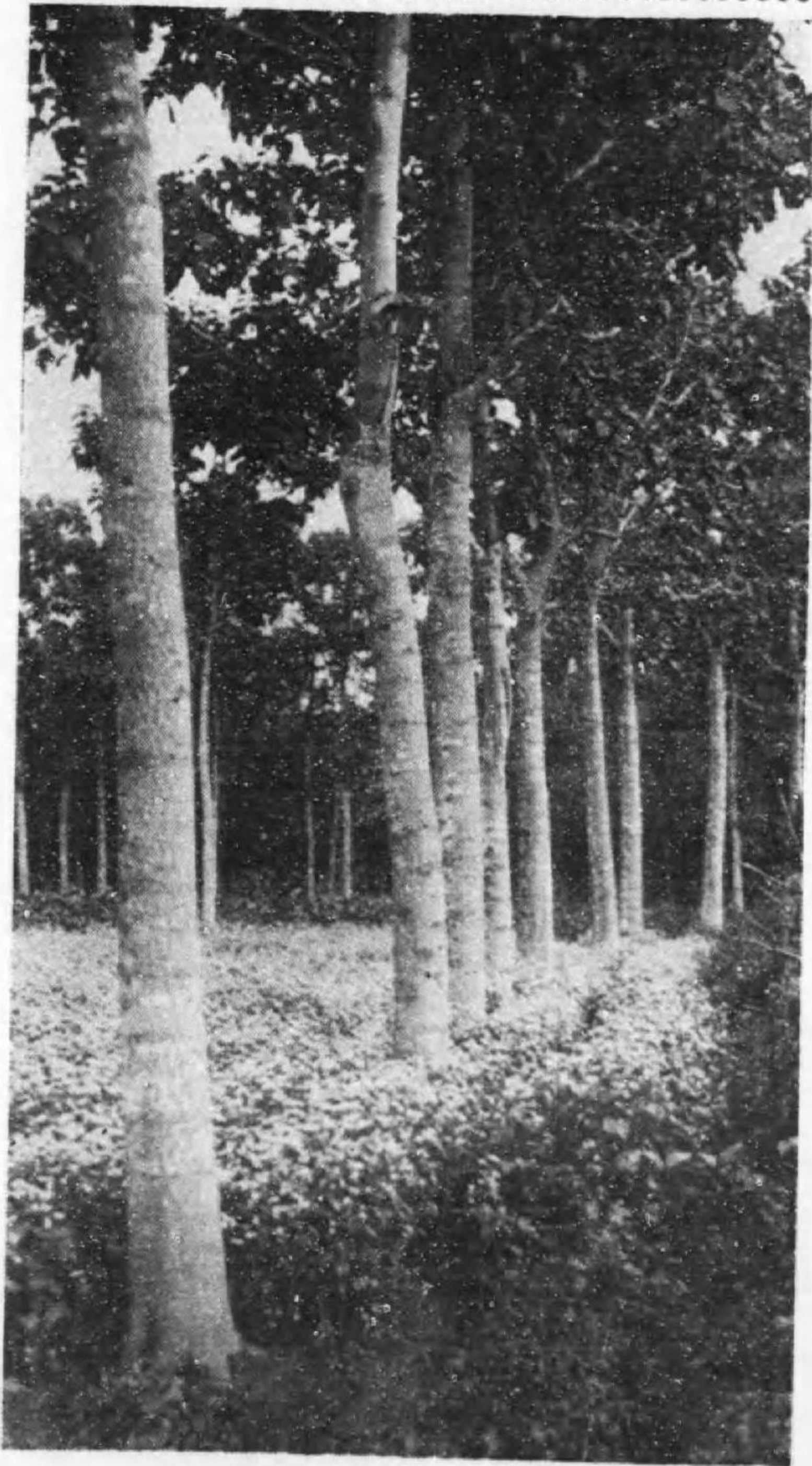


(椴澤商店買取材)

◇ 取木駄下椴桐 ◇



◇ 五十三輪年——桐産代川 ◇



青森縣下北郡大畑町

桐材商 二 椴澤熊吉商店

振替仙台六〇〇九番

名目小  
養培助之悦上北

桐畑壹反歩  
樹齡二十年

(椴澤商店  
買取山)



ヒバ材。杉松材。

大畑中嶋



# 西方製材所

電話番

所主 西方鐵藏

主任 西方卯之助

明治生命保險會社代理店



建築材  
建具材  
枕木材

大畑町中島

# 千葉製材所

電話十六番

千葉兵藏

大畑新町

# 山上自動車部

電話二番

田名部本町

# 山上旅館部

電話九番



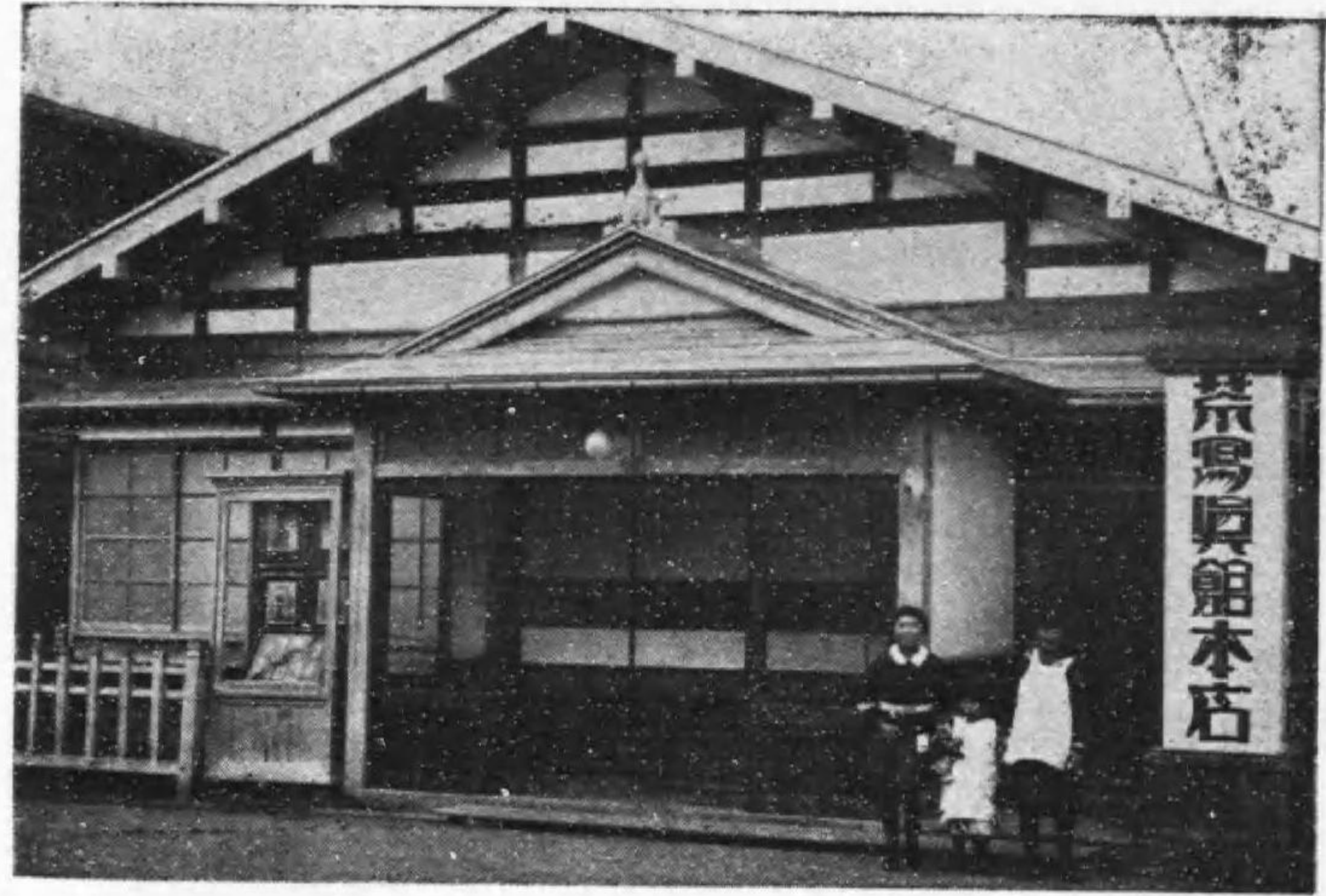
# 大畑町役場

町長	森 又四郎
助役	伊藤 金治
収入役	石澤 喜代太
書記	村林 源助
"	山田 久夫
"	大竹 淳
"	坂井 小三郎
"	田中 小四郎
"	保田 喜逸
農業技手	相馬 力藏

# 大畑町會議員

田畑 末治	矢本 剛三
氣仙 興助	林 竹治
堺 謹太郎	長津 榮吉
畑中 貞次郎	澤口 三之丞
山上 常作	足立 俊治
佐藤 和三郎	千葉 兵藏
高田 初太郎	熊谷 豊太郎
佐藤 五郎松	池田 峰八
山本 福松	森 菊太郎

(議席順)



優美美術寫眞

田名部町

荒寫眞館

大湊町

荒支店

御下命次第

郡内各地へ

出張します



# 大畑町立病院

院長 高橋 奉喜  
 副院長 音喜多兼太郎  
 書記 相馬 榮吉  
 産婆 佐藤とさむ  
 看護婦 北村 さい  
 看護婦 伊藤 幸吉  
 雇

大安寺

長岡 泰隣

寶國寺

池 察三 明

心光寺

佐々木 亮光

## 正津川村中

總代人 松尾 新藏  
 副總代 中島 與太郎  
 協議員 畑中 菊治  
 畑中 末治  
 田畑 吉太郎  
 氣仙 由五郎  
 湊谷 末松  
 氣仙 末松  
 國田 健太郎  
 川端 又右衛門

## 小目名村中

總代人 山田 源藏  
 同 山田 勝太郎  
 同 柏谷 清五郎  
 同 畑中 彌惣助

正教寺  
 竹園 義雄

本門寺

保志 泰顯

## 正津川常小學校

中村 秀太郎  
 長谷川 ソナ  
 飯田 正三郎  
 濱谷 忠

關根橋總代人

澤田 末藏

## 木野部處女會

會長 阿部 新藏  
 副會長 笠島 陸郎  
 幹事 竹内 コヨ  
 同 川畑 ハナ

## 正津川處女會

會長 中村 秀太郎  
 班長 川口 キエ  
 畑中 キス  
 田畑 タミ  
 松本 キヲ  
 四戸 ヨノ



大畑漁業組合

理事 塚 謹太郎  
同 林 竹 治郎  
同 高橋 綱太郎  
監事 田畑 末治  
同 越後 林理一  
書記 磯谷 徳次郎

大畑町青年團

團長 鎌田 東洋  
副團長 伊藤 金治  
同 菊池 察明  
幹事 田中 小四郎  
同 佐藤 貞次郎  
同 角本 福四郎

大畑營林署長

小野田 吉平

大畑町處女會

會長 鎌田 東洋  
副會長 伊藤 金治  
同 濱田 小四郎  
幹事 田中 小四郎  
外 同

大畑尋常小學校

鎌田 東洋 穴澤 敏夫  
工藤 秀松 阿部 新藏  
松林 正造 瀨川 彦三郎  
菱谷 險三 鎌田 ふさ  
川畑 幸次郎 濱田 小四郎  
甲 孝助 山本 みづ  
佐藤 貞次郎 宮浦 ケイ  
太田 きみ 中村 一雄  
工藤 祐吉 濱田 久治  
矢本 タケヨ 遠山 カツ  
筒井 ツカ 尾本 史郎  
花田 運藏 三上 勝治  
神 菊江

正津川青年團

團長 中村 秀太郎  
副團長 田畑 萬壽男  
幹事 川口 志郎  
同 氣仙 清太郎  
同 佐藤 儀次郎  
同 笹田 英一  
同 畑山 松之助

木野部至誠會

會長 阿部 新藏  
副會長 眞田 忠久  
幹事 眞田 忠久  
同 柳 重次郎  
同 竹中 敬五郎  
同 竹內 岩次郎  
同 白濱 義三郎  
同 眞田 忠久  
同 神田 久三郎  
同 部長 作郎

赤川青年團

團長 二本 柳勝太郎  
副團長 澤口 勝美  
幹事 川本 吉助  
同 二本 柳市太郎  
同 金平 初太郎  
同 二本 柳與市郎  
同 山田 初太郎

小目名青年團

團長 畑中 平治  
副團長 畑中 惣一助  
幹事 松本 和助  
同 柏谷 金助  
同 畑中 貞次郎  
同 畑中 菊松  
同 運動 長  
同 副 長

關根橋青年團

團長 佐藤 平之助  
副團長 佐藤 一助  
幹事 柳澤 勝太郎  
同 澤田 平太郎  
同 山口 末太  
同 山田 清太郎  
同 佐藤 末次郎  
同 佐々木 佐太郎

關根橋處女會

會長 澤田 菊之助  
副會長 木村 すすが  
同 二本 柳ゆき  
同 柳澤 木よの  
同 佐藤 木みわ  
同 佐藤 木みわ  
同 澤田 さみ  
同 澤田 たつ



米穀  
酒類  
雜貨  
大畑新町  
坪田正雄  
醤油、砂糖、石油、麥粉

金物  
漁具  
荒物  
大畑新町  
木村熊吉  
電話一〇番  
東京海上火災保險會社代理店  
昭和生命保險會社

桶材  
建築  
用材  
大畑新町  
奥山勘三

大畑消防組第一部長  
建築  
請負  
高橋哲三郎

輕油  
重油  
燈油  
大畑孫次郎間  
田高長次郎  
振替小樽九八四六番

榻材  
用材  
枕木  
大畑新町  
畑中製材所

御旅館  
正榮館  
電話二十八番

大畑  
カフエー  
銀座  
電話呼四番

御料理  
大畑  
むつ家  
電話十一番

大畑町  
下平醫院  
電話三番  
下平宗一

大畑  
榎末治  
電話十三番

酒類、味噌、醬油、酢

大畑町  
千歲屋鳴海商店  
銘酒  
南部自慢發賣元

二枚橋青年團

赤川處女會

青森縣水產試驗所大畑分場  
飯村實

大畑中央  
カフエー  
滿洲  
電話呼四番  
工藤孫三郎

大畑中島  
カフエー  
ツバメ

大湊電燈株式會社  
大畑散宿所  
電話三八番



祝大畑町誌發刊

河竹榮藏  
寺島友次郎  
川島準平

田名部驛 田名部 大畑 下風呂 易國間 大間

田名部町

大畑 下風呂 大間 行定期自動車

白濱自動車商會

店主 白濱友次郎

大畑支店 電話三十三番

下風呂駐車所 電話十五番

大間駐車所



祝大畑町誌發刊

川島徳彦  
山本八三郎  
山本健吉

祝大畑町誌發刊

山崎岩男  
山本健吉  
山本武



下北郡水産會

大畑検査所

下北郡木炭組合

大畑検査所

昭和九年十一月七日印刷  
昭和九年十一月十五日發行

定價一部 金六拾錢

青森縣下北郡田名部町字小川町三十四番地  
編輯人 笹澤善八

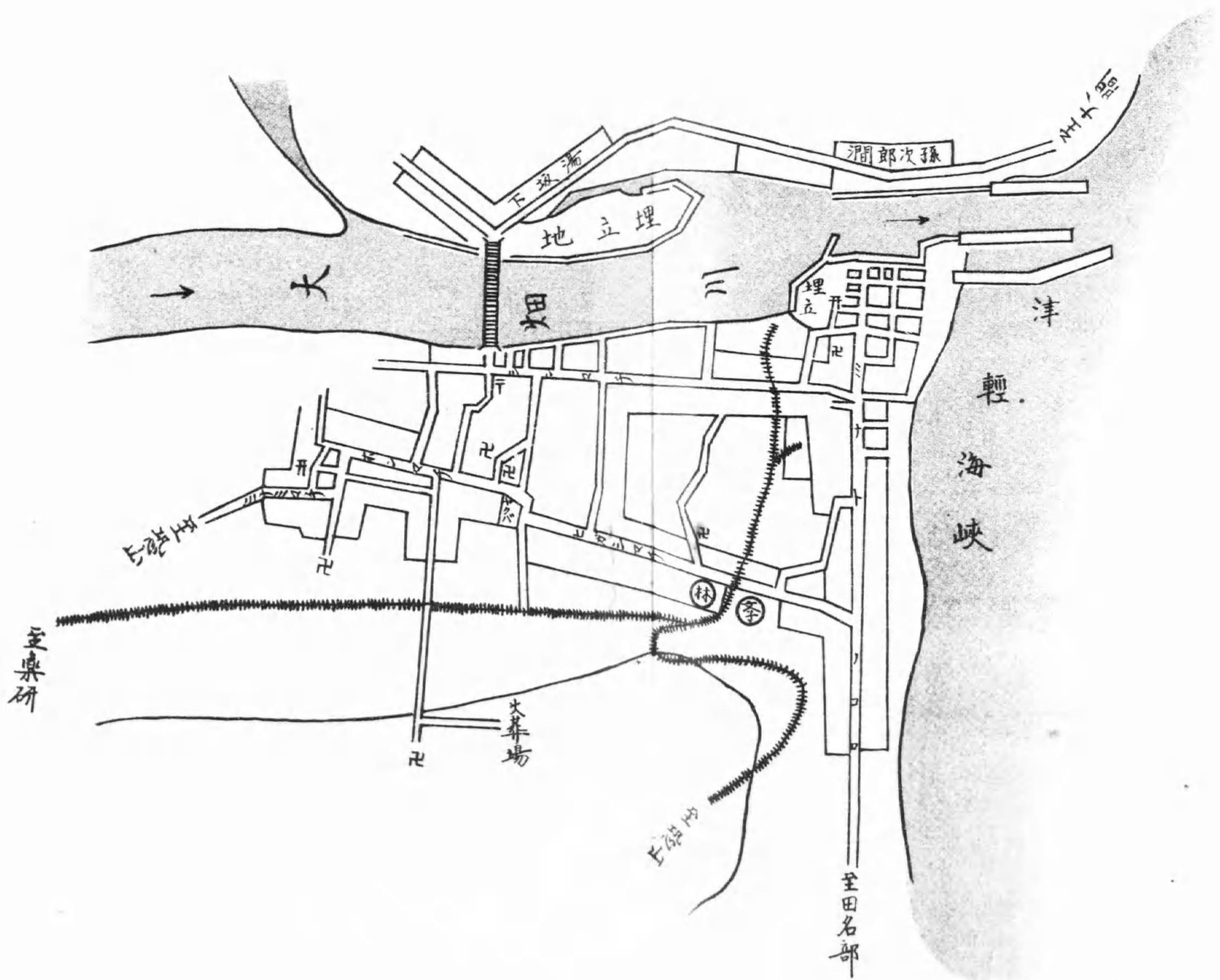
青森縣下北郡田名部町字小川町三十四番地  
發行所 下北新報社

青森縣青森市寺町七十四番地  
印刷人 蝦名彌太郎

青森縣青森市寺町七十四番地  
印刷所 青森印刷株式會社



大畑町市街圖





終

